

## ベルクソン哲学に対するH. スペンサーの影響の研究

著者	北 夏子
発行年	2016
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2015
報告番号	12102甲第7601号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00143714">http://hdl.handle.net/2241/00143714</a>

筑波大学博士(文学)学位請求論文

ベルクソン哲学に対する

H. スペンサーの影響の研究

北 夏子

2015 年度

## 凡例

### 1 ベルクソンの著作について

- 1) 本文中のイタリックは傍点で表記した。引用文中の (… ) は引用者による省略である。引用文中の丸括弧内の欧文は引用者による。
- 2) 多くの翻訳を参照した。特に参照させていただいた翻訳は以下に示す通りである。
- 3) つぎのベルクソンの作品の引用には以下の略号を用いた。またベルクソンの引用には現行の P.U.F., Quadrige 版の頁数を記した。

DI: *Essai sur les données immédiates de la conscience*, 1889. (邦訳『時間と自由』、ベルグソン全集 1、平井啓之訳、東京：白水社、1965 年、『意識に直接与えられたものについての試論——時間と自由』、合田正人、平井靖史共訳、東京：筑摩書房、2002 年) 本文中では『直接与件』と表記

MM: *Matière et mémoire*, 1896. (邦訳『物質と記憶』、ベルグソン全集 2、田島節夫訳、東京：白水社、1965 年、『物質と記憶』、熊野純彦訳、東京：岩波書店、2015 年)

R: *Le rire*, 1900. (邦訳『笑い』、ベルグソン全集 3、鈴木力衛、仲沢紀雄共訳、東京：白水社、1965 年)

EC: *L'évolution créatrice*, 1907. (邦訳『創造的進化』、ベルグソン全集 4、松浪信三郎、高橋允昭共訳、東京：白水社、1966 年、『創造的進化』、合田正人、松井久共訳、東京：筑摩書房、2010 年) 本文中では『進化』と表記

ES: *L'énergie spirituelle*, 1919. (邦訳『精神のエネルギー』、ベルグソン全集 5、渡辺秀訳、東京：白水社、1965 年)

DS: *Les deux sources de la morale et de la religion*, 1932. (邦訳『道徳と宗教の二源泉』、ベルグソン全集 6、中村雄二郎訳、東京：白水社、1965 年) 本文中では『二源泉』と表記

PM: *La pensée et le mouvant*, 1934. (邦訳『思想と動くもの』、ベルグソン全集 7、矢内原伊作訳、東京：白水社、1965 年、『思想と動くもの』、河野与一訳、東京：岩波書店、1998 年)

講義録、論稿集、書簡集からの引用に関しては以下の略号を用いた。

CI-IV: *Cours I-IV*, édité par H. Hude et als., Paris: P.U.F., I : 1990, II : 1992, III : 1995, IV : 2000. (邦訳『ベルクソン講義録 I 心理学講義／形而上学講義』、合田正人、谷口博史共訳、東京：法政大学出版局、1999 年、『ベルクソン講義録 II 美学講義 道徳学・心理学・形而上学講義』、合

田正人、谷口博史共訳、東京：法政大学出版局、2000年、『ベルクソン講義録 III 近代哲学史講義／靈魂論講義』、合田正人、江川隆男共訳、東京：法政大学出版局、2000年、『ベルクソン講義録 IV ギリシャ哲学講義』、合田正人、高橋聡一郎共訳、東京：法政大学出版局、2001年)  
M: *Mélanges*, Paris: P.U.F., 1972. (邦訳『小論集 I』、ベルグソン全集 8、花田圭介編、花田圭介、加藤精司共訳、東京：白水社、1966年、『小論集 II』、ベルグソン全集 9、松浪信三郎編、掛下栄一郎、富永厚、秋枝茂夫共訳、東京：白水社、1965年)  
C: *Correspondances*, Paris: P.U.F., 2002.

以下の著作集も参照した。

*Œuvres, édition du centenaire*, Paris: P.U.F., 1959.

## 2 スпенサーの著作について

- 1) 本文中のイタリックは傍点で表記した。引用文中の (…) は引用者による省略である。引用文中の丸括弧内の欧文は引用者による。
- 2) 以下に示した邦訳書を参照させていただいた。
- 3) つぎのスเปนサーの作品の引用には以下の略号を用いた。またスเปนサーの引用には現行の Otto Zeller 版の頁数を記した。

*Collected Writings*, with new introductions by M. Taylor, London, 1996.

*The Works of Herbert Spencer*, edited by D. Appleton, Osnabrück, Otto Zeller, 1966-1967.

FP: *First Principles*, 1966 (1862). (『世界大思想全集 28 第一原理』、沢田謙訳、東京：春秋社、1927年)

PP: *The Principles of Psychology*, 2vols., 1966 (1855).

E: *Essays, Scientific, Political and Speculative*, 3vols., 1966 (1858-1874).



2	1887年から1888年(1)	36
2-1	科学と哲学についての講義	36
2-2	美学講義	40
3	1887年から1888年(2)	41
3-1	心理学講義	41
3-2	1889年の前年(『直接与件』公刊に向けて)	45
4	本章のまとめの考察	46

#### 第四章 1888年頃のベルクソンによるスペンサー心理学批判について(1)

##### ——「優美」(grâce)

	本章の検討課題	52
1	『直接与件』の主題——自由	52
2	『直接与件』のなかのスペンサーの思想への言及	53
3	『直接与件』における「優美」	54
3-1	「優美」を扱う理由	56
3-2	「優美」の発生	56
3-3	程度を持つ「優美」	57
3-4	運動が「優美」を欠く場合とそれと対照的な 曲線の考察から見て取れる未来の在処	58
3-5	未来	59
3-6	主体の交替	60
3-7	知覚の創造と未来の在処	61
3-8	「共感」	62
3-9	『直接与件』における「優美」についてのまとめ	64
4	スペンサーにおける「優美」(gracefulness)について	65
4-1	「努力」の節約ではなく「力」の節約としての「優美」	66
4-2	曲線運動について	67
4-3	スペンサーの「力の節約」について	69
4-4	スペンサーにおける「優美」と「共感」(sympathy) ——まとめの考察	70

5 本章のまとめの考察.....	71
第五章 1888年頃のベルクソンによるスペンサー心理学批判について (2)	
——「恐怖」 (frayeur)	
本章の検討課題.....	74
1 『直接与件』における「恐怖」.....	75
2 『直接与件』第一章における「激しい情動」.....	75
3 スペンサーにおける「恐怖」 (fear) について.....	78
4 「一」と「多」から「全体」と「部分」の議論へ.....	80
5 心理学講義.....	81
6 本章のまとめの考察.....	83
第六章 『創造的進化』を読み直す スペンサー批判の観点から (1)	
——「単純さ」と「複雑さ」	
本章の検討課題.....	87
1 ベルクソンのスペンサー批判——『進化』第一章.....	87
1-1 スペンサーに直接言及している箇所の検討.....	88
1-2 「獲得形質の遺伝」が特に重要である理由	
——遺伝=移行・伝達という考え方.....	89
A. ネオ・ダーウィン主義者たちの努力.....	90
B. アイマーの努力.....	91
C. ネオ・ラマルク主義者たちの努力.....	91
1-3 まとめ考察.....	92
2 生の弾み——「類似」 (analogue) の考察がもたらすもの.....	93
2-1 「努力」が開く扉——本源的な弾み.....	93
2-2 眼、または構造の「複雑さ」と機能の「単純さ」.....	94
A. 一般的議論——「単純さ」は対象そのものに属している.....	95
B. 芸術のアナロジー——「単純さ」と「複雑さ」の順序.....	96
C. 運動は二つの様相を呈する	
——運動に帰された「単純さ」と	

それを再構成する際に認められる「複雑さ」 ..... 98

D. 製作と有機的組織化

——自動的分割を理解することの困難は

わたしたちが何かを作り上げるその過程にある ..... 100

2-3	まとめの考察 .....	103
3	全体と部分 .....	103
3-1	全体と部分 (1) 科学批判 .....	104
3-2	全体と部分 (2) 鉄くずの比喻 .....	106
3-3	全体と部分 (3) 努力——抵抗を前提にした非物質的な力 .....	108
4	本章のまとめの考察 .....	111

第七章 『創造的進化』を読み直す スペンサー批判の観点から (2)

——「知性」と「本能」そして「共感」 補足し合う生命

	本章の検討課題 .....	114
1	スペンサーへの言及 .....	114
2	「類似」ではなく「補足」 (complément) .....	115
	A. 社会 .....	116
	B. 「動物」と「植物」 .....	117
	C. 「脊椎動物」と「節足動物」 .....	119
3	「知性」の定義 .....	121
4	「本能」の定義、あるいは「共感」 .....	126
5	本章のまとめの考察 .....	131

第八章 『創造的進化』を読み直す スペンサー批判の観点から (3)

——スペンサーを補足する

	本章の検討課題 .....	134
1	知性の発生 .....	134
1-1	スペンサーへの言及 .....	135
1-2	バルクソンの知性発生論 .....	137
1-3	「精神性」と「物質性」 .....	139



2 知性発生論と「共存」の概念.....	141
3 スпенサー進化論批判からみた『進化』読解の帰結——『進化』第四章.....	144
3-1 スペンサーへの言及 .....	145
3-2 スペンサーの魅力と問題点 .....	146
3-3 「変化が諸事物の実体そのものとされるような学説」 .....	149
4 本章のまとめの考察.....	156
結論.....	159
参考文献.....	163

## 序章 ベルクソン哲学に対する H. スпенサーの影響の研究

本論文は、十九世紀から二十世紀に生きたフランスの哲学者アンリ・ベルクソン (Henri Bergson, 1859-1941) についての研究である。

ベルクソンの思想についてよく知られているのは、何よりも、「持続」という概念を中心に据えた哲学を遺したということであろう<sup>1</sup>。ベルクソンには大きく分けて4つの代表的な著作がある<sup>2</sup>。『意識に直接与えられたものについての試論』（以下、『直接与件』と略記）では二元論と自由について、『物質と記憶』では精神の不滅について、『創造的進化』（以下、『進化』と略記）では持続する生命による進化論が、『道徳と宗教の二源泉』（以下、『二源泉』と略記）では社会的進化論とも言うべき思想が、それぞれ述べられている。彼は他に、『精神のエネルギー』と『思想と動くもの』という短い論文を集めた論文集、それに『笑い』という短い著作を出版しているが、これらの諸著作のうちにも「持続」に基づく思想が見られる。彼が最初の著作で示した「持続」を、彼自身が途中で否定するようになったというようなことはベルクソンにはなかった。このような特徴が見られるが故に、従来のベルクソン研究では、数多の「持続」についての研究があり、「持続」がベルクソンにおいては生命的であり時間的なものであり連続性を備えるとされるが故に、ベルクソンにおける「生命」や「時間」及び「空間」といった概念や、各著作における諸概念が、どのようにして「持続」中心の思想と関連づけられるかという解明がなされてきた<sup>3</sup>。今のところ、神秘主義との関係におけるベルクソン、またフランス哲学の中でのベルクソンの位置づけ、あるいはベルクソンからハイデガーに至るドイツとの関係のなかでのベルクソンの位置づけについては、ある程度理解が深まっていると言える<sup>4</sup>。

一方で、わたしたちにはまだ明らかにされずに残されたままの領域がある。それはベルクソンとイギリスにおける思想、それも十九世紀から二十世紀のイギリスの思想との関係であり、特にハーバート・スペンサー (Herbert Spencer, 1820-1903) との関係についての研究である<sup>5</sup>。ベルクソンは最初の著作である『直接与件』において既にハーバート・スペンサーに言及し、それを言わば批判対象として扱うかたちで彼独自の哲学を伝えている。『物質と記憶』では僅かしか言及されなくなるものの、『進化』においては最後がスペンサーの思想批判になっており、その構成上、生物進化の到着点である人間の思索的営みにおける思想的深化の、『進化』以前に到達された最終地点としてスペンサーを扱い、それを批判することで自らの進化論こそが最も新しく正当なものであると主張しているのである。『二源泉』でもやはりスペンサーは扱われているし、回顧的著作である『思想と動くもの』では、ベルクソン自らの哲学的思索の出発点に

スペンサーの哲学があったことをベルクソンは伝えている。そして、ベルクソンの思想の要である「持続」につながる「時間」について考察する重要性が、スペンサーを批判的に検討することを通じて見出されたことすら告白している。ベルクソンがこのように述べているために、従来の研究ではベルクソンの哲学はスペンサーを否定して成立したのであり、スペンサーからの影響はほとんど受けていないとされてきた。しかし、この『思想と動くもの』があくまで「回顧的な」著作である、言い換えれば、必ずしも真実を伝えているわけではないことを、これらの研究は軽んじているのではないか。

本研究のテーマは、ベルクソン哲学に対する H. スペンサーの影響である。本論文ではこれまでの諸研究に反して、ベルクソンは従来の研究が明らかにしてきた以上に、スペンサーから決定的な思想的影響を受けているというテーゼを主張する。このテーゼは、ベルクソンが回顧的に述べている著作である『思想と動くもの』の扱いに必然的に留保を求めるものにもなるだろう。

本研究では、ベルクソンのテキストのなかでスペンサーとの関係を示しているものを執筆年代順にピックアップし、スペンサーの著作と照らし合わせながらその内容を分析し、影響関係を考察する。この作業を経て、振り返った時に、私たちにはスペンサーとベルクソンとの関係について何が言えるだろうか。わたしたちがスペンサーを扱うのは、単に『思想と動くもの』においてスペンサーの重要性が語られているからではなく、『直接与件』が出版される以前の諸講義のなかですでに、ベルクソンはスペンサーに多くの箇所で触れ、その哲学に傾倒しているさまが見られるから、ということになるだろう。同時にこの研究は、ベルクソンはスペンサーの何を取り入れたのかを明らかにし、ベルクソンが回顧的に述べる事態すなわち、「持続」が具体的にはスペンサーにおけるどのような考えを批判することによって誕生したのかについて明らかにするだろう。この研究はこれまでベルクソン哲学理解のメインストリームではなかった「共感」という概念のベルクソン哲学における重要性も明らかにするだろう。

本研究が示すことになるのは、ベルクソンが「時間」の不在がスペンサー批判の主要部分であったと述べているにもかかわらず、ベルクソンを彼独自の哲学へと推し進めたのはスペンサー哲学における「時間」の不在ではなく、「共感」の存在であったこと、それが、ベルクソンがその哲学に独自性を持つに際して重要になったということである。

ベルクソンの思想全体におけるスペンサー哲学からの影響の解明に向けて、本研究では次のような手順をとる。第一章では、本研究の主題とテーゼを提示する。第二章では、本研究が用いる方法について考察する。第三章と第四章、そして第五章では、1907年に発表された『進化』

以前にスペンサーの思想に対してなされたベルクソンの思索が示されている講義録及び『直接与件』を扱い、それらを時系列順に辿り、考察を加える。それまでのスペンサー批判を含め、その展開を示す第六章、第七章、そして第八章が本研究の主要な部分となる。そして最後に、結論と今後の課題を述べる。

こうした考察の末に本研究が提示する中心的なテーゼは、ベルクソンは従来の諸研究が明らかにしてきた以上にスペンサーの思想から影響を受けている、というものである。

<sup>1</sup> 「ヘフディングへの返信の中でもベルクソンは、たしかに理由をすべてあげているわけではないにしても、回顧的な解明にきっぱりと抗議している。その際、ベルクソンは自らの学説の中心が「直観」であるよりもむしろ「持続」であると申し立てる。たしかに直観の形而上学というだけならベルクソニズムはあまたある体系のひとつにすぎない。しかし持続の経験がベルクソニズムの真実で内的な様式を決定しているわけである」、Vladimir Jankélévitch, *Henri Bergson*, Paris: P.U.F., 1959, p. 6 (邦訳『アンリ・ベルクソン』阿部一智、桑田禮彰共訳、新評論、1988年、p. 14)。ジャンケレヴィッチが参照するのは、ベルクソンによるハラルド・ヘフディング (Harald Höffding, 1843-1931) に宛てた 1915年3月15日付けの書簡のなかに見つけることができる次の言葉である。「わたしの意見によりますと、わたしの思想を要約したものすべては、もしそれがそのそもそもの最初から、わたしが自分の思想の核心と考えているところのもの、すなわち持続の直観 (l'intuition de la durée) に密着しているのではないかぎり、そしてたえずその直観にかえってくるのではないかぎり、全体として見て必ずや私の思想を歪曲させ、同時にたくさんの反論をまねくことでありましょう。(…) 直観の理論 (la théorie de l'intuition)、あなたはそれについて持続の理論 (celle[: théorie] de la durée)について以上に多くの論評を加えておられますが、それは、持続の理論よりもはるかに長い時間を経た後わたしの脳裡にあらわれたものであります。すなわちそれは持続の理論に由来するものであり、またそれによってのみ構成されるのであります。」(M, 1146-1147), (C, 626) 「持続の直観」という言い方も見られるが、しかし、この書簡では、「理論」として各概念を思索的に展開した場合には、「直観」の理論は「持続」の理論に基づくと伝えていることに注意したい。こういった注意のもとに、ジャンケレヴィッチは、「ベルクソンは自らの学説の中心が (…) 「持続」であると申し立てる」と述べているものと思われる。また、一般的にベルクソン哲学における「持続」が重要な概念として見做されていることのうちにもこのような理解があるものと思われる。

<sup>2</sup> 4つの著作とは、すなわち、『意識に直接与えられたものについての試論』、『物質と記憶』、『創造的進化』、『道徳と宗教の二源泉』のことである。

<sup>3</sup> ベルクソン研究の代表的なものとしては、Gilles Deleuze, *Le bergsonisme*, Paris: P.U.F., 1966 (邦訳『ベルクソンの哲学』宇波彰訳、法政大学出版社、1974年)、杉山直樹『ベルクソン 聴診する経験論』創文社、2006年、等。

<sup>4</sup> 比較研究には次のものがある。Madeleine Barthélemy-Madaule, *Bergson, adversaire de Kant*, P.U.F., 1966., Dominique Janicaud, *Une Généralogie du spiritualisme française*, Nij-hoff, 1969., *Les Études philosophiques*, « Bergson et l'idéalisme allemande », Octobre-Décembre, 2001.等。これらの諸研究は、「単なる比較に留まらず、それを通じてのベルクソン哲学の逆照射に成功したと思われるもの」と思われるものである。評価については以下を参照。杉山直樹、村上(ママ) 達也、柳澤望、「ベルクソン著作解題・研究紹介」『ベルクソン読本』、法政大学出版社、2006年、p. 310。

<sup>5</sup> 第一章で詳述するが、杉山氏による部分的な研究(2006年)の他に、スペンサーとベルクソンの比較研究には次のものがある。Pierre d'Aurec 氏の研究(1947年)、Patricia Verdeau 氏の研究(2007年)、Hervé Barreau 氏の研究(2008年)、Arnaud François 氏の研究(2010年)、三宅岳史氏の研究(2012年)、および、Sébastien Miravète 氏の研究(2012年)。他にも、C. U. M. Smith 氏の研究(2010年)があり、この論文は両者の関係の複雑さを指摘するものではあるが、本文中では扱わずに、特に第一章の注のなかで扱うことにした。

## 第一章 ベルクソンにとってスペンサーとは何か

はじめに、本研究が何を主題にするのか、また、どのようなテーゼを措定するかについて明らかにしておきたい。そのうえで、本研究にとって重要な意味を持つことになるベルクソン研究である、杉山直樹氏の『ベルクソン 聴診する経験論』に触れたい。

### 1 本研究の主題

本研究の主題を述べるにあたって、まず、以下では、アンリ・ベルクソンの生涯と思想の全体の流れを概観しておくことにする。そのなかで、本研究が扱うハーバート・スペンサーの思想がベルクソン哲学全体のなかで重要な役割を持っていることを確認したい。そして、そのベルクソンとスペンサーの思想的関係について扱う昨今の有力な研究を確認することにする。その際には、諸研究における問題点も指摘したい。その上で、本研究の主題を明確に述べることにする。

#### 1-1 ベルクソンの生涯

ベルクソンの生涯を、彼が従事した職業と発表した作品を中心に整理すると以下のようになる<sup>1</sup>。

1859年10月18日。これがベルクソンの出生した日である。ベルクソンは、ユダヤ系のポーランド人であったミシェル・ベルクソンを父に、イギリス人の母の元に、フランスのパリ、ラマルチーヌ街に生まれた。1863年には、一家はスイスに移り住んだ。父親はジュネーヴの音楽学校の教授になったという。その後一家は1866年にパリに戻った。

1868年の10月、ベルクソンはリセ・コンドルセに入学する。1878年、高等師範学校（所謂エコール・ノルマル・スュペリウール）に入学する。1881年に教授資格国家試験（アグレガシオン）に合格し、10月5日にはリセ・アンジェの教授になる。1882年には女子高等学校の教授に、1883年9月28日にリセ・クレルモン・フェランの教授になる。1888年にはリセ・ルイ・ル・グランの教授に、続いてコレージュ・ロランの教授になる。この年に、『直接与件』を上梓する。翌年の1889年に『直接与件』及び副論文『アリストテレスの場所論』で文学博士になる。1889年にこの二論文は公刊される。1890年、リセ・アンリ四世の教授になり、1898年まで在職する。1891年、結婚する。1896年、『物質と記憶』を出版。1897年、コレージュ・ド・フランスの講師になる。1898年、エコール・ノルマル・スュペリウールの講師になり、1900年まで

在職する。1899年、「笑い」を發表し、翌年公刊される。1900年、コレージュ・ド・フランスの教授になる。1907年、『進化』を出版する。1919年、『精神的エネルギー』を出版する。1921年、コレージュ・ド・フランスへ辞表を提出する。1922年、『持続と同時性』出版する。1928年、ノーベル文学賞を受賞する。1932年、『二源泉』を出版する。1934年、『思想と動くもの』を出版。そして、1941年1月4日、フランス、パリ、サン・ラザール街の自宅で永眠した。

ベルクソンは、主要著作として4つの著作を残し、論文集としては2つの作品を、小さな著作としては2つ残した（その内の一つ『持続と同時性』は1931年以降ベルクソン自身によって再版を停止される）。ベルクソンは講師時代を比較的長く経験し、コレージュ・ド・フランスの教授にはなったが、所謂大学教授にはなることなく生涯を終えた。これが、学問の領域を中心に整理したベルクソンの生涯である。

## 1-2 ベルクソンの思想

先にベルクソンが公にした著作に触れたが、ここではそれらの著作がどのようなものであるかについて明らかにすることで、ベルクソンの思想の流れを概観する<sup>2</sup>。

1889年、ベルクソンが30歳の時に公刊したのが、第一の主要著作となる『直接与件』である。この著作では、「意識に直接与えられているもの」の中でもとりわけ「自由」を、疑いえない端的な事実であるとするのがベルクソンのテーゼである。ベルクソンは、自由をめぐる議論を「時間は空間によって過不足無く表現できるか」という問いに帰着させる。流れつつある時間、行為が行なわれる場である具体的な時間は、空間によって十全に表現することはできないとされる。自由とは、具体的な自我とその行為との間の関係であるとされる。真の自由な行為とは、人格のしるしを帯び、人格の全体を表現しているものであるとされる。

1896年、ベルクソンが37歳の時に公刊したのが、第二の主要著作となる『物質と記憶』である。この著作は、『直接与件』における議論を踏まえた上で、精神と物質の関係を規定しようとしたものである。従来の二元論を、「時間の関数において」再編し、心身の相互作用を記述し、両者の実在性を示すことを目的としている。ベルクソンが示すのは以下のことである。ベルクソンは、物質と精神を、持続のリズムあるいは緊張度の差異という「時間の関数において」区別し、かつ連続させることによって、この著作において、二元論の再編を試みている。

1907年、ベルクソンが48歳の時に公刊したのが、第三の主要著作となる『進化』である。この著作でベルクソンは、生命と認識をともに論じながら、一つの宇宙論を展開している、と言える。第一章では、生命ないし固有の実在性が主張される。第二章は、生命の本源的エラン

の内実を確かめるべく、その諸方向を探すものになっている。生命と物質という二つの実在の関係、知性と直観という二つの認識の有効性が、第三章で論じられる。第四章では、「無」という観念の批判と哲学史批判が展開される。最後にスペンサー哲学批判がなされ、スペンサーの進化論哲学は一つの突破であったが、実在的時間＝持続とそこにおける創造を取り逃がしたために、既成のパーツの組み合わせを進化と取り違える「偽の進化論」になってしまっていると述べられる。「真の進化論」をつくりあげるのがこの著作である。

1932年、ベルクソンが73歳の時に公刊したのが、第四の主要著作となる『二源泉』である。ベルクソンは、『進化』において、人類を創造の最先端に位置づけていた。人類はどこに向かおうとしていて、人類に新しさをもたらすような創造を促す起源があるとしたらそれは何だと考えられるか。これに対してベルクソンは、この著作で道徳や宗教といった事象についての探究することで答えようとする。人類は欲望へのこれ以上の狂乱は避けられるものなのだろうか。ベルクソンは新たな神秘家の出現はそうした狂乱を回避させようといい、人類が進むべき方向を指し示している。

既存のベルクソンの思想を概観する研究や報告を整理すると、ベルクソンが生涯追い求めたものが自ずと浮かび上がってくる。それは、わたしたち人間における「自由」を巡る問いである。問いかける内容が著作ごとに変ったとしても、それぞれの著作でベルクソンは「わたしたちは自由である」というテーゼを立証していく。第一の著作から、第二の著作の精神の物質への非依存性の別の観点からの証明、第三の著作の、障害としての物質を乗り越えていくという生命の創造的なはたらきとしての自由、第四の著作の、欲望に基づいた現実から神秘家に導かれることによって飛躍的に切り開かれていくわたしたちのこれからの自由、このようにベルクソンは論じる場面を変えながらも一貫して、わたしたちがどのような意味・仕方であるかについて述べていると整理することができる。そして、わたしたちが自由であることを支えるものが「持続」という概念であるという構造になっている。だから、ベルクソンの哲学は「持続」に基礎を持つ哲学であり、「持続」によって一元的につくられているとも言い得ると考えられる。

### 1-3 ベルクソンとスペンサー

#### 1-3-1 スペンサー<sup>3</sup>との思想的関係

わたしたちは先に、諸研究書にもあたりながら、彼の主要著作を要約的に整理することでベルクソンの思想を概観した。ところで、ベルクソンにはベルクソン自身がみずからの生涯における研究についてのべた「緒論」を含む『思想と動くもの』という論文集があるのを先に見た。



わたしたちは、ベルクソン自身の言葉でまとめた、ベルクソン自身の仕事に対する考えを知ることができる。まず、このベルクソンの仕事の大まかな主張を確認することにしよう。

1934年に発行されたこの著作に収められた「緒論」でベルクソンが述べているのは、次のことである。ベルクソンは、哲学には従来「精確さ」が欠けていたと言う。そのような哲学が取り扱うことができなかつた現実にはまる哲学が必要だと言う。若い頃ベルクソンはスペンサー哲学に惹かれつつ、科学哲学的な問題関心において「時間」概念の検討に取りかかったが、そこで気づいたのは従来の時間概念の不精確さ、非現実性だった。それは新しい何かを生み出している。これが実在のありのままの姿であり、どんな存在も、「持続の相の下に」見られるのでなければ精確に把握されることはないだろうとされる。変化や運動は、不変の実体にあとから付け加わるのではない。むしろ変化や運動こそがそのまま実体なのである。ベルクソンはここにおいて、自分の哲学的思索が辿って来たことを回顧的に述べている。

ベルクソンとスペンサーとの関係は、研究書によって上にあげたようにまとめることができる。ここで、『思想と動くもの』「緒論」の中にあるベルクソン自身の言葉も具体的に示しておきたい。ベルクソンは、この『思想と動くもの』のなかで、次のように述べて、自らの哲学の出発点をわたしたちに知らせている。

「かつてわたしには一つの学説だけが例外のように思われたことがあったが、おそらくそれゆえに、ごく若いころわたしはその学説を信奉していたのである。スペンサーの哲学は、事物そのままの型をとること、事物の細部に準拠することを目指していた。もちろんそれはまだ漠然とした普遍性 (*généralités vagues*) に支点を求めてはいた。わたしは確かに『第一原理』の弱点 (*faiblesse*) を感じてはいた。しかしこの弱点は、著者の準備が不十分で力学の「究極の諸観念」 (*les « idées dernières » de la mécanique*) を深く研究できなかったためであるとわたしには思われた。わたしは彼の研究のこの部分を繕い、補足し (*compléter*)、強固にしたいと考えたのである。わたしは力の及ぶ限りそれを試みた。こうしてわたしは時間 (*Temps*) という観念の前に導かれて行った。そこに思いもかけないことがわたしを待ち構えていた」 (PM, 2)<sup>4</sup>。

ベルクソンが一番始めに出版した自身の著作である『直接与件』のなかでこのように述べてくれたら、わたしたちは迷わずスペンサーの著作にあたり、それとベルクソン自身が述べていることを比較し、そこからどのようにベルクソン自身の思想が作りだされていったのか考

えることになったはずである。しかし、ベルクソンはそのようにはしなかった。一番初めの著作ではベルクソンはスペンサーについて二カ所で、それも「時間」とは直接には繋がらない主題について触れているだけである。第四章及び第五章で詳述するが、『直接与件』には、ここでベルクソンが言及しているスペンサーの『第一原理』という著作名すら出てくることはない。だから、わたしたちがベルクソンの著作を公刊されたものに限って年代順に考察していくならば、スペンサーからどのような影響を受けているか探るという方法をとることはまずあり得ないと言って良いし、これまでベルクソンとスペンサーとの比較研究がほとんどないのも、そのことに部分的には由来しているはずである。先に概観したベルクソンの哲学の一般的理解においても、『進化』の概要に一部あらわれるとしても、スペンサーというトピックが表立って現れないのは、そのことに由来すると考えられる。わたしたちは『思想と動くもの』で、ベルクソンが告白しているこの内容から、スペンサーの哲学に触れたことでベルクソン自身が彼自身の思想を一変させたことを理解する。また、その変化というのは、わたしたちがベルクソンの名をそれとともに知ることになるはずの「時間」という概念に注目するようになったという劇的な変化であったというのだ。

ベルクソンの思想の概略をつかんでいるわたしたちにとって、この「ごく若いころ」 (*dans notre première jeunesse*) という言葉と、諸著作がある意味で「持続」に基づき、「持続」によって一元的に構成されているように思われるということによって、この劇的な変化が第一の著作が刊行される以前の出来事であったであろうことを理解している。つまり、ベルクソン自身の言葉とわたしたち自身による観察によると、この変化について考察を加えなくてもベルクソン自身の独自の哲学を理解することはできるという構図を打ち立てることは難しく無い。しかし、それにしてもベルクソン自身がスペンサーについて批判する箇所が、ベルクソンの著作にはあまりにも多いのではないか<sup>5</sup>。特にわたしたちに第三の主著として知られる『進化』には、スペンサーについて述べる箇所が多すぎるのではないか。そして、最晩年に至ってスペンサーとの関係を打ち明けたというこの事実には、ベルクソンは、切り捨て排除するという仕方でスペンサーの哲学を扱ったのではなく、そのような仕方ではない仕方、一定の関係を積極的に築くという仕方で、スペンサーと関わるに至ったという事実が含まれているのではないか。もちろん、ある対象に言及している数と、その対象が帯びる哲学者自身にとっての重要性とが正確に比例するとただちに言うことはできないが。

こうしてわたしたちは、ベルクソンの思索の流れ全体についての、ある一つの仮説を提示することが出来るようになった。その仮説とは、わたしたちはベルクソンの思想の転換点をスペ

ンサーとの決別のうちに求めることができる、ということである。ただし、その決別はベルクソン独自の仕方ではなされた。その後の著作におけるスペンサーへの言及箇所の多さは、ベルクソンのその独自性を物語っているのではない。

ベルクソン哲学に対するスペンサーの影響について研究することはベルクソンの思想をより明快に理解するために重要だとする本研究がとる考え方は突飛な考えではないことを示すために先行研究をここで示し、その問題点も併せて示すことにしたい。

### 1-3-2 ベルクソンとスペンサーの関係について触れる

#### 昨今の有力な研究とその問題点

ここでは、ベルクソンとスペンサーの関係に焦点を当てた研究と、両者の関係に特化した研究ではないとしても重要だと思われる研究をとりあげ、それをいくつかに分類し、そこから明らかになってくる課題は何かについて考察していくことにする。

これまでの両者の関係に焦点を当てた研究は大きく分けて二つに分類することができる。その分類は、ベルクソンがスペンサーについて比較的多く述べているテキストのうち主たる二作、つまり『創造的進化』に特に注目するか、『思想と動くもの』の「緒論」に特に注目するかという点で分類される二つである。

#### 1-3-2-1 『思想と動くもの』に特に注目する研究

『思想と動くもの』の「緒論」を重要なものとみなしている研究は以下のものである。わたしたちは、「緒論」におけるベルクソンのスペンサーへの言及箇所をみたが、このベルクソンによる直接の言明に焦点を当てた研究は、先ほど引用した箇所のなかにみられた「究極の諸観念」あるいは「漠然とした普遍性」に注目している。

ピエール・ドレック (Pierre d'Aurec) 氏は彼の研究<sup>6</sup>において、ベルクソンが「補足し強固にする」ことを目指したのは、スペンサーの力学の「究極の諸観念」であり、それは『直接与件』の批判対象でもあると考えている<sup>7</sup>。ドレック氏は、ベルクソンはスペンサーの機械論を、スペンサーが述べる「不可知なもの」を考察の対象にせず、「空間」「時間」「運動」そして、「力」の究極的な諸観念をより明確にしようと試みたのだと考察している<sup>8</sup>。「時間」「持続」を得て、ベルクソンは、スペンサー的機械論者であることから、『直接与件』のベルクソンへと変容を遂げたのだと、ドレック氏は述べる<sup>9</sup>。この研究では、スペンサーの著作の該当箇所が参照されつつ、「力学」や「究極の諸観念」についての考察している。ドレック氏は、「究極の諸観念」と

は、「空間」「時間」「物質」「運動」「力」であるとし、それらがベルクソンによってどのように考え直されていくか、ということ、先に挙げたスペンサーの「弱点」をベルクソンが補足し強固にして行くことである、と捉えている。そして、これらの力学的概念を用いることによっては、持続を見つけないことができない、ということがベルクソンの主要な批判である、とドレック氏は結論づけていると思われる。ドレック氏は『直接与件』のなかの「優美」についてのベルクソンによるスペンサー批判にも考察を加えている。ドレック氏は、この「優美」についてのベルクソンの考察を内的な「進化」と関連づけている。

ドレック氏の研究を一部引き継ぐかたちのもので、セバスチャン・ミラヴェット (Sébastien Miravète) 氏の研究<sup>10</sup>をあげることができる。ミラヴェット氏もほぼ同様に考えている。ミラヴェット氏の考察によれば、スペンサーが「不可知なもの」であると考えた「力」「時間」「空間」を「不可知なもの」であるとして考察するのをやめるのではなく、それについてより深く考えることが、ベルクソンにとって、スペンサーの誤解を解き、スペンサーの思想を補強することである、ということになる。「漠然とした普遍性」にとどまるということが、「究極の諸観念」を深く追求できていない、と言い換え可能だと考えられている。ミラヴェット氏は、「ベルクソンの方法＝諸事実の研究 (スペンサー) + 持続において考える」と、ベルクソンの方法を定義している。つまり、ミラヴェット氏は、「力」「時間」「空間」についての考察とは別に、ベルクソンは「持続」を考察したと考えていると思われる。両者は、いずれにしても「持続」の考察がスペンサーには欠けていたという点において共通する。

『思想と動くもの』でベルクソンが言及している「究極の諸観念」の言葉を、「力学」における究極的な諸観念と捉えた上で、それらのうち「時間」と「空間」とを取り上げ、これらがベルクソンとスペンサーとでどのように異なっているかという点を明らかにし、スペンサーからベルクソンへの影響を明らかにしようとしたものにエルヴェ・バロー (Hervé Barreau) 氏の研究<sup>11</sup>がある。ただ、バロー氏は、スペンサーからの影響があるということの意味を、ベルクソンがスペンサーを否定してそれとは別に自らの哲学を構築したという意味で捉えているように思われる<sup>12</sup>。バロー氏は、『思想と動くもの』の示唆に従って、『直接与件』における「時間」と「空間」の概念に着目する。従って、バロー氏の研究は『思想と動くもの』を論証の起点としていると言えるだろう。バロー氏は、『直接与件』で、「時間」と「空間」という主題に関して、ベルクソンはスペンサーと明確に断絶していると述べている<sup>13</sup>。如何に断絶しているかについて考察するために、バロー氏はスペンサーの『第一原理』における「究極の科学的諸観念」の項でスペンサーが述べていることを分析する<sup>14</sup>。スペンサーが述べていることは、偽の普遍

性であるとすら、バロー氏は言う<sup>15</sup>。スペンサーは、ベルクソンが後に「時間」として述べる「同時性」(« simultanités »)と、「空間」として述べる抽象的配置 (dispositions abstraites) として区別する二種類の「共存」(co-existence)を混在して用いている、とバロー氏は指摘する<sup>16</sup>。この二種類の「共存」概念をつかって、時間的なものと空間的なものを関係づけようとしているが、スペンサーのこのやり方は混乱しているのだ、とバロー氏は述べる。「変化である時間的本性の同時性は、永遠である空間的本性の共存と異なる」<sup>17</sup>とバロー氏は述べ、これが時間と空間の満足できる区別の仕方であると述べる。更に、ベルクソンの『直接与件』における「時間」と「空間」についての考察に引き続いて、『物質と記憶』における「等質性」と「異質性」についての考察へと向かい、二元論の克服というテーマと進化思想へのベルクソンの興味を関連づけていく<sup>18</sup>。バロー氏は『進化』第四章を分析し、「諸事実」が所与であることと進化を「再構成」という点をスペンサーの誤りだとベルクソンは見なしていると述べる。バロー氏のこの論文の「新しい実証主義に向けて」(Vers un nouveau positivisme)という副題は、ベルクソンの思索は諸事実と観念をより厳密に対応させることを目指している、とバロー氏が考えていることを示している。バロー氏の研究がわたしたちに理解させることは次のことである。わたしたちが、ベルクソンが「時間」と「空間」という概念を引き受けるという点をスペンサーからの影響と考えることのうちには、『思想と動くもの』を重要なものと見なしていることが現れている、ということである<sup>19</sup>。というのも、そうでなければ、わたしたちはベルクソンがスペンサーだけでなくカントやその他「時間」と「空間」とを論じた全ての哲学者から影響を受けていると考えるはずだからである。哲学的営みのうちにあるかぎりわたしたちは「時間」と「空間」についての問いから離れたことは無いのだから、「時間」と「空間」について考えるのにスペンサーから特に影響を受けていたと見なしているということは、ただ、『思想と動くもの』におけるベルクソンの「究極の諸観念」の言葉により頼んでいるということを示している。

『思想と動くもの』の「緒論」と「可能性と事象性」(1930年)、及び、1908年のウィリアム・ジェームズへの手紙をもとに、『直接与件』から『進化』に至るまでのベルクソンのスペンサーへの繰り返される参照に着目し、それを理由づけようとする研究には、パトリス・ヴェルド (Patricia Verdeau) 氏の研究<sup>20</sup>がある。ヴェルド氏は、ベルクソンのこだわり注目し、それを理由づけることによって、両者の関係を明らかにしようとしている。ヴェルド氏は、次のようにシャルル・デュ・ボスにベルクソンが説明したことを引いている。「これが彼の精神の具体的な性格であり、諸事実の場所に、常に精神を連れ戻す彼の欲望の具体的な性格である」<sup>21</sup>。

この論文では、ベルクソンがスペンサーに注目したのは、スペンサーの哲学が諸事実を扱う実証主義の側面を持っていたからである、とされる。というのは、ベルクソンは実証科学と同じ平面に哲学を置こうとする野心を抱いていたことがその理由である、とされる。ただし、スペンサーが考える進化の法則は、機械的な原理のようなものであるため、この機械論に応えるために、ベルクソンはスペンサーの思想を何度も考察し直したのだ、とヴェルド氏は述べている。スペンサーが「漠然とした普遍性」に支えられているとベルクソンが述べることにヴェルド氏は注目する<sup>22</sup>。また、ヴェルド氏はその体系が特殊性と持続に抵抗しているという点も、指摘する<sup>23</sup>。その原因は、スペンサーは「諸々の位置の併置にすぎない身振りや運動」を採用しているからであり、それによってスペンサーは、「生成運動」を見失っている、とされる<sup>24</sup>。ヴェルド氏はグイエを引きつつ、スペンサーがしたことは、「わたしたちの知性がわたしたちの諸表象を除去するために利用する範疇と図式を通した生成について」の考察である、とする<sup>25</sup>。この意味で、スペンサーは「カントの道を辿った」<sup>26</sup>。知性を用いて生成について考察する、とは、「実在を細分化して、それからこれらの破片を組み直す」ことであり、それは彼が恰も「進化したものを分解すれば、進化するものの原理に手が届きうる」と考えているかのようである、とされる<sup>27</sup>。それは、「空間の思考は進化の理解を妨げる」ということを意味するとヴェルド氏は指摘している<sup>28</sup>。「知性の発生を辿り直した」ことが、スペンサーの錯覚である、とされる。スペンサーへの批判を通して、ベルクソンは「進化を再神秘化 (re-spiritualisé) した」<sup>29</sup>とヴェルド氏は述べる。ヴェルド氏の論文における問いとは、ベルクソンが何をきっかけにスペンサーに関心を抱いたか、ということと、ベルクソンはなぜ生涯スペンサーを意識し批判しつづけたのか、という問いであると思われる。彼女の考察によれば、スペンサーがカント的であったことが彼の思想の弱点であって、カント主義から抜け出することはベルクソンの持続の獲得に不可欠であった、ということは考えられる。ヴェルド氏も『直接与件』のなかでベルクソンが「優美」について、そして「恐怖」について述べていることに触れている<sup>30</sup>。ただし、その叙述はベルクソンがスペンサーを批判するために行なったと述べている。

そして、また特に科学的な問題関心のなかでベルクソンとスペンサーとの関係について考察したものに三宅岳史氏の研究<sup>31</sup>がある。三宅氏は『思想と動くもの』の緒論を引き「連続性」の問題<sup>32</sup>と、スペンサーへのベルクソンの興味が関連づけることができるものとしている<sup>33</sup>。研究では、「弱点」や力学の「究極の諸観念」への誤解といった箇所も含め、ベルクソンがスペンサーの思想を批判する多岐にわたる文脈を、同時代の科学との関係を含めて考察している。ベルクソンの関心が進化論哲学との関連で科学哲学に関心があったと思われる点について、三宅

氏はわたしたちに注意を促している<sup>34</sup>。また、三宅氏によれば、ベルクソンの述べる力学の「究極の諸観念」が指しているものは明らかではないが、「スペンサーは科学的な究極観念 (ultimate scientific ideas) は不可知であるという議論をした上で、我々に知られるのは関係のみであり、次に必要なデータとしては、空間、時間、物質、運動、力をあげている (cf. SPENCER, 1862, chap. iii, part II) ため、これらの観念がここで述べられている「根本的観念」に該当するのではないかと考えられる」と三宅氏は考察している<sup>35</sup>。三宅氏はこの研究において更に、「力」の概念と「保存則」関係、フォン・ベーアの「分化」の概念と関連づけて、スペンサーとベルクソンとの思想的関係について考察している。

### 1-3-2-2 『創造的進化』に特に注目する研究

『思想と動くもの』の「緒論」におけるスペンサーについてのベルクソンの言及にほとんどと言ってもよいほど触れることなく、専ら『進化』におけるスペンサーについての言及に注目して、それを整理することでベルクソンの思想におけるスペンサーの位置づけを明らかにする研究に、杉山直樹氏の研究<sup>36</sup>と、アルノー・フランソワ (Arnaud François) 氏の研究<sup>37</sup>がある。杉山氏の研究にはあとで改めて詳細に考察を加える。ここでは簡単に両者の研究の概要を見ておくことにしたい。

杉山氏はベルクソンの哲学を内在的に研究することによって、「ベルクソンが」スペンサーをどのようなものとして捉えていたか明らかにしようとする姿勢を貫いている。杉山氏の研究にはスペンサーの著作からの引用が無いのはその理由によると思われる（これはベルクソン自身の著作にスペンサーからの直接的な引用がないのと似ている）。杉山氏による両思想家の比較は「知性」「事実」「観念論」「経験論」「実在」をキーワードにした比較である。ベルクソンとスペンサーとは「知性」を巡って対照的に位置づけられており、ベルクソンによるスペンサーへの批判は「知性」についての考え方の違いから生じていると考えられている。そして、ベルクソンによるスペンサーへの批判はスペンサーの思想には循環論法がみられるとしたことにあるとみなしている。『思想と動くもの』によれば、ベルクソンは、「時間」と「持続」についての考察がスペンサーによってヒントを得た考察であるということであるのだが、それについては、杉山氏は触れていない。

フランソワ氏の論文は、『進化』はその論敵にヘッケル (Ernst Haeckel, 1834-1919) を想定していると述べる論文であり、ベルクソンとスペンサーとの関係を主題にした論文ではないが、本稿の議論にとって有益であると判断し、先行研究の一つとしてここで取り上げることにする。

フランソワ氏がスペンサーに関して注目するのは、スペンサーの思想における生物学に関する領域である。スペンサーは獲得形質の遺伝という考えに同意していた点でラマルキズムであり、潜在的にはヘッケルに結びついている、とフランソワ氏は指摘する。『進化』におけるあらゆる文脈でスペンサーは批判的になっているということが示すのは、スペンサーの進化論が「偽の進化論」であってそれに置き換えられる「真の進化論」を提唱することが『進化』が目指すところである、ということである。そのスペンサーの進化論の思想の根底に、ヘッケルがいるのであれば、スペンサーが批判されることがそのままヘッケルへの反駁にもなっている、とフランソワ氏は指摘する。この原稿には、スペンサーからの引用はない。そして、ベルクソンが指摘するスペンサーの「弱点」や「誤解」といったものについても言及していない。フランソワ氏は『進化』におけるスペンサー批判の位置づけ（スペンサーは『進化』の最後で最終的に批判される思想である）に注目し、著作の特性から見て批判の主要点をスペンサーの生物学的思想、それも獲得形質の遺伝というアイデアにしぼっている。

#### 1-4 まとめの考察

これまでベルクソンとスペンサーの関係について触れる昨今の有力な研究を、それらの研究が重視するテキストの違いによって大きく二つに分類して概要を示した。示された概要を整理することで、ここでは違う観点からまたこれらの研究を眺めてみたい。

まず、『思想と動くもの』の中で述べられていた「究極の諸観念」にこだわらずに、ベルクソンの初期のスペンサー批判が後期のスペンサー批判にどのように繋がっていくのかという観点から、スペンサーとベルクソンの関係を明らかにしたものはほとんど無いと言って良いだろう。また、『思想と動くもの』の「緒論」に注目するか『進化』における進化論批判及び知性批判に注目するかによって、論じる内容が変わってくるという特徴が見られる。ただし、論じる内容が変わっても、結論としてはベルクソンの主張には反しないものになる。すなわち、スペンサーのやり方では「持続」を明らかにすることはできなし、「生成変化」を述べることが出来ないというものになる。言い換えれば、ベルクソンはスペンサーを批判してスペンサーの思想とは別な自らの思想を形成したのであって、スペンサーが考えたことを引き継ぐというかたちでの影響を受けてはいないというものになる。ただし、「諸事実」の重要性を認めているということを除いて。

ここで指摘できることがある。それは、ベルクソンが回顧的に明らかにした若き日の出来事が、わたしたちの研究を一定の方向へと、恐らくは意図せずに定めてしまっているのかもしれ



ないということである。一定の方向というのは、ベルクソンはスペンサーを否定して独自の哲学をつくったことを受け入れるという方向である。『進化』を論じるにしてもやはり、基本的にはこの方向からベルクソン哲学とスペンサーが関係づけられている。ベルクソンがもしこのような告白をしていなかったら、わたしたちはベルクソンの哲学の初期のころから存在するスペンサーについての記述を追い、影響関係を精査したかもしれない。それに、影響は目に見えるものとは限らない。スペンサーという名前が書かれていないからといってそこにスペンサーからの影響がないとは言えない（バロー氏もこのように考えたものと思われる）。また、影響とは、出会い頭において生じるものではなく、その出来事に続いて生じるものであることを思えば、初期の段階で見られた影響が、後続する思想のうちに露になっていく可能性があるだろう。わたしたちはベルクソンが意図せずして覆い隠してしまった可能性のある、スペンサーからの影響という側面がベルクソンの哲学にはないのかと問う余地が手つかずのまま残されているのを目の当たりにしている。

ここで、わたしたちの主題が明文化される。すなわち、ベルクソンにとってスペンサーとは何かということである。ベルクソンが公に自らの哲学を形成し始めたその頃の思索をスペンサーとの関係において詳らかにし、そこから時系列でベルクソンの思索を辿ることで、ベルクソンにとってスペンサーとは何かだったのかを明らかにしたい。

## 2 本研究のテーゼ

このような主題に取り組む本研究が措定するテーゼは次のようなものである。それらのテーゼがわたしたちのベルクソン理解にどのような寄与をもたらしうるのかについてもまた、予め明確にしておきたい。

本研究はベルクソンにとってスペンサーとは何かということの詳細にすることを通じて、次の中心的テーゼを措定する。

A. ベルクソンの哲学に対してスペンサーの思想は既存の研究で明らかにされてきた以上に影響している<sup>38</sup>。

本研究は、この中心的テーゼと共に、先述したベルクソンとスペンサーの思想的関係についての現在の有力な見解との対比という観点から、次の副次的なテーゼも措定する。

B. これまでなされてきた諸研究では、『思想と動くもの』の「緒論」におけるベルクソンの回顧的記述における「力学」や「究極の諸概念」及び「漠然とした普遍性」という概念がスペンサーとの思想的関係を明らかにする上で重要なものとして見做される傾向があった。しかし、スペンサーからの影響を明らかにしようとするならば、その「緒論」の記述において重要だと見做されるべきなのは「補足」という概念である。この概念を用いるという点にベルクソンの思想におけるスペンサーから受けた影響の帰結を見出すことができる。

中心的テーゼは、本研究の第四章及び第五章の論述を通して導きだされるものである。また、副次的テーゼは、第六章、第七章、及び第八章の論述を通して導きだされるものである。

それでは、本研究が掲げるこれらのテーゼは、それらがベルクソンの生涯と思想の理解にどのような寄与をなしうるだろうか。

繰り返すが、ベルクソンの哲学の出発点にはスペンサーの哲学への批判があったものと考えられる。スペンサーの哲学への批判を乗り越えるかたちで「時間」という概念に着目するに至ったのであり、そこから「持続」の発想が生まれたと考えられている。『思想と動くもの』で回顧的に語られるこのような事態があったからこそ、一定の完成に到達したものとして持続論が提示される『進化』でスペンサーの進化論が批判されたことの原因を改めて見出すことができたのだし、幾分記述にずれがあったとしてもそれがベルクソン自身の成長とともに変化したものであると見做すことを可能にし、わたしたちにそれ以上の追求を迫ることのないものとして示されて来たのであった。

テーゼ A によって、こうしたスペンサーとベルクソンの関係に対して、次のような説を提示することが可能となる。すなわち、スペンサーにベルクソンが単に否定的ではない仕方で影響を受けたからこそ、ベルクソンの哲学の歩みはわたしたちに知られているような歩みになったのであり、ベルクソンの「進化論」の独自性の理由もスペンサーにあるということである。

テーゼ B によって、スペンサーとベルクソンの関係に対して、次のような説を提示することが可能となる。すなわち、「緒論」においてベルクソンが述べていることは確かにベルクソンが辿った道のりを示しており、スペンサーの不備もその通りであるとしても、それを乗り越えようとしてとった方法が「補足」という方法であると述べられることの内には、スペンサー批判から始まり『二源泉』に至るまでに経て来たベルクソンの「スペンサーの影響を含んだ」ベルクソンの独自性が見られるのであり、それこそがベルクソン哲学に対するスペンサーの影響が明らかである痕跡なのである。

これらのテーゼは次の寄与ももたらす。スペンサーからベルクソンは影響を受けているのだが同時にその影響を介してはっきりとした違いがみられ、そこにはベルクソンがどのような意味において反知性主義であるといえるのかということの間接的により明快にすることができるという哲学的な寄与である。先走って言えば、わたしたちは「共感」という概念、そして「対立」及び「補い合い」という概念に、ベルクソン哲学に対するスペンサーの影響をみることになる。すなわち、「共感」という概念に着目するという点でベルクソンはスペンサーに影響を受けており、それを腑分けすることによってベルクソン自身の独自性が発揮されていくのだが、その独自性はあくまでも「共感」をわたしたちが日常的に感じるその感じ方で捉えるということ捨てないという方法によって探究される。本研究がたてるテーゼは、スペンサーからの影響という点に注目することによってベルクソンの哲学史における立場を、知性主義か反知性主義かという区分ではどのようなものとして捉えるべきかを明らかにすることに寄与するものとなるだろう。

### 3 杉山直樹『ベルクソン 聴診する経験論』

以上、本研究が何を主題として、どのようなテーゼを提示しようとしているのかを述べて来た。

こうした本研究にとって非常に重要な意味を持つベルクソン研究があり、それは杉山直樹氏による研究であり、特に『ベルクソン 聴診する経験論』のなかにみられる思索である。

この杉山氏の研究の結論を概括的に述べると次のようになる。この研究は三本の柱からなる。ベルクソンにおける「自我」と「知性」と「触発」及び「共同性」についての研究であり、それらの関係である。「自我」は「持続」とすぐさま連結可能な概念であるが、それがいかにして連結されているかについての研究と、「持続」を明らかにすることによってより明確になる外的世界と、「空間性」の認識である「知性」がどのように関係していくかについての研究、そして、持続するこの世界をさらにその根底において（存在論的に）基礎付けている領域へのベルクソンの探究を、「触発」や「共同性」といった事象を手掛かりに辿った研究<sup>39</sup>、という三本柱である。スペンサーについては三本の柱のうち二本目、すなわち「知性」に考察が加えられていくなかで論じられている。

本研究のテーゼ A は、この杉山氏の研究の第二の柱にあたる部分で論じられる『進化』におけるスペンサー批判についての考察を一部引き継ぐものである。というのも、杉山氏は上掲著作のなかで、ベルクソンがスペンサーに関して特に注目するのは、スペンサーが考察した「時

間」などではなく、スペンサーが「諸事実」に着目して研究したことであるという視点から議論を構築していると思われるからである<sup>40</sup>。スペンサーが「諸事実」に留意していたことをベルクソンが評価しているのは『進化』においてである。『進化』におけるスペンサー像から組み立てるのでなければ「諸事実」を重要視するベルクソン像を示すことはできない。杉山氏は『思想と動くもの』におけるスペンサーについての回顧的な記述よりも、『進化』におけるスペンサーについての記述を優先し、そこにベルクソンのスペンサー像の見るべき姿があると見做している。先に述べた通り、『思想と動くもの』におけるあからさまな告白を知っているものにとっては、それを抜きにして『進化』のスペンサー像に特化するということはそこに何かしらの意図があるはずだと思わせる。それは先にあげた諸研究が『思想と動くもの』の「緒論」における記述に大分寄っていることから窺い知ることができる。わたしたちにとっては、この「諸事実」に注目した点以外にもベルクソンがスペンサーの研究において評価しているかそれによって変化させられた点を明示することが課題になるだろう。また、杉山氏がなぜスペンサー像をつくるために、『進化』における記述だけを頼りにしたのか明らかにすることも意義がある。というのも、本研究も『進化』に重要性を見出すものだが、これには明確な理由があるからである。

本研究のテーゼ B は、杉山氏の研究の第三の柱にあたる部分で論じられる、「触発」「共同性」という事象の特に「共同性」を重要なものとして見做す仕方を一部引き継ぐものである。「共同性」といった事象に、「補足」という概念あるいは「対立」という概念に依拠しつつベルクソンがどのような仕方で重要性を見出していったかを、本研究では明らかにする。そして、テーゼ A とつながっていくことなのだが、この「共同性」と、「共感」概念との関係を通して、本稿ではベルクソンが「共同性」という事象に注目しているという杉山氏の解釈に賛成した上で、ベルクソンによるそうした注目は実はスペンサーからの影響であることを示すことにもなるだろう。すなわち、本研究では、杉山氏の研究の第二の柱としての「知性」についての考察、第三の柱としての「共同性」についての考察が、いかに橋渡しされるかという点についてスペンサーを通じて明らかにするということになるだろう。

<sup>1</sup> ベルクソンの生涯の概略については、特に『世界の名著 ベルクソン』、中央公論社、1969年の「年譜」、及び、ジャンケレヴィッチ『アンリ・ベルクソン』の序論を参照した。

<sup>2</sup> ベルクソンの思想の概略については、特に久米博他編『ベルクソン読本』、法政大学出版局、2006年の、「ベルクソン著作解題・研究紹介」を一般的なベルクソン理解と捉え参照しつつ構成した。これは、ベルクソン哲学研究会の共同作業により、杉山直樹氏、村上[ママ]達也氏、柳澤望氏に原稿として執筆されたものである。

<sup>3</sup> スペンサーの生涯を、彼の著作を中心に以下に簡単に記しておきたい。1820年4月27日にイギリスのダービーに生まれ、1903年12月8日にブライトンにて83歳で死んだ。スペンサーは、父親の経営する学校にごく短期間通っただけで、それ以外の学校教育は受けずに育った。彼の教師は父と叔父とであった。17歳の時、ロンドン・バーミンガム鉄道の技師になった。28歳で『エコノミスト』編集部に入った。1852年、32歳の時に「進化の仮説」(The Development Hypothesis)を発表した。それ以降の作品の発表は以下の通りである。

1853年(33歳)『干渉論』(Over-Legislation)

1854年(34歳)「科学の起源」(The Genesis of Science)

「作法と流行」(Manners and Fashions)

1855年(35歳)『社会静学』(Social Statics)

『心理学原理』(Principles of Psychology)

1857年(37歳)「進歩について——その法則と原因」(Progress: its Law and Causes)

1858-1874年(38-54歳)『論文集』(Essays, scientific, political and speculative) 三巻

1859年(39歳)「知識の価値」(What Knowledge is of most Worth)

1862年(42歳)『第一原理』(First Principles)

1864年(44歳)「諸科学の分類」(The Classification of the Sciences)

「コント氏の哲学に反対する理由」

(Reasons for Dissenting from the Philosophy of Mr. Comte)

1864-1867年(44-47歳)『生物学原理』(Principles of Biology) 二巻

1876-1882年(56-62歳)『社会学原理』(Principles of Sociology) 三巻

1879-1893年(59-73歳)『倫理学原理』(Principles of Ethics) 二巻

1884年(64歳)『個人的国家』(The Man versus the State)

1897年(77歳)『断片集』(Various Fragments)

1902年(82歳)『小品集』(Facts and Comments)

1903年(83歳) スペンサー死去

1904年『自伝』(An Autobiography) 二巻

年譜に従うと、スペンサーとベルクソンとの関係は次のようなものとして考えられる。ベルクソンが生まれた時、スペンサーは39歳になっており、ベルクソンが43歳の時にスペンサーは死んだ。ベルクソンが生まれた時、既にスペンサーは思想家として認められており、ベルクソンが1889年に第一の主著となる『直接与件』を発行する頃には、既に『断片集』『小品集』そして没後に刊行された『自伝』を除いて、全て発行されている。ベルクソンは、スペンサーの哲学を断片的にではなく、体系的に知ることができただろうと推測できる。

スペンサーの思想において主要な幾つかの点についてここで触れておきたい。スペンサーは『第一原理』で主要な原理として次のものをあげている。それは、「物質の不滅性」(The Indestructibility of Matter)「運動の継続性」(The Continuity of Motion)「力の固在性」(The Persistence of Force)である。この中で根本的なのは「力の固在性」である、とされる。

スペンサーは、『第一原理』の「宗教の究極観念」と題された第二章の最後で、宇宙が私たちに表す「力」は測り知ることができないと述べている(« The Power which the Universe manifests to us is utterly inscrutable » (FP, 46))。また、第三章「科学の究極観念」では、スペンサーは、具体的な物質の助けを借りなければ、「力」を概念化することが出来ないこと、力の概念はそれ自体においては作ることが出来ないことを述べている(« it is impossible to form any idea of Force in itself, it is equally impossible to comprehend either its mode of exercise or its law of variation » (FP, 61))。スペンサーは、「力」とは、これによって「空間」や「時間」とが建てられる原型的な経験であると述べている(« Deeper down than these, however, are

the primordial experiences of Force, which, as occurring in consciousness in different combinations, supply at once the materials whence the forms of relations are generalized, and the related objects built up » (FP, 169))。また、知られる「力」とは、効果としてのみ、相対的な実相としてのみ知られ得るものであるとされる (FP, 170)。知識が持つ相対的な性格によって、この力は、相対性を相対化することによって得られる絶対性の側にある不可知な「固定性」(persistence) をおびたものとして性格づけられるようになる (FP, 96)。偏在する (FP, 99)、知り得ないが要請されるものとして力が導出される。

進化に関連してスペンサーは次のことを述べている。スペンサーは同質なもの (homogeneous) から異質なもの (heterogeneous) が生成することを進歩 (progress) と呼ぶ (「有機体の進歩が等質から異質への変化であることは議論の余地もない」 Herbert Spenser, *Progress: its Law and cause, Essays on Education and kindred subjects, Everyman's Library, 1966, p. 154*)。そしてそれを進化 (evolution) とする (「この有機体進歩の法則が一切の進歩の法則であることを明らかにしよう。 (...) 単純なものが順次の分化を経て複雑なものに至るこの同じ進化が遍く見られる」 *Ibid.*)。等質なものから異質なものが生成するということは、単純なものから複雑なものが生成するというようにも言い換えられている。

スペンサーにおける進化の概念について、清水氏は次のように述べている。「スペンサーにおいては、有機的進歩の法則こそ、一切の進歩の法則であった。地球の発達すると、その表面における生命の発達すると、社会、政府、工業、商業、言語、文学、科学、美術の発達するとを問わず、継続的分化による単純から複雑へという同一の進化が至るところに支配している、とスペンサーは言う。宇宙の初めから最新の文明に至るまで、私たちは、同質的なものから異質的なものへの変化を見出す。それが進歩である。進化の法則は、万物の法則である。」清水幾太郎「コントとスペンサー」『世界の名著 36』中央公論社、1970年、p. 36。また上記スペンサーの年譜もこの『世界の名著 36』を参照した。

<sup>4</sup> « Une doctrine nous avait paru jadis faire exception, et c'est probablement pourquoi nous nous étions attaché à elle dans notre première jeunesse. La philosophie de Spencer visait à prendre l'empreinte des choses et à se modèler sur le détail des faits. Sans doute elle cherchait encore son point d'appui dans des généralités vagues. Nous sentions bien la faiblesse des *Premiers principes*. Mais cette faiblesse nous paraissait tenir à ce que l'auteur, insuffisamment préparé, n'avait pu approfondir les « idées dernières » de la mécanique. Nous aurions voulu reprendre cette partie de son œuvre, la compléter et la consolider. Nous nous y essayâmes dans la mesure de nos forces. C'est ainsi que nous fûmes conduit devant l'idée de Temps. Là, une surprise nous attendait. »

<sup>5</sup> ベルクソンは次にあげる箇所ではスペンサーに言及している。優美について (DI, 10)、心理学について (DI, 22)、原理について (MM, 140)、『第一原理』について (PM, 2)、事実についての方法について (EC, 363-369)、(PM, 2)、知性の理論について (EC, 154)、(EC, 188-191)、物質の理論について (EC, 364)、精神の理論について (EC, 364-367)、笑いについて (R, vi)、(R, 65)、獲得形質について (DS, 290)、偽の進化論について (EC, x)、(EC, 79)、(EC, 363)、(PM, 2-5)、不可知論について (PM, 21)、時間論について (PM, 102)、カントとの関係について (EC, 363)、その哲学への愛着について (PM, 102)。また、講義録のなかには、スペンサーの道徳を取り上げたものがある。手紙のなかでもスペンサーの哲学について言及している。

<sup>6</sup> Pierre d'Aurec, « De Bergson spencerien au Bergson de l'«Essai» », *Archives de philosophie*, volume XVII, cahier 1, *Bergson et Bergsonisme*, 1947, pp. 102-121.

<sup>7</sup> *Ibid.*, p. 105.

<sup>8</sup> *Ibid.*, p. 116.

<sup>9</sup> *Ibid.*, p. 117.

<sup>10</sup> Sébastien Miravète, « Spencer, Renouvier comment Bergson a-t-il inventé la durée? », 2012.

<sup>11</sup> Hervé Barreau, « Bergson face à Spencer. Vers un nouveau positivisme », *Archives de Philosophie*, 2/2008, (Tome 71), pp. 219-243.

<sup>12</sup> バロー氏は次のように述べている。「彼自身の意見に従えば、進化論の現代の学説の父であるスペンサーほど、直接の接触も無しに、ベルクソンに影響 (influence) を与えた哲学者はいない。影響が哲学者から哲学者へと行使される場合に通常行なわれるように、弟子の最初の進め方は、批判である。」*Ibid.*, pp. 240-241.

<sup>13</sup> « Mais auparavant il convenait de montrer que la thèse de doctorat, *L'essai sur les données immédiates de la conscience* (1889) , manifestait une rupture explicite avec la doctrine de Spencer », *Ibid.*, p. 220.

<sup>14</sup> *Ibid.*

<sup>15</sup> *Ibid.*, p. 221.

<sup>16</sup> *Ibid.* また、バロー氏は結論において次のようにも述べている。「スペンサーへの愛着は、ベルクソンにおいて、科学的時間に関する偽の観念を養うのに貢献したのである」 *Ibid.*, p. 241.

<sup>17</sup> *Ibid.*, p. 223.

<sup>18</sup> 「『直接与件』の粗野な二元論に対してほどこされた修正は、ベルクソンをついにスペンサーを魅惑した問題、すなわち、進化の問題に接近させた」 *Ibid.*, p. 235.

<sup>19</sup> この意味で、C. U. M. Smith 氏の研究 (2010 年) もまた、『思想と動くもの』をベルクソンとスペンサーの関係を明らかにするための論証根拠としていると言える。Smith 氏はその研究で、「時間」の経験に基づき、「持続」概念によって把握できるはずの「時間」がスペンサーがなぜ見出すことができなかつたかについて考えている。ベルクソンの哲学がスペンサーの哲学と根本的に異なっていると Smith 氏は述べる、「Bergson's philosophy thus differed radically from Spencer's. », p. 194. ベルクソンがスペンサーに執着した理由も、時間の内的な経験に基づいていることを Smith 氏は次のように述べている。「Thus, in conclusion, we can see that the relation between Bergson and Spencer is complex and many-sided. Bergson's life-work was triggered by reading Spencer. He believed that Spencer's psychologie was fundamentally mistaken insofar as it misunderstood the 'interior' experience of time. », p. 197. これらのことが示しているのは、Smith 氏による研究もまた、『思想と動くもの』に基づいている、ということであると思われる。以下を参照。C. U. M. Smith, « Herbert Spencer and Henri Bergson », in *Chromatikon VI: Annales de la philosophie en ptocès / Yearbook of Philosophy in Process*, vol. 6., Louvain-la-Neuve: Les Éditions Chronatika, 2010, pp. 191-202.

<sup>20</sup> Patricia Verdeau, « Sur la relation de Bergson à Spencer », *Annales bergsoniennes III. Bergson et la science.*, Paris: P.U.F., 2007, pp. 361-376.

<sup>21</sup> *Ibid.*, p. 364. ヴェルド氏は、以下の文献を参照している。Charles du Bos, *Journal*, 1921-1923, 22 février 1922, Paris, Corrèa, 194, pp. 63-68.

<sup>22</sup> ヴェルド氏は、ベルクソンの「漠然とした普遍性」という言葉を、スペンサーの『第一原理』の第十八章における次の一節に関連づけている。スペンサーは彼の計画の総合に取りかかっており、彼が望む総合とは科学的で理性的なものである。「(...) それはもっとも大きな普遍性に基づく基礎であることを示している」。 *Ibid.*, p. 369. ヴェルド氏が参照しているのは『第一原理』の次の箇所であると思われる。「In other words, the phenomena of Evolution have to be deduced from the Persistence of Force. As before said—"to this an ultimate analysis bring us down, and on this a rational synthesis must build up." This, being the ultimate truth which transcends experience by underlying it, furnishes a common basis on which the widest generalizations stand; and hence these widest generalizations are to be unified by referring them to this common basis. » (FP, 323)

<sup>23</sup> *Ibid.*, p. 369.

<sup>24</sup> *Ibid.*, p. 370.

<sup>25</sup> *Ibid.*

<sup>26</sup> *Ibid.*

<sup>27</sup> *Ibid.*

<sup>28</sup> *Ibid.*, p. 371.

<sup>29</sup> *Ibid.*, p. 376.

<sup>30</sup> *Ibid.*, pp. 374-375.

<sup>31</sup> 三宅岳史、『ベルクソン 哲学と科学との対話』、京都大学学術出版会、2012 年。

<sup>32</sup> 同書、p. 29。

<sup>33</sup> 同書、p. 27。

<sup>34</sup> 同書、p. 28。

<sup>35</sup> 同書、p. 29。

<sup>36</sup> 杉山直樹、「「知性の発生」と科学論——『創造的進化』読解のために」、『ベルクソン読本』、

久米博他編、法政大学出版局、2006年。杉山直樹、『ベルクソン 聴診する経験論』、創文社、2006年。

<sup>37</sup> Arnaud François, « Qu'est-ce que Bergson entend par "monisme" ? Bergson et Haeckel », dans Journées d'études Lire Bergson. Organisées par Fr. Worms, C. Riquier, Ch. Berner & Ph. Sabot. Ciefpc, umr 8163 « savoirs, textes, langage » avec la société des amis de Bergson, 2010.

<sup>38</sup> 本論における「影響」という概念のより限定された意味については第二章1で述べる。

<sup>39</sup> 「第三章で考察の主題になったのは、第一章が確保した自足的生成としての「私」が逆説的にも有しているところの「触発」の経験である。ベルクソン哲学において「超越」とも呼び得る何かがあるとすれば、それは、ひとまず伝統に忠実に、「美」や「善」の経験（芸術・道徳）や「宗教」的な経験（ミスティズム）において探られるはずのものである。その上で本研究は、そうした経験の基本的な構造としての「触発」を論じることに力点を置いた。芸術論や道徳論、宗教論が論じるのは、「美」や「善」といった非人称的なアイデアではなく、人称をめぐるさまざまな触発の経験である。そしてその経験を探究することを通じてベルクソンが描こうとしていた私たちの生命の創造的なポテンシャル、ならびにそれによって成立するある共同性理念を、それとして精確に取り出そうと試みたのがこの第三章であり、そのためには、既存の道徳論や神学などの性急な比較はいわば迂回され延期されねばならなかった」。杉山前掲書、p. 328。また、次の箇所も参照。「問題なのはもはや、同一化や相互浸透ではなく、私たちそれぞれの個体化であり、また自由な諸個体の新たな創造である。ベルクソンに「他者」論があるとしても、そこにおいて私と私の他者とは、単純な否定関係にあるのではなく、まずもって相互を個体化し、相互を他者として創造しあう関係として理解されている。そしてそこにおいて、私の主観的存在の際立ちと、他者との関係としての触発の強度とは、むしろ共軛的なものとして描かれていた。ベルクソンは最後の主著において、以上のような「開かれた社会」の構成こそを、私たちの生命に許された最も高い可能性として提示した。これが、私たちに与えられるさまざまな経験を涉猟し続けたベルクソン哲学の結語であり、本研究の結語である」。同書、p. 329。

<sup>40</sup> 「先に見たように、ベルクソンはスペンサー的な知性の発生論を拒否している。その理由は正確に挿んでおかねばならない。物質に内属する秩序から知性が生じたとする「スペンサーの錯覚」について彼はこう批判していたのだ——「まるで、物質に内属する秩序が知性そのものではないかのようだ！」（EC154/624-625）。修辭的な「かのようだ」を裏返して言えば、ベルクソンにとっては、「物質に内属する秩序」が見られるとして、それはすでに「知性的なもの」であるわけだ。「諸対象 (objets) と諸事実 (faits) を措定したとたんに知性を前提としてしまうことをどうして見ないでいられよう」（EC189/655）。また別の箇所では、スペンサー哲学は「にせの進化論 (faux évolutionnisme)」と呼ばれ批判される。この自称「進化論」は、「すでに進化してしまった現状の实在を分断してそれほど進化していない小片にして、ついでその欠片を集めて現状の实在を再構成するというもので、かくして前もって説明すべきものを自らに与えている」（*ibid.*）と判定される。それは例えば、目下有機体に見られる「反射」という現象を採り上げて、その複合によって本能や知性が組み上がって来たという主張である。しかし実際には、この「反射」という現象はそれ自体が一定の進化の後に、有意的な行動と差異化される形で成立してきたものであって、これによって有意的行動その他を説明することはできないし、その説明は精神の諸力の「発生」を論じることではない。そして目下特に問題になっている、科学における精神と自然との関係、知性と物質との関係についても同様の批判をベルクソンは行なうのだ。スペンサーによれば、自然における諸現象の継起が、精神にその反映像を形成する。諸現象の関係は、表象間関係に写し取られる。「したがって自然は精神の中に反映されている。私もおそれは認める」（EC366/805）。では何がベルクソンには不満なのか。「しかし人間精神が諸現象間関係を表象できるためには、諸現象 (phénomènes) というものが、すなわち生成の連続性の中に切り取られる判明な諸事実 (faits) というものが、存在しなければならない。この分解作用の特定の様態を、我々が今日それを見て取るような姿で自らに与えてしまえば、それによってひとは知性をもまた今日あるような姿で手にしてしまっているのだ。というのも、实在がそのような仕方では分解されるのはこの知性との関係において、そしてこの関係においてだけであるからだ」（*ibid.*）。明らかだろう。ベルクソンは、表象の姿、少なくともその「諸事実」の分断の仕方ならびにそれらの間での「関係」が、認識主観のあり方に相対



---

的であることを認めているのである。それらの「事実」は、知性が写し取るべき原本ではない。むしろ知性がそれらの「事実」をそのようなものとして作ったのである。「各々の存在 [生物] は、自らの行為がそこで辿るべきさまざまの線に応じて物質界を分解する。可能な行為のこれらの線は、交差しながら経験の網を描くのであり、その網の目一つひとつが事実というものなのだ」(ibid.)。ベルクソンは、「事実とは作られたものだ」というこの種の見解を放棄してはいない。そればかりか、「事実」というものが人間知性による(非実在的で唯名論的な)所産だという可能性をむしろ自明なものとして受け入れている。だからこそ、ベルクソンは観念論からの異論を前にして、スペンサーの発想の側を見捨てるのである。これは極めて微妙な立場である。スペンサーがある意味素朴な独断性によって前提する「諸事実」やそれらの「関係」を、観念論はすでに知性によって構成された所産と見做す(その構成の動機がプラグマティックなものだと言わないにせよ)。その場合、知性をそれらの「事実」などから、それらの反映として「発生」させると言うなら、それは見え透いた循環論法であり、「進化論」としては「にせ」のものにしかならないだろう。ベルクソンによる先のスペンサー批判は、基本的にはこれと同じラインで行なわれている。そしてこの論法が、例えば「精神物理学」の経験的妥当性に関しての『試論』の判定——すなわち事実に基づいて理論を検証しようと試みても、当の事実が理論によって構成されたものである以上、その試みは単なる「循環 (cercle vicieux)」にしかならない、というあの議論——と全く同型であることも気づかれよう。だとすれば、ベルクソンはそれまでのプラグマティズム的立場がもたらしかねない「科学」についての相対主義を避けるために、スペンサー流の単純な経験論に立ち戻って済ませるわけにはいかないわけである。しかも、ベルクソンは同時に、スペンサーを批判するその観念論的立場をも論駁しようと望んでいる。というのも、彼の考えでは、観念論は知性認識について非常に高い評価を与えているように見えて、実はその価値をこの上なく損なうものだからである。」前掲書、pp. 199-201。

上記引用した杉山氏による研究が示しているのは、『進化』のベルクソンは、「知性の発生」の解明に向けて思索を収斂させており、スペンサーの「諸事実」についての考察にベルクソンが注目するのも、理由はそこにあると杉山氏は考えている、ということである。

## 第二章 方法論的考察

本研究は前章で述べたような主題を扱うため、概念的、方法論的に次のような二つの特質を持つ。

(1) 本論文において「ベルクソンに対するスペンサーの影響」と言われる場合、それは単なる両者の相関関係ではなく、正の相関関係を、すなわちベルクソンが彼の哲学においてある概念を用いるのは、まさにスペンサーがその概念を用いたがためであるという事態を表現している。

(2) 本研究が取り組む研究の方法は、ベルクソンによって書かれたかベルクソンが述べたことを記録したとされる文書を、ベルクソンの遺言に従って扱い、更に、その著作が持つ性格、すなわちそれが「回顧的著作」である否かという点に従って扱い方を変える。

以下において本論文がこうした特質を持つ理由とそれが妥当である根拠を示したい。

### 1 本論において使用される「影響」という概念について

上の(1)で述べたように本論が「影響」という概念を限定して用いる理由は以下のとおりである。

本論文第一章で、エルヴェ・バロー氏の研究に対して考察した際にも取り扱ったが、ある対象を批判する態度のうちにも、その対象からの「影響」があるとわたしたちは考えることが出来る。わたしたちは、ある対象から別の対象に与えられた「影響」を規定するのが難しいことを知っている。というのも、ある概念や論述の仕方が別の哲学者の概念や論述の仕方と似ているからといって、それを直ちに「影響」関係の内に位置づけることには曖昧さが残ると思われるからである。しかし、そこに「影響」が無いと結論づけることもまた正しいとは思われない。「影響」が無いと証明することと「影響」があると証明することは同様にとても難しい作業であると思われる。そこで、この曖昧さを避けるために本論文では、スペンサーがそれを用いたので、ベルクソンもそれを用いたという意味で因果関係が認められる事柄を「影響」という言葉で表現することにした。スペンサーが用いなかったので、ベルクソンは用いることにした、あるいは、スペンサーが用いたのでベルクソンは用いなかったという意味では、「影響」という言葉を使わない。

(2)で述べた諸著作の取扱いについては、以下の節で改めて述べたうえで、その正当性についても論じることとする<sup>1</sup>。

少し先取りして述べれば、方法(1)と(2)を用いることによって、本研究には結果として次のような利点をもたらされることになるであろう。その利点とは、従来のベルクソンの哲学を扱う諸研究が着目して来た、ベルクソンが述べる「時間」と「空間」という区別される諸概念によってベルクソン哲学を解明するということから自由になる、という利点である。更に、「時間」と「空間」とを区別することがわたしたちにもたらさざるを得なかった「差異」に目を向けざるを得ない事態からもまた解放される、という利点である。

## 2 諸著作の取り扱いについて

以下では、まず、ベルクソン研究の一次資料としてどのようなものが存在するかについて確認することにする。次に、そうした資料的区別の観点からどのようなベルクソン研究の方法が可能であるかについて考え、その上で、本研究の位置づけを考える。

ベルクソン自身が書いたもの、ベルクソンに関係のある資料は、次の5つに分類することができる。

- ① 著作
- ② 講演の原稿
- ③ 出版されたものの後になってベルクソン自ら出版を禁止した著作
- ④ 手紙および書類
- ⑤ 講義録

これらが、ベルクソン研究の一次資料を構成するものである。

これらのうち、ベルクソンの遺書<sup>2</sup>に書かれている、自らの著作物や遺稿の取扱い指示に従えば、わたしたちにベルクソンの哲学について検討する際に用いることが許されているのは、

- ① 著作
- ② 講演の原稿

のみである。しかしベルクソンの死後、わたしたちは、③を含めて、

④ 手紙及び書類

⑤ 講義録

を自由に手に入れることができるようになった。本研究では、ベルクソンの遺言に従い、①及び②の研究に重点を置きつつも、③、④、⑤をも考察の対象にする。というのも、ベルクソンの遺言に違反するものであるとはいえ、それが刊行されてしまった以上、研究としてはそれを扱わないわけにはいかないからである。

また、ベルクソンが遺言で公にすることを許している著作にも、それが帯びている性格を考慮して扱い方を変える必要があると思われる作品があると考え。ベルクソンの著作には、いわゆる哲学研究である著作と自身の哲学研究の営みについて振り返って整理した回顧的な作品がある。ベルクソンの最晩年に発行された論文集『思想と動くもの』の特にその「緒論」第一部と第二部は回顧的な性格を持った作品であり、『二源泉』含め、それ以前に出版された作品群とは性格を異にする。この著作は、ベルクソンの遺言に従ってもなお、わたしたちにどのように取り扱うかという点において決定権が委ねられている。というのも、こういった取り扱いが問題になってくるのは、「緒論」の内容が、スペンサーが自身の哲学にどのように寄与したのかというベルクソンの回顧的思索を含んでいるからである。すなわち、スペンサーとベルクソンの関係を明らかにしようという本研究にとって、この回顧的記述をどのように扱うかという選択は大きな意味を持つ選択になってくる。というのは、哲学的著作でベルクソンが述べることと、回顧的著作でベルクソンが述べることの間には違いがあり、ベースを哲学的著作におくか回顧的著作におくかによって、示されるベルクソンの哲学像が全くと言って良いほど変わってくるからである。

本研究では、以下のようにベルクソンが書いたものを扱うことにする。本研究では、それが書かれた順にそれぞれの資料を扱うことにする。すなわち、わたしたちは、ベルクソン自身が書いたものではないがベルクソンが『直接与件』が発行される前に行なった講義の記録である諸講義録をまず扱うことにする。それから諸著作を扱うことにする。諸著作の中でも『直接与件』と『進化』を扱う。わたしたちは最後の著作として出版された『思想と動くもの』という回顧的著作については、本文を補うものとして扱う。すなわち、わたしたちは回顧的著作である『思想と動くもの』において、ベルクソンが最初の主著となった『直接与件』以前のことに言及しているとしても、その著作が回顧的であるという性格を持つがゆえに、その著作で述べ

られていることをそのまま、最初の著作が発行される以前に考えられていた意見であるとは見做さないという方法を選択する<sup>3</sup>。

### 3 研究方法の正当性

第一章で、既に、本研究の主題であるベルクソン哲学に対するスペンサーの影響について明らかにする本研究の先行研究を、それらが『進化』に重点を置いているものであるか、『思想と動くもの』に重点を置いているものであるかに従って分類し、『進化』に重点を置いて議論を組み立てることの本研究にとっての意義について述べた。つまり、第一章で既にわたしたちは、わたしたちの議論が回顧的に述べられていることには基礎を置くものではないことを述べた。従って、ここではわたしたちが対象にする諸原稿をそれが書かれた順に研究を進める方法をとる理由を述べたいと思う。

まず、わたしたちは、第一の主著となった『直接与件』のなかで、スペンサーが述べていたことに対してベルクソンがどのように触れているかを明らかにする必要がある。『物質と記憶』ではスペンサーは注で触れられているだけなのだが、第三の主著ではその著作全体に渡ってスペンサーの思考に対する批判が見られ、この『進化』全体がスペンサーへの応答であるという印象を抱かせるほどになっている。第一の主著から第三の主著にかけて順に考察しベルクソンに起こった変化があるとすればそれはどのようなものであるか明らかにすることができそうだという予測を立てることが出来る。これらの研究は専ら①のベルクソンによっても研究を許された著作の研究ということになるだろう。ただ、わたしたちは先に確認したのだが、ベルクソンには著作①のなかでも回顧的著作があり、その扱いには注意が必要であり、また、ベルクソンが遺書によって禁じたがわたしたちが敢えて研究の対象にする手稿類があり、ここでは特に⑤の講義録があるということに注意しておきたい。

回顧的著作の研究には重点を置かないと述べたが、次のベルクソンによる告白はわたしたちにとって無視することが出来ないものであると思われるので、触れる。下記の引用文は、第一章で引用した『思想と動くもの』の「緒論」に関連づけられる出来事を含んでいる。この出来事についてベルクソンが述べるのは、同じく『思想と動くもの』に所収されている「可能性と事象性」(Le possible et le réel)<sup>4</sup>においてである。ベルクソンは次のように述べて、わたしたちに、彼の人生に起きた思想的なある事件<sup>5</sup>を伝えている。

「約 50 年前のことで、その頃私はスペンサーの哲学に傾倒していた。わたしはある日、あの

哲学では時間 (temps) が何の役にも立っていない、なにもしていないということに気がついた。ところでなにもしていないものはなにもものでもない。しかし時間はなにもものかであると私は考えた。それだから時間ははたらくのである。ではいったい何をすることができるか。単純な常識は答えて言う。時間はすべてのものがいっぺんに与えられることを妨げているものである。時間は遅れさせる、というよりもむしろその遅延である。そこで時間は仕上げの仕事でなければならない。してみると、時間は創造および選択の乗り物ではないであろうか。時間の実在は事物のうちに不確定があるということを証明しているのではあるまいか。時間はこの不確定そのものではあるまいか」 (PM, 102)<sup>6</sup>。

この箇所ではベルクソンは、ベルクソン自身がスペンサーに傾倒していた時期があることと、そのスペンサーの哲学における時間の役割について批判的に考察し始めた時期があること、すなわち、ベルクソンはある日を境にスペンサーの思想に対して別の態度をとるに至ったことを述べている。この文章が含まれている論文が発表された 1930 年の約 50 年前である 1880 年頃というのは、ベルクソンにとってどのような時期だろうか。

本稿の第一章の「1-1 ベルクソンの生涯」で述べたことではあるが、ここで、この 1880 年頃という時期に注目し、少し整理しておきたい。1880 年頃というのは、ベルクソンの第一の主著となった『直接与件』と副論文『アリストテレスの場所論』がアルカン社から出版される 1889 年以前のことであり、その頃ベルクソンは高等師範学校に在籍していた。1881 年にベルクソンは教授資格国家試験に合格し、高等教授資格を取得することになる。そして、1883 年からベルクソンはクレルモン＝フェランのリセの教授として大学入学資格試験のクラスを 1889 年の博士論文審査に至るまで担当したと言われる。つまり、先に引用した箇所にベルクソン自身によって述べられた「約 50 年前」というのは、1870 年から 1880 年、そして 1890 年までの 1880 年の前後 10 年の計 20 年間に含まれる時期だと考えてよいだろう。この時期、ベルクソンは高等師範学校の学生だった期間を経て高校の教員を勤め、それと平行して博士論文を提出している。

第一の主著となった『直接与件』が公刊される以前にベルクソンが経験した「事件」について知る手掛かりとなる資料として、ベルクソンが教授時代に行なった講義についての記録がある。これは、ベルクソンがスペンサーの哲学に熱中していたと述べている頃に近い時期、ベルクソンが行なった講義に出席していた学生が書き留めた講義のノートである。これが先に分類した⑤講義録である。

『思想と動くもの』「緒論」の文章を、ベルクソンがわたしたちに打ち明けてくれた告白であると受け止め、ベルクソンの意志に反することになるが、講義録においてベルクソンが述べたとみられるスペンサーについての記述を迫りかけることは、ベルクソンの哲学にスペンサーがどのような影響を与えたのかを明らかにする本研究にとっては不可欠なのではないかと考える。つまり、わたしたちは回顧的著作におけるスペンサーへの批判をそのまま受け取ることはしないが、そこに書かれていることをヒントにして、ベルクソン自身の言葉を証拠付けるものと期待される当時の講義録をあたってベルクソンの思想の変遷を迫りかけることにする。このような研究方法でベルクソン哲学を開いて見せることは、1934年以降にベルクソンの哲学に触れることができた者たちの特権であるだろう。

すなわち、わたしたちは回顧的著作におけるベルクソンの告白をヒントにし、⑤の講義録における『直接与件』以前のベルクソンがスペンサーの思想についてどのようなことを考えていたのかの痕跡を探り、その後で諸著作に、それらが発行された順に従って考察を加えていくことにする。『思想と動くもの』に関しては、回顧的著作として扱い、『進化』に至るまでのベルクソンの考察を、ベルクソン自身がどのように述べているか補うという役割を担うものとして扱うことにする。

<sup>1</sup> 本研究を構成するにあたり、異なるカテゴリーのテキストをどのように扱うべきかという問題に直面した。筆者の先輩である鈴木氏がキェルケゴール研究において同様の問題に直面したことを知り、その方法的考察に大いに助けられた。しかし、ここでの全ての判断は全て筆者自身のものであり、鈴木氏からは方法論的な示唆を受けただけである。以下を参照。鈴木祐丞『キェルケゴールの信仰と哲学——生と思想の全体像を問う——』ミネルヴァ書房、2014年。

<sup>2</sup> ベルクソンは次のような内容の遺言書を残している。「わたしは自分が公にしたいと願ったすべてのものを公刊したと宣言する。したがってわたしは、わたしの原稿やその他の場所に見出されるかもしれない一切の手稿、もしくは手稿のいかなる部分の出版をも断固として禁じる。私は、講義や授業や講演について存在するかもしれない記録や、それらに関する私自身の覚書の出版を一切禁じる。」これはローズ＝マリー・モセ＝バステイドが『教育者ベルクソン』のなかで引用した文章である (Bergson *éducateur*, Paris: P.U.F., 1955, p. 352)。

<sup>3</sup> ベルクソンの思想に対する回顧的な解明についてはベルクソン自身が拒否するものでもあると考えられる。以下を参照。「ヘフディングへの返信の中でもベルクソンは、たしかに理由をすべてあげているわけではないにしても、回顧的な解明にきっぱりと抗議している」 (V. Jankélévitch, *Ibid.*, p. 6)。「製作」の本質は何かを前提してそれについては口をつぐんでいること、総合の喜劇を演ずること、能動的現在分詞ではなく、受動的過去分詞を足場に仕事をこなうことである。とくに最後の意味では製作は常に遡及効をもつ (*rétroactif*) 操作だということが言える。それはちょうど〔博覧会における〕展示の順序が、ついに新しい発明品に至るような総合的順序を装ってはいるが実は発明がなされたあとではじめて成立するような回顧的 (*rétrospectif*) 順序であるのと同様である。この順序を発生の順序と取り違えるとき、知性は、ルヌヴィエの言う「偶像論理」に欺かれている。わたしたちはこうした偶像のうちに主知主義の罪が極まると考えてみたい。というのもベルクソン自身が生命に関するすべての問題のうちにこうした偶像が潜んでいることを、表立ったやり方ではないにせよ、つねに告発し続けてきたからである。わたしたちはこの偶像を回顧性の錯覚と呼ぶことを提案する」 (*Ibid.*, pp. 20-21)。ジャンケレヴィッチとともにわたしたちは次のように考えることになるだろう。「諸契機の時間的秩序およびその続き具合は、ベルクソニズムにおいて式次第ではなく、ベルクソニズムそれ自身であり、その一事をもってベルクソニズムは他のどんな哲学とも異なる一つの哲学なのである。アンリ・ベルクソンのベルクソニズムを理解するために必要な第一の条件は、時間の向きにさからって考えないことである。ベルクソニズムは未来への向きに、結局はあるがままの向きに思考されることを欲するのだ。」

<sup>4</sup> 1930年11月にスウェーデンの雑誌『北方時報』 (*Nordisk Tidskrift*) に掲載された論文。

<sup>5</sup> 前田英樹氏はベルクソンに起きたこの思想的展開を「事件」と呼ぶ。「事件」と呼べるほどの重要性をもつ出来事であったことに著者自身も同意する。前田氏はベルクソンが緒論第一部で「可能性と事象性」におけるのと同様の転回について述べている箇所を引用している。前田英樹、『ベルクソン哲学の遺言』岩波書店、2013年、24頁。先に引用した箇所 (PM, 2) を、続く次の箇所も含めて、前田氏もまた引用している。

「わたしは、進化の哲学全体で主役を演じるはずの実在の時間が、いかに数学を逃れるものであるかを見て、ほんとうに愕然とした。時間の本質は流れることなのだから、その一部分が今ここにある時は、ほかの部分はまだない。したがって、測定を目当てにして、部分に部分を重ね合わせることは不可能だし、想像することも、考えることもできない。」 « Nous fûmes très frappé en effet de voir comment le temps réel, qui joue le premier rôle dans toute philosophie de l'évolution, échappe aux mathématiques. Son essence étant de passer, aucune de ses parties n'est encore là quand une autre se présente. La superposition de partie à partie en vue de la mesure est donc impossible, inimaginable, inconcevable. » (PM, 2)

<sup>6</sup> « Il y a quelque cinquante ans, j'étais fort attaché à la philosophie de Spencer. Je m'aperçus, un beau jour, que le temps n'y servait à rien, qu'il ne faisait rien. Or ce qui ne fait rien n'est rien. Pourtant, me disais-je, le temps est quelque chose. Donc il agit. Que peut-il bien faire? Le simple bon sens répondait : le temps est ce qui empêche que tout soit donné tout d'un coup. Il



---

retarde, ou plutôt il est retardement. Il doit donc être élaboration. Ne serait-il pas alors véhicule de création et de choix? L'existence du temps ne prouverait-elle pas qu'il y a de l'indétermination dans les choses? Le temps ne serait-il pas cette indétermination même? »

### 第三章 1890年頃までのベルクソンのスペンサー理解 ——講義録を手掛かりに

#### 本章の検討課題

『思想と動くもの』の中で、スペンサーに傾倒していた時期があることと、そのスペンサーの哲学における時間の役割について批判的に考察し始めた時期があること、すなわち、ベルクソンはある日を境にスペンサーの思想に対して別の態度をとるに至ったことをベルクソン自身がわたしたちに伝えていることは先に述べた。第一の著作『直接与件』が1889年に公刊される以前の時期にベルクソンが経験したとされる事件について知る手掛かりとしてわたしたちが手に入る事ができる資料が、本章で扱ういくつかの講義録である。この講義録は、ベルクソンが講師時代に行なった講義を記録したものとされているが、ベルクソンの手によるものではなく、ベルクソンが行なった講義に出席していたとされる学生が書き留めた講義のノートであると言われている<sup>1</sup>。

本章は、この諸講義録を手掛かりに、『直接与件』が公にされる以前のベルクソンの思想傾向を探り、ベルクソンが自ら述べていたスペンサーの思想へ傾倒していたということを示すような痕跡を見つけることを課題とする。また、そういった痕跡が講義録にも見られるとするならば、彼は、スペンサーの思想のどういった内容に対して夢中になっていたのか明らかにする。この考察を通して、そのスペンサーの思想を受けてベルクソンはどのように思索していったのかについても併せて明らかにすることが本章の課題である。

#### 1 1884年から1885年

##### 1-1 アナクシマンドロス<sup>2</sup>の思想についての講義

講義録に収められている諸講義の中で最も古い時期のものとして伝えられているノートに、ベルクソンがスペンサーの思想について述べたこととして、次のような記述がある。

「アナクシマンドロスは未規定な質料の観念を、永遠の運動の観念を、特化を本義とした分離の観念を哲学のなかに導入した。ところで、これらの観念は重要な観念である。それらは進化論的理論の観念なのだ。H. スペンサーが等質なものから異質なものへの移行と呼んでいるものは、アナクシマンドロスのいうエクリシス以外のものではない」(CIV, 164)。

この文章は、1884年2月から1885年6月にかけてクレルモン＝フェラン大学で講師を務めていたときに行なった講義を聴講していた学生によって書き写されたノート、黒いカバーのノートだったことから黒いノート (*Cahier Noir*) と呼ばれているノートなのだが、そのなかの一つである。ここには、ベルクソンがアナクシマンドロスについて述べながら、スペンサーの思想について講義したことが記録されている。この一節は、ベルクソンが、スペンサーをどのように理解していたかという点に注目する者にとって、有益な示唆を含んでいると思われる。というのは、ベルクソンは、スペンサーの進化の原理とされる「等質なものから異質なものへの移行」が、アリストテレスなどの著作によって伝えられるアナクシマンドロスのエクリシスという概念と同一のものであると考えていることを伺い知ることができる。では、ベルクソンが述べている、アリストテレスによって伝えられているところのアナクシマンドロスのエクリシスという概念はどういった概念なのだろうか。ベルクソンは「エクリシス」という概念について、次のように述べている。

アリストテレスの注釈によりながら、ベルクソンは、アナクシマンドロスが属性としての「無限」 (*τὸ ἄπειρον*) を諸事物の原理としたこと、その原理としての無限は、「限定されないことを固有の性質としたある種の質料である」 (CIV, 162) と述べている。この質料は「ミグマ」である。「アナクシマンドロスのいうミグマはひとつの無限定な質料的全体で、一定の性質を有することがない」 (CIV, 163)。「諸事物はいかにしてこのミグマから出来たのか。それは分離によってである、とアリストテレスは言っているが、その際、彼はエクリシス (*ἐκκρισις*) アポクリネスタイ (*ἀποκρίνεσθαι*) という動詞をも用いている」 (CIV, 163)<sup>3</sup>。「アナクシマンドロスのいうミグマの本性を考えるなら、エクリシスという語はここでは機械論的な分離 (*séparation mécanique*) の意味をもつことはできない」 (CIV, 163)。「アリストテレスのあるテキスト (『天体論』) は、エクリシスという語は機械論的分離の意味を必ずしもたず、それは潜在性から実在への移行を十全に指し示しうるとわたしたちに指摘している。だから、諸事物は始原のミグマから出来することで規定され、諸性質を獲得するのである。ただ、これは明確には定義されざる過程であって、分離と変容の中間 (*le milieu entre la séparation et la transformation*) を占めている」 (CIV, 163)。「(アナクシマンドロスは、) 普遍の変容 (*la transformation universelle*) をより簡単に表象できるように、まったく規定されざる質料を探求した」(括弧内補足引用者) (CIV, 164)。ベルクソンが講義の中で述べているアナクシマンドロスのエクリシスとは、ミグマから諸事物が出来する過程のことであり、潜在性から実在への移行を十全に指示し得る、分離と変容の中間であるような、普遍の変容のことであり、と整

理することができる。これは、「未規定な質料の観念」、「永遠の運動の観念」「特化を本義とした分離の観念」という先に引用した箇所における定義とも矛盾しないどころか、これらの観念における「分離」の概念をよりよく説明する。

ただし、ベルクソンは上記引用箇所で、アナクシマンドロスのエクリシスはスペンサーの「等質なものから異質なものへの移行」と同一のものであると述べているが、両者が同一であるということをこの箇所だけで理解することはできないように思われる。というのは、アナクシマンドロスにおいては、「未規定な質料の観念」が原理であり、そこから「変容と分離の中間」であるような分離によって諸事物が生み出されているというのであれば、スペンサーの「移行」とアナクシマンドロスの「エクリシス」はベクトルが反対であると思われるからである。従って、ベルクソンが講義で述べたように両者が同一であると思ふためには、スペンサーの思想におけるこの「移行」について知ること、及び、スペンサーについてベルクソンがどのような考察を行なっているのかについて考えることが必要であると思われる。「移行」についてベルクソンが述べていることについては、次の項で確認する。

先の引用箇所について再度整理すると、この箇所においてスペンサーは「進化論的観念」を持っており、「等質から異質へ」という「移行」を述べた哲学者であり、アナクシマンドロスと同様に「普遍的変容」について述べた哲学者であるとベルクソンは考えていたということになるだろう。

## 1-2 イギリスの哲学についての講義

上記と同時期、すなわち、1884年から1885年にかけての時期に、ベルクソンは同じくクレルモン＝フェランにおける哲学史についての講義のなかで、イギリスの哲学について解説しており、そのなかでイギリスの哲学を経験的なものであるとし、そのなかにスペンサーを位置づけている<sup>4</sup>。ただ、そのイギリスの哲学における進化思想の起源にはヘーゲルの思想があることを示唆し、それがダーウィンとスペンサーに繋がるということも述べている<sup>5</sup>。「ダーウィンとスペンサーは、一方は博物学的考察によって、他方は形而上学的考察によって進化の教説に辿り着いた」(CIII, 52)<sup>6</sup>と記されており、「この教説が最も大きな一般性を獲得したのはスペンサーにおいてである。スペンサーによると、ある大法則が物質的世界と精神的世界を、宇宙全体を司っているのだが、等質なものから異質なものへの移行、それがここに言う大法則である」(CIII, 52)<sup>7</sup>と記されている<sup>8</sup>。

ベルクソンはスペンサーがイギリス経験論の流れをくみ、かつ、唯物論を引き継ぐ進化思想

の流れもくむ哲学者であることを伝えている。ベルクソンは、ここでは「大法則」と呼んでいるが、「等質なものから異質なものへの移行」によって進化の教説をつくったことについては、先に述べた講義のなかで述べていたように触れている。ベルクソンは、ダーウィンと異なるスペンサーの特徴として、スペンサーは「形而上学的考察によって進化の教説に辿り着いた」ことだと述べている。

19世紀の哲学についての講義の中でもベルクソンはスペンサーについて伝えている。そこではスペンサーは実証主義者であるということ、スペンサーにとっては、特殊なものから一般的なものへの歩みの方が精神には馴染み深いものだったということ、科学的精神の持ち主がもつ一般性がスペンサーの言う一般性であることが、コントと比較されて述べられている。スペンサーの「移行」についていえば、この箇所に従えば、この「移行」は特殊なものから一般的なものへの歩みであり、諸部分から全体へと向かう方向をもつものである。

## 2 1887年から1888年<sup>9</sup> (1)

### 2-1 科学と哲学についての講義

1887年から1888年にかけての時期にベルクソンがおこなった講義として伝えられている哲学の一連の講義は、科学について、そして哲学について、さらに両者の関係について扱っている。この講義ではスペンサーの名前こそ書き留められていないものの、「ダーウィンの思想に着想を得た進化論学派」と、スペンサーの思想であることを推察させる<sup>10</sup>言葉が残されている。この言葉が置かれた文脈を理解するために、ベルクソンによるこの一連の講義の内容を、この講義の主題である「科学」「哲学」及び両者の関係についてベルクソンがどのように述べているのか明らかにしたい。ただし、スペンサーが果たした役割をベルクソンがどのようなものとして考えていると思われるかという観点から整理することにする。

「科学」の目的について、ベルクソンは次のように述べている。

「科学は、一見すると根底的に区別されているかに見える諸事象ないし諸現象を、もっと大きく言うなら、そうした諸対象を比較し、獲得された認識の膨大なる多様性をごく少数の定式 (formule) に還元することで、これらの対象についてのわたしたちの認識を単純化する (simplifier) ことを目的としている」(CII, 18)。

科学は多様な認識を定式に還元する、すなわち定式化し、単純化するという目的を持つ。定式

については次のようにも言われる。

「科学は、原因 (cause) の発見ないし確認によって獲得された唯一の定式 (formule) のうちに、できるだけ多くの個別的な事象を包摂しようとする」(CII, 18-19)。

定式は原因の発見や確認に伴われ、それは多くの事象と対照的に、ここでは唯一のものであると述べられている。原因については次のようにも述べられている。

「科学的に認識すること、それは、なぜこの事象が生じたのかを知り、その原因 (cause) を説明すること」(CII, 19)。

定式を獲得し単純化する科学的な認識は原因を説明することと同義であるとされる。つまり、定式化し単純化することと並んで原因について究明することを科学は己の役割として担っているということになるだろう。この科学の役割によって「法則」が見出されることが次のように述べられる。

「ごく少数の定式 (formule) によって数多くの認識を表現し、この定式のうちにそれらを包摂することで、科学はこれらの認識を還元しようとする、とわたしたちは言った。これらの定式 (formule) は、まさにそれが数多くの個別例に適用されるがゆえに、一般的定式 (formules générales) または端的に法則 (lois) と称される」(CII, 19)。

この「単純化」し、一般的定式あるいは法則を見付けようとするのが、科学の役割であると述べられているのに加えて、これについては次のように述べられる。

「人間は物質的欲求以外にも、知的、道徳的次元での希求をも有している。人間のうちには、認識するために認識し、単に自分は分かっているし知っていると思いうる快樂のために理解するべく人間を促すような本能が存在している」(CII, 20)。

「科学が応えているのはこのような欲求であって、心理学講義のなかで、この欲求の分析と説明を試みる際に見ることになるだろうが、この欲求は最終的には単純化し (simplifier)、一

般化する (généraliser) 欲求であり、そうした欲求が人間の知性を特徴づけている (caractériser l'intelligence humaine) のだ」 (CII, 20)。

ベルクソンが述べるところによれば、「単純化」し「一般化」することは「人間の知性を特徴づけている」欲求である。このように「科学」について述べたベルクソンは、次のように、実際に生じている「奇妙な」事態について述べている。

「とても自然なことではあるが奇異に見えるかもしれないことがある。諸科学は進歩し、細分化すればするほど、より多くの新たな科学が創設されるのだ。このことは、ものごとを研究すればするほど、その複雑さに気づかされるという事態に起因している」 (CII, 26)。

科学が単純化及び一般化を目指すものとベルクソンが述べていることを確認したが、先ほど述べた人間の単純化及び一般化の欲求と逆の事態が実際には生じていることをベルクソンは述べている。

「多様化に向かう科学のこの傾向は、われわれの理性が有する数々の本能のうちのひとつとは正反対である。事実、この講義の冒頭で見たように、人間の理性は単純化を目指すのだから (En effet la raison humaine vise comme on l'a vu au début du cours à la simplification) 」 (CII, 26)。

この単純化を目指す傾向をもつ理性は分化した「科学についての哲学」を構成するとベルクソンは述べている。

「それゆえ、各々の科学が数多の下位区分へと展開される傾向を有しているとしても、この傾向とは別に、できるだけ単純化し (simplifier)、凝縮し (condenser)、ごく限られた数の定式のうちに真理を包摂しようとする (embrasser la vérité dans un nombre très restreint de formules) 逆の傾向があるのはごく自然な事態であろう。——実際、どの科学のうちにも、ある特別な章 (un chapitre spécial) が存在しうるし、現に存在している。その科学についての哲学 (la philosophie de cette science) がここに言う特別な章だが、その目的はというと、まずは獲得された結果すべてを集め、次いで、もし可能なら、その科学を構成する諸要素の無

限の多様性を統一性 (l'unité) に帰着させることにある」 (CII, 26)。

ある科学についての哲学が存在し、それは結果を収集し、諸要素の多様性を統一化することを目的とする事が述べられている。

「あらゆる博物学者たちによって遂行された仕事の全体から、獲得された全ての帰結の単純化された表現たるひとつもしくは複数の一般的真理を引き出し、このようにして、多くの散逸せる破片を結びつける事ができるのではなからうか。これはダーウィンの思想に着想を得た進化論学派が試みたことである」 (CII, 26)。

「ダーウィンの思想に着想を得た進化論学派」として考えられていると思われるスペンサーの哲学は、ベルクソンが述べるところによれば、分化した諸科学のある一つの科学のうちに、「一般的真理」を見出そうと試みた、「諸科学の哲学」を構築することを試みた人物として書かれていると思われる。スペンサーは「その科学を構成する無限の多様性を統一性に帰着」させることを試みたと言われているものと思われる。これらのスペンサーの試みをベルクソンは肯定的に評価しているように思われる。というのも、ベルクソンは次のように述べて、哲学の役割について言及し、スペンサーの試みはその役割を果たした試みだったと述べていると思われるからである。

「これまでの考察を踏まえるだけでも、哲学的精神の何たるかをある程度は正確に定めることができる。統一性 (l'unité) へと還元しようとする傾向、無数の事実や対象や観念をごく少数の定式のうちに凝縮しようとする欲望が現れるところには常に哲学的精神の発現があるのだ」 (CII, 28)。

「だから、哲学的精神は科学的精神と一体化する (se confondre)」 (CII, 28)。

「まずは、特殊な諸事実の正確な研究から始めなければならないのだ。しかし、学者のなかでも多くの者がそれで十分だとし、実に多くの詳細な真理に辿り着いたことで満足している。この傾向は分析的精神と呼ばれるが、それとは逆に、集め (grouper)、単純化し (simplifier)、統合し (unir)、一般化する (généraliser) 傾向には総合的精神ないし哲学的精神の名があて



られている。それはまた科学的精神の最たるもの (excellence) でもある」 (CII, 28-29)。

ベルクソンが述べていることによると、「哲学的精神」は「科学的精神」と対立するものではない。対立するどころか、「哲学的精神」には「科学的精神」の最たるものとされている。哲学について述べられて終わるこの講義についての記録のなかでは、スペンサーは「科学的精神の最たるもの」である「哲学的精神」を十分に発揮し、諸事実を「集め」「単純化し」「統合し」「一般化」し、科学の哲学を構築することを試みた者であると見做されていたと推察される。この講義ではスペンサーの思想は肯定的に語られ、ベルクソンが考える哲学的精神を発揮した者として考えられていると思われる。アナクシマンドロスの講義、及びイギリス哲学についての講義のなかで、スペンサーに関してベルクソンが言及していることと異なるのは、ここで扱われるスペンサーの思想への肯定的な評価である。ただし、次のように述べてスペンサーの試みに留保を付けている。しかし次に引用する箇所でもベルクソンが述べるのは、スペンサーの試み自体は間違っておらず、その試みをする時期だけが適切ではなかったという指摘であると思われる。

「ただ、すべてをひとつにして、鉱物、植物、動物を相互に派生させようとしたこの試みはおそらく時期尚早の試みだったのだろう」 (CII, 26)。

これまで見て来たところによると、ベルクソンによって講義の中で語られるスペンサーは特別な批判対象になっているようには思われぬ。講義のなかでは、スペンサーの「移行」「一般化」「単純化」「統一化」など、スペンサー特有の思想についての一般的な言及と科学及び哲学とのその関係について述べられている。「科学」一般、「哲学」一般についての講義のなかでスペンサーの「科学の哲学」が述べられていることは、この記録を見る限り、この時期のベルクソンはスペンサーの思想に傾倒していたという時期の最中にあるのではないかと想像してしまうほどである。

## 2-2 美学講義

ベルクソンは一連の美学に関する講義の中でも、スペンサーの思想を扱ったことが記録として残されている。ベルクソンの美学講義のなかの次の一節は、美的な観念であると言われる「美しい」 (joli) 「優美」 (gracieux) 「崇高な」 (sublime) 「滑稽な」 (ridicule) といった観念

のうち (CII, 42)、「優美」という観念について考察されたものである。

「優美 (grâce) とは何よりも運動の美である。スペンサーは優美についての見事な理論を構築した。彼が言うには、優美の本義は、可能な限り力 (force) を節約することで体を動かすことにある」 (CII, 42)<sup>11</sup>。

「力を節約する」ということとは次にあげる例によって説明される。

「例えば、氷上に見事な曲線を描きながら滑るスケート選手が優美なのは、ごつごつした動きをして、角に来るたびにその跳躍を失ってはまた取り戻し、必要以上の力を消費する代わりに、この動きが選手にいささかも努力を課さないからだ。幹から垂直に出ている枝は優美ではない。というのも、この枝はわたしたちには水平に延ばされた腕にも比されるもので、その場合、幹がある種の疲れを感じているかに見えるからだ。それに対して、自然に、努力なしに、細枝を地に向けて垂らしているときには、柳は優美である。このような理論のうちには真実が含まれている。けれども、それが美についてのわたしたちの理論のうちに組み込まれることを忘れてはならない。なぜなら、力の節約がわれわれを喜ばせるのは、わたしたちが物質的対象の場所にわたしたち自身を置く場合のみで、そのときにのみ、わたしたちは力の節約を理想的な仕方ですら楽しむのだから」 (CII, 42-43)<sup>12</sup>。

ここでは、ベルクソンはスペンサーの「優美」の定義を「わたしたちが物質的対象の場所にわたしたち自身をおく場合にのみ」という留保をつけたうえで受け入れているものと思われる。

### 3 1887年から1888年(2)

#### 3-1 心理学講義<sup>13</sup>

心理学講義においてスペンサーの哲学が最も批判されている箇所は以下の箇所である。

「何人かの心理学者たちは、物質的対象とまったく同様に、諸感覚 (sensations) もおそらくは統一性 (unité) に還元可能だと主張した。わたしたちの感官を打つ対象や物体の無限の多様性のもとに、化学と物理学が原子という究極の要素を発見したことは、誰もが知っている。わたしたちの様々な感覚は基礎的感覚の複合物であって、それゆえ、同じ感覚の反復が、外

見上はこのうえもなく多様な感覚のすべてを説明する、と主張することはできないだろうか。これは、ハーバート・スペンサーならびに進化学派の全体によって展開された仮説である」(CI, 60)。

ここでもスペンサーは多様な現象を定式化し単純化するという科学の手続きに従っているとベルクソンは考えていたことが読み取れる。先ほどは称揚されたこの手続きは、「心理学」において考えられる「感覚」(sensation)については適用できないことをベルクソンは次のように述べている。

「この種の理論にはこだわらないことにする。なぜなら、例えば色の感覚 (sensation) のようなある感覚が、例えば衝撃の感覚のような、他の一群の基礎的な諸感覚から構成されていると主張することは理不尽であるからだ。おそらく色の感覚は、わたしたちの網膜を打つエーテルの原子によって産出された膨大な数の相次ぐ衝撃をその原因としている。けれども、色の感覚は、どの点においても衝撃には類似することのない特殊で、独特な何かである。——更に、聴覚神経に伝達される一連の振動のお陰でのみ、音は聞こえる、という点を示すこともできるだろう。わたしたちが騒音と呼ぶものについても同様で、そのなかには、著しい数の相継起する衝撃が存在している。——けれども、これら2つの例において、多様 (diverse) であるのは感覚の物理的原因であって、感覚それ自体ではない。感覚それ自体は分解不能なもの (indécomposable) なのだ」(CI, 60-61)。

感覚においては「多様性」は物理現象の側にあり、「分解不可能なもの」である感覚は心理的現象の側に位置づけられる。これが、ここでの「多様性」を定式化するという科学の手続きである。「一」なるものと「多」なるものが感覚の領域と物理現象の領域にまたがるものとして、区別される。心理学は、多様な感覚を説明する一なる感覚というものを説明することができないことが述べられている。定式化を普遍的に適用するスペンサーの方法が適用できない科学の一分野があることをベルクソンは心理学における感覚について講義するなかで指摘しているものと思われる。ベルクソンは次のように続けて、感覚についての心理学が持つ可能性について述べている。

「たしかに感覚は、科学的研究の手からこぼれ落ちるものであるかもしれない。まさに、多

様な感覚は互いに何等共通点を持たないがゆえに。多様な感覚を互いに還元しあうことができないがゆえに」 (CI, 61)。

このように述べつつも、ベルクソンはスペンサーへの称賛を惜しむことは無い。

「そうではあるが、この進化論的理論は、称賛されるに値する試みである。というのも、ここで<進化論者>たちが企てていること、それは感覚を科学的研究に付すことだからである」 (CI, 61)。

心理学講義のなかでこの感覚についての考察の他に、スペンサーの思想が批判されている箇所は、意識 (conscience) についての講義で「自我」 (moi) を扱う箇所である。

「すでに示したように、意識 (conscience) はある人格をわたしたちに把握させ、認識させる。言い換えるなら、実体にして原因であるような自我、一にして自己同一的であるような自我、持続し、みずからに目的を課すような自我を、である。 (...) 自我が実体 (substance) であるから、自我が能動的力 (une force active) であるから、自我はこれら多様な (divers) 属性を有するのだ。わたしたちが確証しようと努めたのもこの点である。今は、この理論につきつけられた数多くの反論を検討してみなければならない。多くの哲学者たちは、数々の心理的事象の下に、それらとは異なる基体、実体、一にして自己同一的な自我が存在するということを承認しようとはしない。その結果、彼らは、実体一般ならびに原因 (cause) について、わたしたちと大いに異なる考えを抱くことになる。わたしたちが念頭においている哲学者たちは、特に同時代の哲学者たちである。彼らは、経験論と呼ばれる学派に属している。主要な人物はイングランド人で、機会を見て、すでにわれわれは、スチュアート・ミル、ベイン、ハーバート・スペンサーの名を挙げておいた。フランスではテーヌ氏、リボー氏を挙げておくが、他にも多数の者たちがいる」 (CI, 103)。

彼らは自我について次のように述べていると言ってベルクソンは批判する。

「彼らによると、自我は、実体もしくは能動的力としてそれ自体で実在することはない。自我は言葉に過ぎないのだ。彼らによると、自我とは、わたしたちが心理的事象の総計ないし

総体に付与する集合名詞である。わたしたちのうちには、数々の感覚、感情、観念、思い出がある。それらはすべて心理的事象であって、わたしたち各々が自分自身について語る時、「わたし」と言うとき、それは単に、諸感覚、感情、観念、思い出の総計、その全体の意味にすぎない、というのである。——自我のいわゆる統一性 (unité) は、鎖の統一性とほとんど同一のものであることになろう。鎖は無数の環から成っており、それは複数の環の総和でしかない。にもかかわらず、一本の鎖、とわたしたちが言うのは、わたしたちが要素の全体を一塊のものとして考えているからである」 (CI, 104)。

すなわち、ベルクソンにとって批判の対象なのは、「自我」が「統一性」を保持していると思われるにも関わらず、スペンサーはその「統一性」を認めないと述べているそのことである。興味深いことだが、ここでは「諸感覚、感情、観念、思い出の総計、その全体」であると述べることは「わたし」の「統一性」を語ることにはならないとベルクソンは考えている。「要素の全体を一塊のものとして考える」ことができなければ「自我」の「統一性」を考えたことにはならない、とベルクソンは述べていると思われる。これまで考察してきたことを振り返ると、ベルクソンはスペンサーの思想における「定式化」「単純化」そして「一般化」及び「統一性」への傾向を評価していた。「自我」について扱うこの箇所でもスペンサーは「統一性」への傾向を有しているのは間違いないと考えられていると思われる。その傾向を有しながらも、しかし、スペンサーは「自我」の「統一性」を再現するのに成功していないことがベルクソンによって指摘されていると思われる。

スペンサーの方法についてベルクソンは以下のように評価しつつ、また、批判してもいる。

「合理的諸原理 (des principes rationnels) とその起源をめぐって、ハーバート・スペンサーによって与えられた説明は、経験論者たちが呈示した数々の説明のなかでは、疑いなく最も満足のいく説明である。——事実、それは諸原理と経験の一致を實に見事に説明してくれる。というのも、最初に諸原理が生じるのは経験からだからである。諸原理は、蓄積された無数の経験を要約し、表現し、翻訳しているだけである。——次に、スペンサーの説明は、これらの原理が呈する普遍性という性格と必然性という性格をある程度まで解明してくれる」 (CI, 148-149)。

ベルクソンはスペンサーが用いる方法に対して以上のような考察を加えている。それによれば、

スペンサーは、「諸原理と経験の一致を實に見事に説明してくれる」が、そもそもそのように説明することができるのは「最初に諸原理が生じるのは経験だから」であり、「諸原理は、蓄積された無数の経験を要約し、表現し、翻訳しているだけ」だからだと言われる。つまり、スペンサーの議論は、筋が通っていても証拠がないということになるだろう。

「このように、スペンサーの理論は實に強力であると同時に實に巧みである。——けれども、この理論が、未だ立証されておらず、おそらくは今後も決して立証されないだろう、歴史的仮説に全面的に立脚しているということに眼をつぶってはならない。——なぜなら、結局のところ、話題となっている進化、人類を有機体の下等な形態から徐々に脱却させる緩慢な進化は、その痕跡を残しているはずなのだが、この理論にとっては残念なことに、それは今日ほとんど発見されることがないからである。(…) スペンサーの理論は、何ら記録が存在しないような歴史的出来事に依拠するという重大な欠陥を有しているわけで、まさにそうした歴史的出来事の生起に対して、博物学者たち、地理学者たちは重大な反論を提起しているのである」(CI, 149)。

ベルクソンによるこれらスペンサーについての考察は、この時期かこの時期よりも前に準備され、1889年公刊の『直接与件』を皮切りに発表されていくことになる諸著作のなかに受け継がれていく。この一連の講義において見られたのと同じようにベルクソンはスペンサーの思想を称賛しつつも批判していく。ただし、ここに整理した諸講義録のなかに見られるのは、『思想と動くもの』の一節がわたしたちに告げていた「時間」についての考察とスペンサーの哲学との関係といったものではない<sup>14</sup>。ましてや、力学の「究極の諸観念」とスペンサー哲学の関係(PM, 2)でもない。スペンサーの哲学と「時間」についての考察が直接的に結びつけられて考察されている箇所は見受けられないため、先に述べた「可能性と事象性」及び「緒論第一部」のなかで言及されていることを跡づけることはできない。ベルクソンがスペンサーに感じていた批判点は、スペンサーの哲学における「心理学」における「統一性」についての考察には満足できないということ、及び、スペンサーの進化論が立証され得ない仮説に基づいているという欠陥を有しているということである。

### 3-2 1889年の前年（『直接与件』公刊に向けて）

1889年はベルクソンの博士論文でもあり最初の主著ともなった『直接与件』が発行された年

である。この『直接与件』のなかでベルクソンが述べていることについては次章で詳しく考察を加えるが、ここでその内容を簡略に確認して、1887年から1888年の記録をもつベルクソンの思索の跡についての考察をおこなう本節を、閉じることにしたい。

ベルクソンは『直接与件』で次のような仕方でスペンサーに言及している。

「スペンサーが主張したように、もし優美 (grâce) を努力の節約などに還元してしまうならば、優美がわたしたちのうちに惹起する喜び (plaisir) は理解できなくなってしまう」 (DI, 10)。

このベルクソンによる「優美」についての考察は、講義録において見られる「優美」についての考察と内容は重なる。一見するとスペンサーの主張に対して講義録とは正反対の評価をしているように見える。しかし、講義録では「物質」に関連づけた場合にのみ、ベルクソンはスペンサーの述べていることが正しいと認めていたのであり、ここでは、わたしたちがもつ「喜び」を説明しようとする文脈での考察であるという違いがある。

また、上に引用したのとは別の箇所、ベルクソンはスペンサーに次のようにも言及している。

「ハーバート・スペンサーは言う、「強い恐怖 (frayeur) は、叫び声や、隠れたり逃げたりするための努力や、動悸や震えなどによってあらわれる」と。わたしたちはさらに進んで、これらの運動は恐怖自体の部分をなすものであると主張しよう」 (DI, 22)。

上記引用した2つの箇所に共通するのは、スペンサーの思想が否定的に批判される対象になっているということである。

#### 4 本章のまとめの考察

『思想と動くもの』のなかでベルクソンが述べていることを参考に、1880年から1890年頃までのベルクソンの思想を伝える講義録と『直接与件』におけるスペンサーへの言及を通して、ベルクソンがスペンサーの哲学からどのような影響を受けていると考えられるかについて考察してきた本章を、これまでの考察によって明らかになったいくつかの点を確認し、それに考察を加えることでまとめたい。

アナクシマンドロスの思想についての研究ではベルクソンはアナクシマンドロスの「エクリス」 という概念がスペンサーの「移行」という概念と同一であるということを書いてきた。この概念は「進化」の概念と結びつくものと考えられていると思われた。この「移行」は部分から全体、特殊から一般へと向かうものであることが、続くイギリス哲学についての講義で示されていた。科学と哲学についての講義では、「科学の哲学」を構成したスペンサーの業績は肯定的に捉えられていると思われた。それは科学の分化に統一性を与える哲学であるとされていた。心理学講義では、スペンサーの心理学における試みが失敗に終わっているのではないかという指摘されており、その指摘は「統一性」の価値への疑義によってなされたのではなく、「統一性」の再現に成功していないという指摘であった。『直接与件』では、ベルクソンはスペンサーの優美についての理論、及び、心理学についての理論をとりあげ、それぞれ批判的に扱っていることを簡単に確認した。

以上の点がわたしたちに告げることで重要な点は、まず、ベルクソンがスペンサーにこだわりがあったというベルクソン自身の言葉の確かさを示す資料がベルクソンの著作以外にも存在する、ということである。1870年から1890年頃に現れるベルクソンの思想のなかには、スペンサーに対する肯定的な評価とスペンサーに対する否定的な評価が混在しているという特徴が見られた。この後のベルクソンの思想的展開について考えると、この時期に、ベルクソンはスペンサーの総合哲学体系の試みのほころびを、スペンサーの「心理学」のなかに見出していたのではないかと考えられる<sup>15</sup>。このほころびとは、「一」と「多」、「特殊」と「一般」、「等質性」と「異質性」を結ぶ進化のはたらきについて述べるスペンサーの体系が巧く行っていないことを示すものと思われる。ただし、上で見た限りでは、「一」と「多」、「特殊」と「一般」及び「等質性」と「異質性」という関係のなかで考察をすすめるそのやり方<sup>16</sup>は批判されてはいない。しかし、ベルクソンが『直接与件』において批判していたのがスペンサーの「心理学」についての考察であることと併せて考えると、諸関係のなかで最後まで保持されることが難しいであろうと思われる考えがある。それは、「等質性」と「異質性」との関係であり、等質的なものが異質的になる、とする見方であると思われる。実際に、ベルクソンの基礎的概念である「持続」は純粋な異質性と呼ばれるものである。等質的なものから異質的なものへの移行が進化によってなされるといった説明をベルクソンはおこなわないだろう。ベルクソンは、時間<sup>17</sup>の本質が持続であるというような関係が、「時間」と「異質性」の間にあると考えていると思われる。

本章では当時の学生が記したと思われる講義録を手掛かりに考察してきたが、次章からはベルクソンが書いた諸著作においてベルクソンが実際にスペンサーについて書いていることにつ



いて考察する。

<sup>1</sup> ここにあげる講義ノートは、ベルクソンが、生前、ベルクソン自身が指定した著作群以外の著作物を公の目にさらす事を禁じた遺書を残したにも関わらず、アンリ・ユードを中心にして編集され、ベルクソンの没後公刊されたものである。ベルクソンの遺言を尊重するならば、私たちは、ベルクソンの著作だけを扱うべきであろう。しかし、資料が公刊された以上、その資料を扱わないではいられない欲求にかられるのも事実である。そこで、本論文では、公にされた講義録、書簡等を、推論を進めるための道具にしつつも、あくまでも最終的な根拠は遺言書に基づいて公刊を許された諸著作にもとめ、考察を進めることにする。

<sup>2</sup> アナクシマンドロスはプラクシアデスの子でミレトスの人であると伝えられている。アナクシマンドロスは、無限定なもの（ト・アペイロン）を万物の始元や元素であると主張して、それを空気とか水とかその他のものとして限定することはしなかった。そしてその部分部分は変化するけれども、全体は不変なものであるとした。また地球は球状をなして、（宇宙）の中心を占めながら、その真ん中にあるとした。また月は借りものの光で輝いており、それは太陽から照らされているのであるが、その太陽はしかし地球より小さくはなく、最も純粋な火からできているとした。以下を参照。ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝（上）』加来彰俊訳、東京：岩波書店、1984年、pp. 117-118。以下も参照。『ソクラテス以前哲学者断片集 第一分冊』内山勝利他訳、東京：岩波書店、1996年、pp. 161-162。「[アナクシマンドロスは] タレスの縁者であり、彼の弟子にして後継者であった。はじめて春分・秋分と太陽の回帰（夏至・冬至）を発見し、時計を考案するとともに、大地が宇宙の真ん中にあるとした。また垂針盤（グノーモン）をもたらし、幾何学全般について概略を示した。『自然について』『大地周行記』『彷徨わぬ者たち（恒星）について』『天球論』などを記した」（各括弧内補足引用者）『スーダ』『アナクシマンドロス』の項。同書、p. 162。「ある人たちは、一なるものからそれに内在している対立相反的なものが分離する、としている。例えばアナクシマンドロスや、またエンペドクレスやアナクサゴラスのように一なるものと多なるものの存在を述べた人たちが、そのように言っている。彼ら二人もまた、混合体から他の諸事物を分離させているからである」（アリストテレス『自然学』A4. 187 a-20）、同書、p. 166。

<sup>3</sup> « Comment les choses sont-elles sorties de ce mélange? C'est, dit Aristote, par séparation, et il emploie le terme *εκκρίσις* ou encore le verbe *αποκρίνεσθαι*. »

<sup>4</sup> 「イングランドの哲学は根本的には常に経験的なもので、ベーコン以来、ホップズ、ロック、バークリ、ベンサムなどを経由してスペンサーに至る進化を辿った」（CIII, 49）。

<sup>5</sup> 「ヘーゲルの思想は予想通り唯物論を生み出し、唯物論はビュヒナーとモレシヨトのうちで具現されることになる。この唯物論からは、ダーウィンを首領とするような生理学的心理学の現代の学派が生まれたのだが、スペンサーはダーウィンと共に進化論の首領である」（CIII, 51）。

<sup>6</sup> « Darwin et Spencer sont arrivés l'un par des considérations d'histoire naturelle, l'autre par des considérations métaphysiques à la doctrine de l'évolution. »

<sup>7</sup> « C'est chez Spencer que cette doctrine atteint le plus de généralité. D'après Spencer une grande loi régit l'univers tout entier, le monde matériel et le monde moral c'est le passage de l'homogène à l'hétérogène. »

<sup>8</sup> スペンサー次のように述べている。「「進化」とは、物質の集中作用と、これに随伴する運動の分散作用である。その間において、物質は、不定限的・非凝集的等質性から、定限的・凝集的異質性へと転化する。そしてその間において、保留された運動は、これに平行の形態変化を被る」  
« Evolution is an integration of matter and concomitant dissipation of motion; during which the matter passes from an indefinite, incoherent homogeneity to a definite, coherent heterogeneity; and during which the retained motion undergoes a parallel transformation » (FP, 321) 。

<sup>9</sup> 現在このノートが保管されているジャック＝ドゥーセ図書館に、1981年に寄贈したジャン・ギトン (Jean Guittou) によって書き込まれたと思われるこの講義ノートの第一巻の最初の頁の上部にある「1888-1889」というメモを頼りにすれば、それは1889年に『直接与件』が公刊されるまさにその期間に、ベルクソンが行なった講義であると考えられる。ただ、内容を読んでみると、そこでの教説は『直接与件』それ自体の教説よりも古いものであると推定されている。

以下を参照。「これらの講義を読んでみると、そこでの教説は『直接与件』それ自体の教説よりも古いものであるようにわれわれには思える。『直接与件』での唯心論の強調と機械論の後退を、これらの講義の内容と比較してみると、わたしたちとしては、これらの講義の日付を、それがなされたはずの日付よりも少し前に遡らせたい」(C I, 17)。

<sup>10</sup> 「ここで語られているのは明らかに、ハーバート・スペンサーの膨大な業績である」(C II, 440)。

<sup>11</sup> « La grâce est surtout la beauté du mouvement. Spencer a fait une théorie ingénieuse de la grâce. Elle consiste, dit-il, à se mouvoir en dépensant le moins de forces possibles. »

<sup>12</sup> « Ainsi le patineur qui patine en dessinant sur la glace des courbes onduleuses est gracieux parce que le mouvement ne paraît lui coûter aucun effort, au lieu que s'il dessinait des angles, il paraîtrait perdre et reprendre son élan à chacun des sommets et dépenser ainsi plus de force qu'il n'est nécessaire. Une branche qui sort d'un arbre perpendiculairement au tronc n'est pas gracieuse parce que nous la comparons à un bras tendu horizontalement, et que le tronc paraît en éprouver une certaine fatigue, au lieu que le saule est gracieux lorsqu'il incline naturellement et sans effort ses rameaux vers la terre. Il y a du vrai dans cette théorie, mais il faut remarquer qu'elle rentre dans notre théorie du beau car l'économie de force ne nous plaît que si nous nous mettons nous-mêmes à la place de l'objet matériel, pour jouir idéalement de cette économie. »

<sup>13</sup> 「心理学講義」に分類されるこの記録については、第五章の「恐怖」の感情を分析する際にも改めて扱う。

<sup>14</sup> アンリ・ユードは次のように述べている。「クレルモン心理学講義の全体を通じて、ベルクソンの精神のうちには、スペンサー＝進化論者たち＝進化論という等式が見出される」。「だからわたしたちは、この講義のうちに、後に1922年になって書かれたある物語の裏付けとなるような記録を見ることができる」。「わたしたちが自由にできる記録だけに限るなら、この早期の関心やそこに混じっていた不満や、この不満から生まれた数々の計画、方向、仮説をめぐるベルクソンの事後的な分析を留保なしに受け入れることはできない。それは証言であるより以上に再構成であるように見える」。「持続の直観の起源はむしろ、真に科学的な心理学を構築しようとする努力のうちに求められるべきではなからうか。どちらかという、これがわたしたちの見解であって、この講義を読むと、青年期のみずからの実証主義を多分に誇張しているかに見える『思想と動くもの』の物語を手放しで受け入れることは、わたしたちにはできない。講義のなかには、ベルクソンが唯心論の根本的主張に賛同していないような箇所は微塵も存在していないのである」(C I, 405)。

<sup>15</sup> 先に指摘したアンリ・ユードの次の考察はこの点を指摘するものであると思われる。「持続の直観の起源はむしろ、真に科学的な心理学を構築しようとする努力のうちに求められるべきではなからうか」(C I, 405)。このようにユードが述べる時、ベルクソンがスペンサーには「科学的な」心理学を構築することができなかったと考えていた、とユードが考えていたことを伺い知ることができる。この「科学的な」という意味は、本稿が示したように「統一性」を述べることに成功している、という意味であると思われる。

<sup>16</sup> 後の『創造的進化』でベルクソンはスペンサーの進化についての考えを批判して次のように述べている。ここには、「一」と「多」及び「特殊」と「一般」、そしてスペンサーの述べる「等質性」と「異質性」という関係のなかでの「移行」が問題になっていると思われる。問題になっているのは、スペンサーがこの方法にはスペンサーによってひそかに前提されていたことがあるにもかかわらず、それにスペンサーが気づかなかったということであると思われる。「ただこれだけをいうなら、スペンサーの方法がいつももちいる技巧は、進化しとげたものをくいだいた細片でもって進化をもとどおり構成することである。ものの形をボール紙に貼付けてからボール紙を切り細裂いたとして、その細片を適当に寄せあつめるならもとの姿を造り出すことができる。そしてそのように寄せ紙細工で苦心している子供は、形をなさぬ細片を並べてやっと色付きの立派なデッサンが出来上がると、自分はデッサンや色を作り出したのだと信じるにちがいない。けれどもデッサンを描き彩色する行為は、すでに描かれ彩色された姿のくいだいた細片を寄せあつめる行為とはなんの関係もない。同様に、進化から生じたごく簡単な結果を組み合わせて進化による複雑きわまる成果をどうにか真似することはできるであろう。しかしその簡単なものも複雑なものもそれらの発生するままに辿られたことにはならないし、またそのように進化したものに進化したものを附加していっても進化そのものの運動にはさっぱり似てこ

---

ないであろう」 (EC, 363)。

<sup>17</sup> スペンサーにおける「時間」 (**time**) とはどのような概念なのか。スペンサーは『第一原理』のなかで次のように述べている。「わたしたちは関係において思索する。(…) 関係は思索の普遍的形態である (…) 関係には2つのもの (**order**) がある。一つは連続的關係であり、もう一つは共存的關係である。連続の關係は全ての意識のうちに与えられている (**given**)。 (…) すべての連続の抽象が時間である」 (We think in relations. (...) That *relation* is the universal form of thought (...) Now relations are of two orders—relations of sequence, and relations of co-existence. (...) The relation of sequence is given in every change of consciousness. (...) The abstract of all sequences is Time) (FP, 126-128)。連続性が所与であると述べていることに注意。

## 第四章 1888年頃<sup>1</sup>のベルクソンによるスペンサー心理学批判について

### (1)

#### ——「優美」(grâce)

##### 本章の検討課題

わたしたちは、これから、ベルクソンの最初の著作である『直接与件』のなかでベルクソンがおこなったスペンサー批判を考察する。わたしたちは講義録を扱うことでベルクソンがスペンサーにこだわりを持っていたことを確かめたわけだが、そのスペンサーへのこだわりを経て公にした最初の著作である『直接与件』では、ベルクソンはどういった文脈でスペンサーに言及しているか、そしてスペンサーの何に言及しているか、そしてスペンサーのそれに言及することでベルクソンは何を言おうとしているのか、明らかにすることが本章の課題である。

この課題をクリアするために、まず『直接与件』でベルクソンが主張したこととその根拠とを整理する。そうした議論のなかで、ベルクソンがスペンサーを批判するその意図を追いやすくしたうえで、具体的に、ベルクソンによる批判について考察することにする。その後、ベルクソンが批判しているスペンサーの思想をスペンサーの著作から引用し、そこでスペンサーが述べようとしていることとは何かを考察し、その上でベルクソンが批判するスペンサーの主張と実際にスペンサーが行なった主張との間にずれはないか明らかにする。最後に、ベルクソンがスペンサーに対しておこなった批判を考察することによって何が明らかになったのか整理する。

#### 1 『直接与件』の主題——自由

『直接与件』は、序文と三つの章、そして結論から構成されている。第一章では、意識が問題にされ、意識が量ではなく質であることが示される。第二章では、この意識が流れにおいて考察される。そして、質的で相互浸透的な時間的継起である流れる時間・真の時間と、量的で判別的な空間的並存である流れた時間・空間にほかならないものが示される。前者が「持続」であるとされ、意識はこの「持続」であるとされる。第三章は、時間の立場で自由の問題をとりあげれば、自由が最も明らかな事実であるということが分かる、とされる。内的自我に徹することが、自由であるということだとされる。

このような構成をもつこの書物の主題は端的に言って「自由」である。ベルクソンは「自由」とは何かと問い、自由の問題は時間の問題であり、時間の問題は意識の問題であるとして、意

識とは何かということ、この書物で追求している。そして内的自我に徹する限りでわたしたちは自由であるがその自由は稀にしか経験されることが述べられている。

## 2 『直接与件』のなかのスペンサーの思想への言及

ベルクソンは『直接与件』のなかで次のように述べて、スペンサーの名前をあげてスペンサーの思想に触れる。便宜上それぞれを a)、b)と呼ぶことにする。

a) 「スペンサーが主張したように、もし優美 (grâce) を努力の節約などに還元してしまうならば、優美がわたしたちのうちに惹起する喜び (plaisir) は理解できなくなってしまう」 (DI, 10)<sup>2</sup>。

b) 「ハーバート・スペンサーは言う、「強い恐怖 (frayeur) は、叫び声や、隠れたり逃げたりするための努力や、動悸や震えなどによってあらわれる」と。わたしたちはさらに進んで、これらの運動は恐怖自体の部分となすものであると主張しよう」 (DI, 22)<sup>3</sup>。

『直接与件』においてスペンサーの名前をあげる箇所はこの二カ所である。このいずれの箇所も、『直接与件』の第一章「心理的諸状態の強度について」に含まれている。本章の1で整理したようにこの第一章は、「質」と「量」とを区別する意図をもつ章であり、分量としては P. U. F. の *Quadrige* 版で計 55 頁という分量をもつ。その章のはじめの方に位置する文章が上記の文章である。上記の文章のなかでベルクソンは、スペンサーの名前をひいて、「優美」や「恐怖」とそれに関わる運動について考察し、ベルクソン自らが考えていることを示そうとしている。次節から示すことになるが、ここで自らの考えを示すための導入に過ぎないかのようにさりげなく出されているスペンサーの思想は、一見上のさりげなさにもかかわらずベルクソン哲学において大きな重要性をもつと思われるため、「優美」について述べている箇所と「恐怖」について述べている箇所について、章を跨いで考察することにする。

本章では、まず、上記の引用のうち、ベルクソンが「優美」について書いていることについて考察する。方法としては、ベルクソンにおける「優美」の概念について整理し、それから、「優美」についてスペンサーが書いていることを整理する。その上でベルクソンが述べていることはスペンサーが述べていることと何が同じで何が異なるのか明らかにする。この考察を経て、他でもないその場所でベルクソンはスペンサーについて言及する必要があったということ

が示されるだろう。「恐怖」についての考察は、章を改めて論じる。

### 3 『直接与件』における「優美」

本章で特に考察する文章は、以下の文章である。

- a) 「スペンサーが主張したように、もし優美を努力の節約などに還元してしまうならば、優美がわたしたちのうちに惹起する喜びは理解できなくなってしまう」 (DI, 10)。

この文章からわたしたちは、ベルクソンがここでおこなっているのはスペンサーが述べた「優美」という概念を否定的に批判することだとすぐさま理解するだろう。わたしたちはベルクソンが述べる「優美」についてより多く知る必要がある。そこで、わたしたちはそもそもベルクソンが述べようとしている「優美」についての考察がどのようなものであるのかについて考察することにする。ベルクソンにとって、「優美」とはどういった概念なのだろうか。少し長くなるが、上に引用したスペンサーへの言及箇所を含む、「優美」について述べている箇所を引用する。

「新たな要素が次々に介入してきて、根本的な情動のうちに観て取られるものとなり、実際にはかかる情動の本性を変容させているだけなのに、外見的には情動の大きさを増大させているかに思える、そのような事例として、更に際立った事例を提供してくれるのは美的な感情である。美的な感情のうちで最も単純なもの、すなわち優美 (*grâce*) の感情を考察してみよう。まずは優美とは外的な運動におけるある種の心地よさ、ある種の容易さの知覚にすぎない。ところで、容易な運動とは個々の運動が互いを準備し合うような運動であるから、わたしたちは遂には、予見された運動のうちに、そしてまた、来るべき態度を示し、それらをいわばあらかじめ形成するような現在の態度のうちに、より高度な容易さを見出すに至る。ぎくしゃくした運動が優美を欠くのは、その個々の運動が自足していて、それに後続する運動を告知してくれないからである。優美が折れ線よりも曲線を好むのは、曲線が絶えずその方向を変えるにもかかわらず、その新たな方向の各々がそれに先立つ方向のうちですでに指示されているからである。したがって、運動することの容易さの知覚は、ここでは、いわば時間の歩みを引き留めて現在のうちに未来を保持することの喜びと一体をなしているのだ。優美な運動が、あるリズムに従い、音楽を伴っているような場合

には、第三の要素が介入してくる。すなわち、リズムと拍子のおかげでダンサーの運動がよりよく予見されるために、今度はわれわれ自身がその運動の主であるような気がしてくる。ダンサーがとろうとしている姿勢がほとんど見抜けてしまうので、彼が実際にその姿勢をとるときには、彼のほうがわたしたちに従っているように見えるのだ。リズムの規則性は彼とわたしたちの間にある種の交流関係を打ち立て、拍子の周期的回帰はというと、その各々が、わたしたちによって操られる架空の人形の本の見えない糸のごときものなのだ。それどころか、不意にその人形が止まってしまうものなら、わたしたちの手はこらえきれなくなって動きだし、その人形を押して、この運動の只中にそれを置き戻そうとせずにはおれず、そうなる、かかる運動のリズムがわたしたちの思考と意志のすべてであることになる。このように、優美の感情にはある種の身体的な共感 (*sympathie physique*) が関与している。この共感の魅力を分析してみれば分かることだが、わたしたちがこの共感を好むのは、それが精神的な共感 (*sympathie morale*) と類似しており、わたしたちに対して精神的な共感の観念を巧みに暗示してくれるからである。共感というこの最後の要素——他の諸要素もこの最後の要素をいわば告げ知らせた後には、それと一体になってしまう——によって、優美の抗しがたい魅力が説明される。というのも、スペンサーが主張したように、もし優美を努力の節約などに還元してしまうならば、優美がわたしたちのうちに惹起する喜びは理解できなくなってしまうからだ。しかしながら、本当のところは、きわめて優美なものなら、どんなものの中にも、動性の徴である軽快さに加えて、わたしたちに対する可能的な運動——潜在的な共感、それどころか現に生まれつつある共感——への指示を見分けることができるとわたしたちは思う。この動的共感はずねに与えられる寸前の状態にあるのだが、それこそがより高度な優美の本質なのである。こうして、美的な感情の増大する強度も、ここではその強度と同じだけの様々な感情に還元される。この感情の各々は、それに先立つ感情によってすでに告知されていたもので、やがてこの先行的感情のうちで顕著になり、ついこれを決定的に凌駕してしまう。この質的な進展を、わたしたちは大きさの変化の意味に解釈してしまう。なぜなら、わたしたちは単純な事物を好んでいるし、わたしたちの言語は心理学的分析の機微を言い表わすには不都合だからである」 (DI, 9-10)。

上に引用した箇所は内容が複雑であるため容易に要約を許さないうえ、わたしたちの議論にとって重要な箇所を含む。従って、上記の引用文を少しずつ区切ってその意図するところを考察



することにする。

### 3-1 「優美」を扱う理由

ベルクソンは「優美」について次のように述べるとともに、「優美」について述べる理由を明らかにしている。

「新たな眼に見える要素が次々と根本的な情動のうちに介入し、実際にはかかる情動の本性を変容させているだけなのに、外見的には情動の大きさを増大させているかに思える、そのような事例として、更に際立った事例を提供してくれるのは美的な感情である。美的な感情のうちで最も単純なもの、すなわち優美 (grâce) の感情を考察してみよう」 (DI, 9)。

ベルクソンが「優美」について扱うのは、それが「新たな眼に見える要素が」「情動の本性を変容させているだけなのに、外見的には情動の大きさを増大させているかに思える事例のうち、際立った事例を提供する」「美的感情」だからであると言う。つまり、「本性」と「大きさ」とが、「質」と「量」を表わしており、区別されるべき「質」と「量」とが区別されにくいという意味で適切な事例を提供するものとして「優美」が考察されているものと思われる。また、「優美」(grâce) とは「感情」(sentiment) であり、それも「美的な感情」(les sentiments esthétiques) であるとされる。そして「美的な感情」のうちで「最も単純なもの」(le plus simple) であるとされる。

私たちは「優美」に着目する理由を確認したが、それではベルクソンが考える「優美」とは何であるか。

### 3-2 「優美」の発生

続いてベルクソンは「優美」について以下のように述べる。

「まずは (d'abord) 優美とは外的な運動におけるある種の心地よさ、ある種の容易さの知覚にすぎない」 (DI, 9)。

ベルクソンは「まずは」(d'abord) と始める。そして、ベルクソンは「優美」がまず「知覚」(perception) にすぎないと述べる。そしてその知覚の性質を限定し、その性質が「外的な運動」

における「心地よさ」と「容易さ」の「知覚」であると続けている。

「優美」を「感情」であると述べてすぐに「優美」がまずは「知覚〔：見てとられるもの〕（括弧内補足引用者）」であるとベルクソンは述べているのだが、ここで「まずは」（d'abord）という言葉が無ければ、「感情」と「知覚」とがどのように直結するのだろうかという疑念が湧くかもしれない。つまり、ベルクソンはここで、「優美さ」が感情としてどのようにわたしたちに抱かれるようになるか、そのはじまりから述べようとしていると思われる。すなわち、ベルクソンは「優美」とは何かを考えるにはその感情の発生の仕方について考える事が適当であると見做しているということがここでは示されていると思われる。続く引用が「感情」と「知覚」の関係について規定するのではなく、わたしたちに「心地よさ」と「容易さ」を「知覚」させる「運動」をより詳細に考察していることが、わたしたちのこの考えの正しさを示している。その発生について辿ることで「優美」について述べるベルクソンは次のように続けている。

### 3-3 程度を持つ「優美」

ベルクソンは次のように述べている。

「ところで (Et)、容易な運動とは個々の運動が互いを準備し合うような運動であるから、わたしたちは遂には、予見された運動のうちに、そしてまた、来るべき態度を指示し、それらをいわばあらかじめ形成するような現在の態度のうちに、より高度な心地よさを見出すに至る」 (DI, 9)。

ここで述べられていることには注意しなければならないと思われる。というのは、先ほどの引用箇所では、「優美」が「外的運動における (dans)」 「知覚」であると述べられていたことを確認した。先ほどは「外的」と言われていたに過ぎないその「運動」が「容易」であると見做されていて、その運動とは「容易な運動とは個々の運動が互いを準備し合うような運動」であり、「容易な運動」はこういった性格を帯びた運動である故に、わたしたちは「高度な心地よさ」を見出すに至ると述べられているからである。ここにはわたしたちに「優美」であると感じさせる「運動」の客観的側面が述べられていると思われる。「個々の運動が互いを準備し合うような運動」がそれである。そしてその運動を知覚したわたしたちは優美さを感じると述べられている。というのも、「個々の運動が互いを準備し合うような運動」が「予見された運動」をわたしたちにもたらし、「来るべき態度」をわたしたちに指示するのだが、そこでわたしたちがとる

態度とはその来るべき態度を「あらかじめ形成する現在の態度」だからである。「優美」は「容易さ」「心地よさ」の「知覚」であるが、その「知覚」は対象とする「外的な運動」の性格に従ってより「高度な心地よさ」、すなわちより「高度な」知覚になる。つまり、この「優美」の「知覚」は程度を容れる知覚であるということが示されているものと思われる。続けてベルクソンは「折れ線」と「曲線」を使って「運動」が「優美」を欠く場合を述べている。すなわち、「優美」が程度を容れる「知覚」であるからこそ、「優美」が「欠く」場合があること、「優美」が「曲線」を「好む」という言い方が取られているものと思われる。

#### 3-4 運動が「優美」を欠く場合とそれと対照的な曲線の考察から見て取れる

##### 未来の在処

ベルクソンは次のように続けて述べている。

「ぎくしゃくした運動が優美を欠くのは、その個々の運動が自足していて、それに後続する運動を告知してくれないからである。優美が折れ線よりも曲線を好むのは、曲線が絶えずその方向を変えるにもかかわらず、その新たな方向の各々がそれに先立つ方向のうちですでに指示されているからである」(DI, 9)。

ベルクソンによれば、「ぎくしゃくした運動」とは「個々の運動が自足していて、それに後続する運動を告知してくれない」運動である。この「ぎくしゃくした運動」は、「容易さ」「心地よさ」という「個々の運動が互いを準備し合うような運動」である「優美」をもたらす「運動」を「欠く」。「自足」し「それに後続する運動を告知しない」「運動」は、「互いを準備し合う」「運動」とは異なる運動であり、「運動」がどういったものであるかが「優美」か「優美」を「欠く」かについて決めるということが示されている。「運動」は「自足」する場合もあるし「互いを準備し合う」場合もあるが、「ぎくしゃくした運動」は、わたしたちのうちに「予見された運動」をもたらさないし、「来るべき態度」をわたしたちに指示しその来るべき態度を「あらかじめ形成する現在の態度」をとらせない。

「優美は折れ線よりも曲線を好む」と言われる。というのも、曲線は常に方向を変えるが、新しい方向は先立つ方向の内に指示されているからである。「優美」は、「常に方向を変えるにも関わらず、先立つ方向によって新しい方向が指示されている曲線」に惹かれる。すなわち、ここでは、「互いを準備し合う運動」の「互いに準備し合う」ということが、「先立つものによ

って新しいものが指示される」ことと共通するものとして示されていると思われる。ここには「予見」ということ、そして「来るべき態度を予め形成する現在の態度」ということとも共通するものが示されているともまた思われる。すなわち、「準備」、「予見」「予告」そして先立つものによる「指示」が同等のものとして用いられているということが示されていると思われる。すなわち、現にそこに認められる運動のうちには、現在そこにあるもの「より後」の状態が含まれているとベルクソンは考えていると思われる。そしてその「より後」をわたしたちに知らしめるものが「優美」をわたしたちに感じさせるということ、わたしたちに伝えていると思われる。ベルクソンは「優美」について語りながらわたしたちが未来を予測する仕方を示そうとしている。

### 3-5 未来

ベルクソンは次のように続けている。

「したがって (donc)、運動することの容易さの知覚は、ここでは、いわば時間の歩みを引き留めて現在のうちに未来を保持することの喜び (plaisir) と一体をなしているのだ (DI, 9)。

ここにおいて「運動する事の容易さの知覚」に過ぎなかった「優美」が含む「喜び」の内容が明らかにされている。その「喜び」とは「時間の歩みを引き留めて現在のうちに未来を保持する」ということである。ここで「知覚」と「喜び」が一体になる様が描かれる。そして喜びという情動を、現在と未来という時間様相を用いて説明していることから、ベルクソンは「時間」の様相がわたしたちの「喜び」の様相と同等の次元にあるものとして示していると考えられる。ここで「喜び」についてベルクソンが述べていることは、先に引用した箇所における「心地よさ」を引き継ぐ目的もあるものと思われる。「より後」を含むということは単に「予見」「予告」「指示」を可能にするというだけではなく、わたしたちに「喜び」をこそもたらすものであるとベルクソンは述べている。そしてその「喜び」は「時間」と関連づけられるものであるとして述べている。ベルクソンが述べるのは「現在」のうちに (dans) 「未来」があるのであって、その逆ではない、ということである。これは「来るべき態度」を「あらかじめ形成する現在の態度」を述べていたときと同様であるが、「未来」「現在」という語が用いられていることから、この「喜び」に一般的な性格を認めているものと思われる。

### 3-6 主体の交替

ベルクソンは「容易さ」「心地よさ」の「知覚」である「優美」のうちに「現在のうちに未来を保持することの快樂」を認めることができると指摘した後で、「優美な運動」について次のように述べる。ベルクソンは「優美」には「共感」がそれも「身体的・物理的な」共感が伴うと言う。

「優美な運動があるリズムに従い、音楽を伴っているような場合には、第三の要素が介入してくる。すなわち、リズムと拍子のおかげでダンサーの運動がよりよく予見されるために、今度はわたしたち自身がその運動の主であるような気がしてくる」 (DI, 9)。

リズムと拍子は、対象がどのように動くか、その運動を予見しやすくするが、その予見しやすさのために、わたしたちはその運動を「知覚」する主体から、わたしたち自身がその「『知覚』対象」となる運動を運動する主体になるように思われてくる、という。運動の知覚は、その運動が優美であれば、わたしたちに、知覚する主体であるとみなすことから運動する主体であるとみなすことに移行させる効果を持つとベルクソンは述べていると思われる。「よりよく予見される」ということがどういうことなのか、ベルクソンは次のように続け「よりよく予見される」ということの中身を述べている。

「ダンサーがとろうとしている姿勢がほとんど見抜けてしまうので、彼が実際にその姿勢をとるときには、彼のほうがわたしたちに従っているように見えるのだ。リズムの規則性は彼とわたしたちのあいだにある種の交流関係をうち立て、拍子の周期的回帰はというと、その各々が、わたしたちによって操られる架空の人形の一本の見えない糸のごときものなのだ」 (Ibid.)。

ベルクソンは「よりよく予見される」ということの中身とは、対象となるダンサーの後続する姿勢がほとんど見抜けてしまうことだと述べている。対象の現在の姿から未来の姿が予想できるとき、その対象が実際に、未来に、予想できた姿へと移行したときには、わたしたちが過去に予想した姿にその対象が従ったように見える。ここでは、わたしたちは運動する対象を知覚する間に、対象の現在の姿のうちに未来の姿がある状態から現在の姿のうちに過去の姿がある

状態へと移行することがあり、その移行は、わたしたちが知覚している対象が、わたしたちの知覚に従ったように見えるという仕方であらわれと述べられている。このような捉え方は、わたしたちにあたかもある運動の知覚を介して対象の運動の主体が、「彼」から「わたしたち」に交替して運動するものを操っているかのように思わせるものになっている。そして、あたかも運動の主体すら交替したかのように思わせるこのような運動の知覚における時間感覚の移行を助けるのは、リズムの「規則性」と拍子の「周期的回帰」である、と言う。運動する主体とその運動を知覚する主体が聴覚の対象となるリズムや拍子を共有するということが、わたしたちに、ここで主体の交替が行なわれているかのように容易に思わせる導きになっていることが述べられている。しかし実際に行なわれているのは、主体が操る運動がリズムの規則性と拍子の周期的回帰と一致するということであり、知覚する主体もそのリズムと拍子に従っているに過ぎない。従って、その現象が主体が交替しているようにわたしたちに思わせるということが示すのは、運動の知覚のうちに生じている時間感覚の変化であるということを示していると思われる。

### 3-7 知覚の創造と未来の在処

ベルクソンは続けて次のように述べている。

「それどころか、不意にその人形が止まってしまおうものなら、わたしたちの手はこらえきれなくなって動きだし、その人形を押して、この運動の只中にそれを置き戻そうとせずにはおれず、そうなる、かかる運動のリズムがわたしたちの思考と意志のすべてであることになる」 (DI, 9-10)。

対象の運動が不意に停止すると、今度はわたしたち自身がその運動を継続しようとするということがある。先の引用とは異なり、運動する対象がここではダンサーから人形だと想像されたものになっている。人形は主体的にある運動をおこなうものではないので、ここでは運動する主体が問題になっているとは考えられない。ここではもはや、取り上げる運動が匿名的な運動になり、しかも実際に実現された運動のことは述べられていない。現在止まっている人形は、その置かれている現在のうちにもはや未来を内包していない。しかも、止まってしまった現在のうちに実現されたときにしか過去を内包していない。停止という状態が続く限りそこには、わたしたちが把握できるような未来も過去もない。別の言い方をすれば、そこでは過去・現在・

未来の姿が区別されない。ただ、運動の知覚が、リズムという規則性や拍子という周期的回帰を伴う知覚であるために、対象の運動変化が失われてしまったからといって、そこで時間変化を把握するはたらきが完全に失われてしまうということはない。知覚がそういった性格を持つという証拠となるのは、リズムや拍子がわたしたちを導き、わたしたちは運動を続けようとするということである。すなわち、人形の糸がもはや切断されて人形が動けなくなった時、つまり、わたしたちが糸という再帰的回帰を可能にする拍子を無くしても、規則性というリズムに一致することが出来る限りで、わたしたちは人形の運動を回復しようとする。わたしたちが回復するための手掛かりにするのは、わたしたちが把握する規則性だけであり、それのみに頼って対象を再構成しようとする限りで、その回復しようとする規則性がわたしたちの意志と思考の在処であることになる。つまり、ここでわたしたちが再構成するのは、現在のうちに未来を含み、現在のうちの過去となる運動の知覚におけるわたしたちの時間把握の変遷をも含む運動でもあるだろう。ここでは、未来を知る・予測するための手掛かりは規則性であり、それを把握する思考と意志においてであると言えるだろう。

### 3-8 「共感」<sup>4</sup>

わたしたちは主に聴覚を頼りに規則性を把握し、それを頼りに、たとえ対象から知覚できる当の運動が消えてもその運動を再構成しようとする。ここで生じる感情は、わたしたちを導く規則性を媒介にした身体・物理的な共感によって生じていると言えるだろう。ベルクソンは次のように続けている。

「このように、優美の感情にはある種の身体的な共感が関与している。この共感の魅力を分析してみれば分かることだが、わたしたちがこの共感を好むのは、それが精神的共感と類似しており、わたしたちに対して精神的共感の観念を巧みに暗示してくれるからである」(DI, 10)。

わたしたちがこの共感を好むのは、精神的な共感と類似しているものであり、精神的共感の観念をわたしたちに暗示してくれるものであるからだ、ベルクソンは続けている。ベルクソンが述べる「精神的共感」の中身には立ち入らず、ここではそれとの類似性が身体的共感にはあるとベルクソンが述べていることを確認するにとどめる。ここで重要だと思われるのは、ベルクソンが次のように述べて「優美」の本質が「共感」ということにあると述べていることであ

る。ベルクソンは次のように述べている。

「共感というこの最後の要素——他の諸要素もこの最後の要素をいわば告げ知らせた後には、それと一体になってしまう——によって、優美の抗し難い魅力が説明される。スペンサーが主張したように、もし優美を努力の節約などに還元してしまうならば、優美がわたしたちのうちに惹起する喜び (plaisir) は理解できなくなってしまう」 (Ibid.)。

ベルクソンはまず、「優美」の魅力が「共感」という要素にこそあることを述べる。そして、わたしたちが「優美」について説明するのであれば、その魅力を捉えるわたしたちがもつ喜び (plaisir) について説明しなければならず、また、それはスペンサーが説明したような方法では説明することができないもので、「共感」について述べて初めてその説明に成功することが述べられている。そして、スペンサーが「優美」について説明したその仕方というのは、「優美」を「努力の節約」に還元するという仕方であるとベルクソンが考えていることが示されている。「共感」が「優美」の説明にとって重要であることが、次のように続けて述べられている。

「しかしながら、本当のところは、きわめて優美なものなら、どんなもののなかにも、動性の徴しである軽快さに加えて、わたしたちに対する可能的な運動——潜在的な共感、それどころか現に生まれつつある共感——への指示を見分けることができるとわたしたちは思う。この動的共感はずねに今にも与えられる寸前の状態にあるのだが、それこそがより高度な優美の本質なのである」 (Ibid.)。

「可能的な運動」「潜在的な共感」「現に生まれつつある共感」と表現されているものは、対象の現在の姿に「可能的」と「現実的」、「現勢的」と「潜在的」、「生まれた」と「生まれつつある」といった対比を可能にするものであり、現在の姿にそれのみでの完結を許さないものである。そしてそれは「動的共感」と表現されるものであって、そこには運動の停止を否定する表現が見られる。そしてその「動的共感」という「優美」の本質が、与えられたもののうちではなく「今にも与えられる寸前の状態」のうちにあると述べられており、現在における未来のうちに、しかも現在における実現された未来としての過去のうちには決して含まれないものであることが示されている。すなわち、「優美」の本質は決して現在化することのない未来のうちにしかないものであり、わたしたちはより高度な「優美」を感じ得るが、それは決して実現し



ない未来が到来しつつあることのしるしであることを、ベルクソンは述べているものと思われる。

ベルクソンは次のように続けて述べて、ここで「美的な感情」について触れた理由を確認している。

「こうして、美的な感情の増大する強度も、ここではその強度と同じだけの様々な感情に還元される。この感情の各々は、それに先立つ感情によってすでに告知されていたもので、やがてこの先行的感情のうちで顕著になり、ついでこれを決定的に凌駕してしまう。この質的な進展を、わたしたちは大きさの変化の意味に解釈してしまう。なぜなら、わたしたちは単純な事物 (*les choses simples*) を好んでいるし、わたしたちの言語は心理学的分析の機微を言い表すには不都合だからである」 (*Ibid.*)。

質的な進展と大きさの変化を区別しなければならないことをベルクソンは述べるために美的感情を考察したということは既に見た。先立つ感情によって告知されていた感情の各々が、先行的感情の中で顕著になり、次いで、これを凌駕してしまう。これが「質的な進展」の中身であると述べられている。

### 3-9 『直接与件』における「優美」についてのまとめ

ベルクソンがスペンサーに触れながら「優美」について述べている箇所を、文章を少しずつ区切って考察してきた。ここで明らかになったことを、幾分繰り返しになるが、整理しておきたい。

- ・ わたしたちはまず、ベルクソンが「優美」を扱う理由を確認した。ベルクソンは区別すべき「質」と「量」とを混同して用いている場合があることを分かりやすくわたしたちに伝えるためには、わたしたちが持つ「優美」についての感情を考察することが最も適切だと考えている。
- ・ 「優美」とは何かを考えるにはその感情の発生と生成の仕方について考える事が適切であると見做されている。
- ・ 「優美」の「知覚」は程度を容れる知覚であると一般にみなされている。
- ・ また、現にそこに認められる対象の運動のうちには、現在そこにあるもの「より後」の状態が含まれており、そしてその「より後」をわたしたちに知らしめるものが「優美」をわ

たしたちに感じさせるということをわたしたちに伝えている。

- ・ 「優美」における「喜び」についてベルクソンが述べていることは、先に引用した箇所における「心地よさ」を引き継ぐ目的もあるものと思われる。
- ・ 「より後」を含むということは単に「予見」「予告」「指示」を可能にするというだけではなく、わたしたちに「喜び」をこそもたらすものであるとベルクソンは述べている。
- ・ そして、運動の知覚は、その運動が優美であれば、わたしたちにわたしたち自身が知覚する主体であることから運動する主体であることに移行させる効果を持つとベルクソンは述べている。
- ・ わたしたちは運動する対象を知覚する間に、対象の現在の姿のうちに未来の姿がある状態から現在の姿のうちに過去の姿がある状態へと移行することがあり、その移行は、わたしたちにわたしたちが知覚している対象が、わたしたちの知覚に従ったように見えるという仕方、すなわち主体が交替したと思われる仕方でわたしたちに捉えられる。
- ・ しかし実際に行なわれているのは、運動する主体が一致するのがリズムの規則性と拍子の周期的回帰であり、知覚する主体もそのリズムと拍子に一致しているに過ぎない。従って、主体が交替しているようにわたしたちに思わせるということが示すのは、運動の知覚のうちに生じている時間感覚の変化であるということを示している。
- ・ ここでわたしたちが再構成するのは、現在のうちに未来を含み、現在のうちの過去となる運動の知覚におけるわたしたちの時間把握の変遷をも含む運動でもあるだろう。ここでは、未来の在処は規則性であり、それを把握する思考と意志である。
- ・ わたしたちは「より高度な」「優美」を感じ得る。それは、決して実現はしないが常に到来しつつある未来があるかのように感じられていることのしるしである。

#### 4 スペンサーにおける「優美」 (gracefulness) について

ベルクソンが『直接与件』において述べているのは、スペンサーが以下の箇所で述べる「優美」 (gracefulness) のことである<sup>5</sup>。

「確認のためにさまざまな事実を思い浮かべてみた後で、わたしは間もなく次のように結論した、優美というのは、運動に関しては、力を節約しながら遂行される運動について言われる (I presently concluded that grace, as applied to motion, describes motion that is effected with economy of force) し、動物的諸形態に適用されると、この節約をする能力のある形態

を表す。優美が、姿勢に適用されると、この節約が維持され得る姿勢を表す。そして、生命の無い対象に適用されると、優美さはこれらの態度と形態にある程度類似する提示として表す。この一般化は、全ての真理とっては言い過ぎだが、少なくともその大部分を含むということは、思うに、どのようにわたしたちが容易さ (*easy*) と優美 (*graceful*) という言葉を習慣的に結びつけるかについて考えるに従って、そして更に、精神にこの連想が基づいている諸事実の幾つかを呼び起こすに従って、明らかになるだろう」<sup>6</sup>。

#### 4-1 「努力」の節約ではなく「力」の節約としての「優美」

先に引用した箇所 a)で、ベルクソンは、スペンサーが優美を努力の節約に還元されると考えていると書いている。ベルクソンが引用注で触れている箇所を手掛かりに該当箇所を「節約」という言葉に注目して探すと、上記の箇所がそれにあたると思われる。ただし、この箇所では、「優美」はそれが運動に適用されると「力 (*force*) の節約」として表れると言われているのだが、「努力」 (*effort*) の語は見当たらない。「努力」と「力」の間には関係がありそうだが、ベルクソンが「努力」という言葉で述べようとしたことは、「力」とは全く別だと考えることもできる。ここでは、実際は「力」という語が用いられているけれども、それが「節約」されるということが述べられていることは間違いないので、ここでスペンサーが「節約」という言葉を用いて述べようとしていることが何であるか考察することにしたい。

スペンサーは、「優美」と「節約」の関係についてここでいくつかのことを述べている。スペンサーによれば「優美」は「運動」「かたち」「姿勢」「無生物」で見られる。「優美」はなによりも「力の節約」であり、この「節約」がそれぞれの仕方で「かたち」「姿勢」「無生物」で表されると言われる。ここでスペンサーが続けて述べているのは、私たちは「優美」と「容易さ」とを習慣的に結びつけて使っているということである。

わたしたちが本章の3で考察してきたベルクソンの「優美」についての考察のなかでも、「容易さ」が「優美」と関係をもつものとして書かれていたことが思い出されるだろう。

スペンサーは、「容易さ」と「力の節約」との間に関係があると考えていると思われる。スペンサーは「優美」と「力の節約」について、次のように述べている。

「優美と力の節約の関係は、スケートをする人々によって最もはっきり認められるだろう。彼らは、すべての初期の試みや、特にフィギアスケートの最初のおどおどした試みは、ぎこちないのと同様疲れさせるものであることを思い出すだろう。また、技術の獲得は、容易さ

の獲得でもあることを思い出すだろう。必要な自信、そして習得された、両足のしかるべき制御、それらの胴体のねじれと両腕の回転は、かつてはバランスを維持するために使われ、不要だと分かる。身体はコントロールせずにそれに与えられた衝動に付き従う。両腕はそれらが望むところに揺れる。また、何らかの回転をあらゆる優雅なやり方は、最小限の努力を消費するやり方であることがはっきりと感じられる (it is clearly felt that the graceful way of performing any evolution is the way that costs least effort)。観客はその同じ事実を、彼らがそれを探すならば、見落とすことはほとんどあり得ない<sup>7</sup>。

スペンサーは私たちが「優美」について考えるための手だてとして「スケート」をする人々を対象として用いている。ここで私たちはベルクソンが考察の対象としていたのがダンサーであったことを思い出すことができるだろう。スペンサーとベルクソン両者が用いた思考の道具立てに因果関係が認められるか否かはさておき、ここでスペンサーが述べていることを考察しよう。スペンサーによれば、「優美」と「力の節約」の関係が最も顕著に認められるのは、スケートをする人々においてである、という。先ほど触れられていた「容易さ」とは「技術の獲得」によってもたらされるものであることが、新たに述べられている。

「優美なやり方」は「努力を消費しないやり方」と言われていることが確認できる。すなわち、「力」としか述べられなかった事柄が、ここでは「努力」(effort)という言葉で表現されていることが認められる。すなわち、ベルクソンが「努力の節約」と述べていたことがら、ベルクソンの思い違いや引用の間違いであったという考えが否定されることになる。また、スケート運動する主体と、その運動を知覚する主体が、「優美」を示す運動という同一の事実を共有することができることが、述べられている。ここにはベルクソンが述べていた「共感」ということの示唆が認められるのではないかと思われる。その予兆を認めつつ、スペンサーが続けて述べることを考察しよう。

#### 4-2 曲線運動について

スペンサーは次のように述べている。

「スケートへの言及が示唆していることは、優美な運動は、曲線運動として定義されるかもしれないということだ (graceful motion might be defined as motion in curved lines)。確かに、直線の及びZ字型の運動は「優美」という概念から除外されている。ぎこちない運動を

含む突然の停止 (sudden stoppages) はその反対のものである。優美の主な特徴は連続性、流動性である。しかしながら、これは同一の真理の単なる別の側面であるということが理解されるだろう。また、曲線運動は経済的な・節約する運動である (that motion in curved lines is economical motion) ことが理解されるだろう。手足によって引き受けられるある一連の連続した位置が与えられ、その時、直線において、これらの位置の第一のものへ動かされ、急に止まり、それから別の直線方向に、第二の位置に動き、それが続いたなら、各々の停止で、手足に前もって与えられたはずみ・運動量 (momentum) は、力の一定量の消費で破壊されなければならないし、それに与えられる新しいはずみ・運動量は、力の更なる消費で破壊されねばならない。だが一方で、もし、その最初の位置で手足が止まる代わりに、その運動が継続するのを促されるならば、それを二番目の位置に対して分岐させるように後続する力が印付けられるのならば、曲線を描く運動が必然的に結果する。また、もともとははずみ・運動量を利用することによって、力は節約される (if, instead of arresting the limb at its first position, its motion be allowed to continue, and a lateral force be impressed to make it diverge towards the second position, a curvilinear motion is the necessary result; and by making use of the original momentum, force is economized) 」<sup>8</sup>。

ベルクソンが「優美」について考察する過程で述べていたことを知っているわたしたちは、このペンサーの叙述に用いられている思考の道具が、ベルクソンと多くの共通点をもつことにすぐさま気づくだろう。もちろん、時間的順序から言うならば、ベルクソンの著作の中には、スペンサーが述べている同じ主題を論じるのに、スペンサーが著作中で用いた道具をそのまま思考の道具として用いている痕跡が見出される、ということになるだろう。

スペンサーは、優美な運動が曲線運動として定義されることを述べている。優美な運動はぎこちない運動や停止と対極にある運動である。この二点に関して、わたしたちはベルクソンが曲線運動について述べていたこと、操り人形の停止について述べることでわたしたちが運動を継続したがる傾向があることを述べていたことを想起することができるだろう。ベルクソンは述べていなかったが、スペンサーがはっきり述べていることは、優美の特徴が連続性と流動性にあるということである。ベルクソンの場合では、優美の本質は共感であると述べるであろう。スペンサーにオリジナルな思想が見出されるのは、曲線運動の定義に関する考えであろう。というのは、スペンサーは曲線運動とは、経済的な・節約する運動である、と述べているからである。これはベルクソンがスペンサーへの主たる批判としている「節約」についての

中身を明らかにするものであるだろう。曲線運動は、節約する運動である、とされる。曲線運動とは、「もしも、第一の位置で手足が止まる代わりに、その運動が継続するのを促され、それを第二の位置に対して分岐させるように後続する力が印付けられるのならば、必然的に結果する運動のことである (if, instead of arresting the limb at its first position, its motion be allowed to continue, and a lateral force be impressed to make it diverge towards the second position, a curvilinear motion is the necessary result) 」とされる。この曲線運動においてなぜ力が節約されると言われるのかと言えば、「もともとのはずみ・運動量を利用する」ということが生じているからである、とされる。

「容易さ」について言えば、ベルクソンとスペンサーの間には違いが認められる。というのは、ベルクソンが「容易さ」を「予見」及び「先行することがらによって新しいことがらが準備されていること」として考えるのに対して、スペンサーは「容易さ」を「力の節約」として考えるということである。ただし、力の節約がなぜ生じるのかという点では、スペンサーはベルクソンと類似した考えを持っているように思われる。それは、先立つものが後続のものを準備するということである。つまり、それが「先行することがらによって準備されていること」として述べるか、「力の節約」として述べるかの違いはあっても、「力の節約」が先立つものが後続のものを準備すると考えられているとすれば、そこには言葉の違いを超えて同一の内容が認められることになるだろう。しかし、ベルクソンが述べなければならないと考えた「喜び」と「努力の節約」との関係を明らかにするまでは、ベルクソンがスペンサーの考えを読み違えていたと結論づけることは当然できないことである。そこで、わたしたちは「力の節約」ということでスペンサーが主張しようとする中身をもう少し考察することにする。

#### 4-3 スペンサーの「力の節約」について

力の節約が優美であるなら、力を最大限に節約した場合であると考えられる静止した状態は最も優美であると言えるのだろうか。そうは言えないだろうとすぐさまわたしたちは推測する。というのは、優美が、実現された運動において現れるのであるとすれば少なくともある運動は実現されていなければならないからである。スペンサーが述べるのはある動きを実現するのに力を使わなければ使わないほどその動きは優美さをもつということであると思われる。

わたしたちが日常生活においてよくやるような「節約」という行為とスペンサーがここで述べている *economy* との間には違いがあるということが理解される。わたしたちの「節約」は単にできるだけ使わないということではないが（というのは、各自によって必要最低限の「必

要」が異なると考えられるため)、スペンサーがここで用いている力の *economy* は、力を適切に使うという意味を含んでいるはずである。スペンサーの用いる *economy* という語はそのかたちや態度が力を節約した結果であるということと、それが実現されるまえにはそれに優美さを与える何らかの形式が与えられているということを二重に示唆するものとなっている。「容易さ」や「流動性」が実現されているのは、それを「容易」であり「流動」的であるとするものがあるからだとされている<sup>9</sup>。

スペンサーの「力の *economy*」には、適切な(量の)力が発揮されていることという意味が含意されている。そしてこの適切さとは環境における均衡を示してもいるだろう。

#### 4.4 スペンサーにおける「優美」と「共感」(sympathy)——まとめの考察

ベルクソンはスペンサーがそれを考える上で重要な概念であるはずの「共感」を全く念頭に置きもせず述べていたように見える。ところが、単に「共感」という概念についてだけ言えば、実際には、スペンサーは「優美」について説明するのに「共感」という概念を扱っているのである。スペンサーは「優美」に関連する「共感」について次のように述べている。

「わたしはここで仮説を提示しようと思う。他のものによって提示される「優美」の観念は「共感」のうちにその主体的基礎を持つ (the idea of Grace as displayed by the other beings, has its subjective basis in Sympathy) ということだ。危険な場合に別のものを見てわたしたちを身震いさせ、別のものがきや落下を見てわたしたち自身の肢体の動きを時々引き起こす同一の機能は、わたしたちの周囲にいる人たちの全ての筋肉感覚が経験していることへの漠然とした関与をわたしたちに与える。それらの動きが暴力的でぎこちない時、わたしたちは、わずかに、それらがわたしたち自身だった場合にわたしたちが持つであろう、不愉快な感じを感じる。それらが容易な時には、それらがそれらを見せている中に含んでいる喜びの感じと共感する (When they are easy, we sympathize with the pleasant sensations they imply in those exhibiting them) 」<sup>10</sup>。

スペンサーがここで用いている「共感」は、筋肉感覚によってもたらされる「共感」であり、容易な運動としての優美がわたしたちに筋肉感覚としての容易さを知らしめるものであるために、「喜びの感じ」がわたしたちにもたらされるとスペンサーは述べている。つまり、ここにわたしたちの間で共有されている「共感」の中身は、「筋肉感覚」を媒介とした「容易さ」の感覚

を通した共感である、ということになるだろう。スペンサーによれば、「容易に」できると「喜び」があり、その「喜び」の感じを筋肉も覚えており、「喜び」を眼にした時その筋肉の「感じ」が蘇り、その感じによってわたしたちは眼にした「喜び」に共感するのだという。ベルクソンが指摘するように、スペンサーにとって「優美」はすなわち「容易さ」でありそれも「喜びの感じ」ともなう「筋肉感覚」としての容易さであると言えると思われる。つまり、ベルクソンは、スペンサーが「優美」に認めているのは、「筋肉感覚」の「容易さ」と「容易」であることの「喜びの感じ」であって、わたしたちが対象に「共感」することがあるとしてもそれは「筋肉感覚」への共感であると主張していることを批判していた可能性がある、ということを示すことができたと思われる。「優美」が「努力の節約」に還元されるということが述べていたことの内実が今明らかになった。

## 5 本章のまとめの考察

スペンサーが主張したように、優美を容易さとしたのはよいがその容易さを努力の節約などに還元してしまうならば、優美がわたしたちのうちに惹起する喜び、すなわち現在を引き留めて未来を保持することの喜びが理解できなくなってしまう。従って、対象に見て取られる性質には、「未来の予告」も含めるべきだ、とベルクソンは主張していることになるだろう。

「容易さ」とは何が「容易」であったのかについての理解が異なるが故に、すなわちスペンサーが「努力」の容易さについて述べているのに対して、ベルクソンが後続する運動を予見することの容易さについて考えたというように異なるが故に、それぞれが考える「共感」も異なっていることになる。ただし、異なっているとしても「共感」を軸に両者は議論を組み立てている。すなわち、スペンサーが「共感」を軸に優美な運動について考察していたのと同じように、ベルクソンは「共感」を軸に優美な運動について考察している。このベルクソンの議論の進め方をみると、そこには、「曲線」「容易さ」そして「共感」というスペンサーが用いた概念が用いられているのが明らかであり、「共感」を軸にそれらについて考察していることもまた明らかである。これらの共通する概念の多さと構成の仕方をみると、ここにはスペンサーの考察の進め方からの影響が見て取れると考えられる。ただし、ベルクソンの思想に明らかに見て取れることは、ベルクソンが「優美」を時間の変化を捉える諸概念を用いて考察しているということである。これはスペンサーが考える「優美」についての考察とは決定的に異なるベルクソンに独自の考察の進め方であり、「時間」について考察する必要を感じたと後にベルクソンが『思想と動くもの』で述べることを想起させることでもあるだろう。



<sup>1</sup> 『直接与件』が公刊されたのは1889年であるが、公刊されたときには既にこれらの思索はなされていたものと考え、「1888年頃」とした。

<sup>2</sup> « on ne comprendrait pas le plaisir qu'elle[ : grâce] nous cause, si elle se réduisait à une économie d'effort, comme le prétend Spencer. » (DI, 10)

<sup>3</sup> « Une frayeur intense, dit Herbert Spencer, s'exprime par des cris, des efforts pour se cacher ou s'échapper, des palpitations et du tremblement. » Nous allons plus loin, et nous soutenons que ces mouvements font partie de la frayeur même: » (DI, 22)

<sup>4</sup> 「共感」概念を軸にしてベルクソン哲学を読み解くことはスペンサーの思想との関係を明らかにするのは別に可能ではあるだろう。そして、その場合であっても、ベルクソン哲学研究にとって意義のあるものになるはずである。ベルクソンは「共感」を次のように『直接与件』に引き続く諸著作で述べている。『進化』で述べられる「共感」については本研究で章を割いて扱う。以下には『進化』以外の諸著作でベルクソンが「共感」という概念を使って述べている事柄についてあげる。

「一方、常に物に感じやすく、生の合唱に調子があっており、あらゆる事件が感情的な共鳴(résonance)を伴うようになっている心の人々は、笑いを知ることもなければ、理解することもないであろう。試みに、ほんのひととき、人のいうことなすことに全く心を使うようにし、想像のうちで、行為している人々と一緒になって行為し、感じている人々と一緒になって感じてみたまえ、つまり諸君の共感(sympathie)にその最も広い広がり(épanouissement: 開花、晴れやかになること、成熟)を与えてみたまえ」(R, 4)。

「道徳上の偉人、とくに創意的で純粋な英雄的行為によって徳へ達する新しい道を切り開いた人々は、形而上学的真理の啓示者であります。彼らは進化の頂点に立っている人々ではありませんが、またかえって生命の起源のごく近くにいる人々であり、根底からくる衝動をわたしたちに見えやすくする人々でもあります。私たちが直観の働きによって、生命の原理そのものにはまではいりこもうとするのであるならば、これらの人々を注意深く注視して、彼らが感ずるものを共感するように努めましょう。もっとも、深い底にある神秘的なものにはいりこむためには、ときには頂上を見なければなりません。地球の中心にある火は、火山の頂上にだけしか現れないのであります。」「意識と生命」(ES, 25)。

「このことから、絶対は直観においてでしか与えられないということができるが、反対に絶対でないところの他のものは、ことごとく分析の範囲へ入ってくる。直観とは、対象そのものにおいて独自のであり、したがって言葉をもって表現しえないものと合一するために、対象の内部へ自己を移そうとするための共感を意味している。それと反対に分析とは、対象を既知の要素。言い換えると他の諸々の対象とも共通な要素へ還元する操作である」「形而上学入門」(PM, 181)。

「単なる分析によるのではなくて、内部から直観によってわたしたちのすべてがとらえる実在が少なくとも一つは存在する。それは時間のうちを流れているわたしたち自身の人格であり。持続しているわたしたちの自我である。わたしたちは他の何ものとも知的に、あるいはむしろ精神的に共感し得ないとしても、わたしたち自身の自我とは確かに共感する」「形而上学入門」(PM, 182)。

「この事情が最もよく見てとれるのは、何と言っても、情動の迫るその要求がその生の働きを一時停止して、この要求について反省し、わたしたちの経験を分析する余裕が残される場合である。それはたとえば、音楽的情緒の場合に見られよう。ある音楽に聴き入っている最中は、その音楽がわれわれにこうせよと告げる以外のことは欲し得ないかの心地がする。またかりにじっと聴き入っているのではないとしたら、まさにその音楽の指示通りに行動するのが自然で、どうしてもそうせずにはいられぬかの心地がする。その音楽が表現しているのが喜びであれ悲しみであれまた哀れさであれ共感であれ、毎瞬間、わたしたちはそれが表わしているものになりきっている」(DS, 36-37)。

<sup>5</sup> ベルクソンはスペンサーの著作の該当箇所を注で指摘している(DI, 10)。しかし、スペンサーの著作から具体的に文章を引用した上で該当箇所について考察してはいない。フランス語訳された版の頁数を記しているだけである。

---

<sup>6</sup> « After calling to mind sundry confirmatory facts, I presently concluded that grace, as applied to motion, describes motion that is effected with economy of force, grace, as applied to animal forms, describes forms capable of this economy ; grace, as applied to postures, describes postures which may be maintained with this economy; and grace, as applied to inanimate objects, describes such as exhibit certain analogies to these attitudes and forms. That this generalization, if not the whole truth, contains at least a large part of it, will, I think, become obvious, on considering how habitually we couple the words easy and graceful; and still more, on calling to mind some of the facts on which this association is based » (E, 381-382).

<sup>7</sup> « The connexion between gracefulness and economy of force, will be most clearly recognized by those who skate. They will remember that all early attempts, and especially the first timid experiments in figure-skating, are alike awkward and fatiguing; and that the acquirement of skill is also the acquirement of ease. The requisite confidence, and a due command of the feet having been obtained, those twistings of trunk and gyrations of the arms, previously used to maintain the balance, and found needless. The body is allowed to follow without control the impulse given to it; the arms to swing where they will; and it is clearly felt that the graceful way of performing any evolution is the way that costs least effort. Spectators can scarcely fail to see the same fact, if they look for it » (E, 384) .

<sup>8</sup> « The reference to skating suggests that graceful motion might be defined as motion in curved lines. Certainly, straight and zig-zag movements are excluded from the conception. The sudden stoppages which angular movements imply, are its antithesis; for a leading trait of grace is continuity, flowingness. It will be found, however, that this is merely another aspect of the same truth; and that motion in curved lines is economical motion. Given certain successive positions to be assumed by a limb, then if it be moved in a straight line to the first of these positions, suddenly arrested, and then moved in another direction straight to the second position, and so on, it is clear that at each arrest, the momentum previously given to the limb must be destroyed at a certain cost of force; and a new momentum given to it at a further cost of force; whereas, if, instead of arresting the limb at its first position, its motion be allowed to continue, and a lateral force be impressed to make it diverge towards the second position, a curvilinear motion is the necessary result; and by making use of the original momentum, force is economized » (E, 384-385).

<sup>9</sup> スペンサーの論点先取的な議論は『進化』のなかでベルクソンが指摘するところである。

<sup>10</sup> « I may as well here venture the hypothesis, that the idea of Grace as displayed by the other beings, has its subjective basis in Sympathy. The same faculty which makes us shudder on seeing another in danger – which sometimes causes motions of our own limbs on seeing another struggle or fall, gives us a vague participation in all the muscular sensations which those around us are experiencing. When their motions are violent or awkward, we feel in a slight degree the disagreeable sensations which we should have were they our own. When they are easy, we sympathize with the pleasant sensations they imply in those exhibiting them » (E, 385).

## 第五章 1888年頃のベルクソンによるスペンサー心理学批判について

### (2)

#### ——「恐怖」(frayeur)

##### 本章の検討課題

本章では、前章に引き続き1889年に出版された『直接与件』のなかで、ベルクソンがハーバート・スペンサーの思想を批判している文章を取り上げる。

前章では、『直接与件』のなかに二つある箇所のうち「優美」(grâce)が扱われている箇所を取り上げ、考察した。前章で明らかになったのは、以下のことである。ベルクソン哲学に対してスペンサーは次のような影響を与えている可能性がある。すなわち、「共感」という概念を軸にして「優美」とは何かを考察するということである。可能性がある、ということにとどめるのは、当時、一般的に、優美さは共感と関係付けられており、そしてスペンサーもベルクソンもその歴史的状況のなかにいた可能性もあることは認めざるを得ないからである<sup>1</sup>。わたしたちがこれまでの確認したことは次の事柄である。ベルクソンは講義録の美学講義のなかで、スペンサーをひきつつ、「優美」とは「運動の美」であることを、述べていた<sup>2</sup>。ベルクソンはスペンサーが優美を容易さであるとしたのは良いと考えていると思われるが、その容易さをスペンサーがしたように努力の節約などに還元してしまうならば、優美が私たちのうちに惹起する喜び、すなわち現在を引き留めて未来を保持することの喜びが理解できなくなってしまうと見做していると思われることについては明示することができた。だからこそ、対象に見て取られる性質には、「未来の予告」も含めるべきだ、とベルクソンは主張していると思われた。また、スペンサーとベルクソンの「容易さ」についての考えが、「共感」という概念を用いる呼び水になっていることもまた、確認することができた。

『直接与件』でベルクソンが「恐怖」(frayeur)の感情について考察している箇所を扱う本章の課題は次のようなものである。前章に引き続き、本章でも、ベルクソンがスペンサーに言及して述べている「恐怖」についての考察と、ベルクソンが参照にしている箇所で実際にスペンサーが述べていることがどのような関係を結ぶかについて明らかにする。問いとしては、スペンサーが「恐怖」について考察する仕方と、ベルクソンが「恐怖」について述べる仕方にはどのような違いがあるか、ということになるだろう。この問いに答えるかたちで、わたしたちはベルクソンの思索とスペンサーの思索の関連について明らかにすることになる。また、ベルクソンがスペンサーの「恐怖」に言及するなかで述べていることの意図を探ることも本章の課題

である。その意図を探ることで、ベルクソンが『直接与件』の以降の作品の中で最もスペンサーに頻繁に言及している『進化』に引き継がれていくベルクソンに固有の思索を示唆することになるだろう。

## 1 『直接与件』における「恐怖」

ベルクソンが『直接与件』のなかで「恐怖」について語る材料の一つとしてスペンサーに触れているのは、以下の箇所である。

b) 「ハーバート・スペンサーは言う、「強い恐怖は、叫び声や、隠れたり逃げたりするための努力や、動悸や震えなどによってあらわれる」と。わたしたちはさらに進んで、これらの運動は恐怖自体の部分をなすものであると主張しよう。それらの運動によって、恐怖は強さの様々な段階を通過しうる一つの情動になる」 (DI, 22)<sup>3</sup>。

この文章が示していることをはっきりと知るためには、私たちはこの文章の前後をよく読まなければならない。特に、「わたしたちはさらに進んで、これらの運動は恐怖自体の部分をなすものであると主張しよう」 (Nous allons plus loin, et nous soutenons que ces mouvements font partie de la frayeur même) が意図するところを明らかにしなければならない。そこで、私たちはまず、この文章が位置づけられている、『直接与件』第一章の中の「激しい情動」 (les émotions violentes) が取り上げられる文脈のなかで、ベルクソンがこのように述べて、結局スペンサーに同意しているのかあるいは反対しているのかをまず、明らかにする。そうした上で、ベルクソンが取り上げているスペンサーの著作のなかの具体的な文章を扱う。そうすることで、ベルクソンが具体的に、どういった意味で「わたしたちはさらに進む」と述べ、そのことで何を謂わんとしているのかを明らかにすることにする。

この文章の『直接与件』のなかでの位置づけを知るためにわたしたちが立てるべき問いは、「なぜベルクソンは恐怖について扱うのか」という問いであろう。しかし、この問いに答えるためにはまず、わたしたちは「この文章が置かれているのはどのような文脈か」という問いをたて、それに答えることにしたい。

## 2 『直接与件』第一章における「激しい情動」

ベルクソンは「激しい情動」について考察する直前で、「注意と緊張」について考察している。

そのわけは、次の通りである。

「かくしてわたしたちは、魂の深い感情の強度と同様、表層的な努力の感覚をも定義するに至った。どちらの場合にも、漠然とした仕方ではか覚知されないとはいえ、質的な進展と複合性の増大がある。にもかかわらず意識は、空間のうちで思考し、自分が思考していることを自分自身に対して話す習慣を有しているために、唯一の語でこの感情を指示し、努力を、有益な成果が得られるようなある明確な一点へと局所化してしまう」 (DI, 19-20)。

「表象的な努力の感覚」にも、「魂の深い強度」と同様に、「質的な進展と複合性の増大」がみられるのだが、わたしたちはその「質的な」ものを、「空間」の中で思考し、「語」によって表現するため、その「質的な」ものを「空間」にあうように間違えて捉えてしまう。このような錯誤が、ベルクソンは次のように、「表象的な努力」や「深い感情」に挟まれた「中間的な状態」を捉えるときにも見られると述べている。

「意識の同じ錯誤を、表層的な努力と深い感情に挟まれた中間的な状態にも見出すことになるだろう。実際、大多数の心理的状态は、筋肉の収縮と末梢感覚を伴っている。これらの表層的な要素は、純粹に思弁的な観念によって互いに秩序づけられることもあれば、実践的な次元の表象によって秩序づけられることもある。前者の場合には、知的な努力あるいは注意がある。後者の場合には、激しいとか鋭いとか呼びたくなるような様々な情動が生じる。たとえば、怒りや恐れ、ある種の喜びや苦しみや情念や欲望である。強度についての同義の定義が、こうした中間状態にもあてはまることを、手短かに示しておこう」 (DI, 20)。

その「中間的な状態」の一つに、「激しいとか鋭いとか呼びたくなるような様々な情動」があることが述べられている。そして、「激しい情動」の強さと「筋肉の緊張」との関連性が以下のよう

「ところで、注意の努力 (effort d'attention) と、激しい欲望やたけり狂った怒り、熱烈な恋や激越な憎しみといった心の緊張の努力 (effort de tension de l'âme) と呼びうるようなものとのあいだに、本質的な差異は見られない。これらの状態の各々は、一つの観念によって整えられる筋肉収縮の一体系に帰着すると思われるからだ。ただ、注意の場合、その観念は認

識についての多かれ少なかれ反省的な観念であり、情動の場合、行動についての非反省的な観念である。したがって、これら激しい情動の強さは、これらの伴う筋肉の緊張に他ならないはずである」(DI, 21)。

ベルクソンはこのように述べて、「激しい情動」についての考察していく。この考察をすすめるにあたって、ベルクソンはダーウィンによる「憤怒」(fureur)についての生理学的な観察記録や、ジェームズによるこの「憤怒」についての考えに触れ、「怒り」(colère)には、「心理学的な要素が還元不可能なものとしてつねに関わっている」ため、「有機体的諸感覚の総和」にまで還元されるとは言えないと述べている(DI, 23)。このように「憤怒」や「怒り」についての考察を加えた後に、ベルクソンが「恐怖」(frayeur)について考察するために、スペンサーが「恐怖」について述べていることを扱う、という順番になっている。

「したがって、強度の観点から言えば、この研究の冒頭で話題にした深い感情と、たった今吟味したばかりの鋭く、激しい情動とのあいだには本質的な差異はない。愛、憎しみ、欲望が激しさを増すと述べることは、それらは外部へと投射され、表面で放射し、内的な要素が末梢感覚によって置換されると表現するに等しい。しかし、表象的なものにせよ、深層のものにせよ、激しいものにせよ、反省されたものにせよ、こうした感情の強度はつねに、単純な諸状態——意識がそれを判明に取り出すことはない——の数の大小のうちに存しているのである」(Ibid.)。

ベルクソンがスペンサーを引用した箇所と、これらの引用箇所ではベルクソンが述べていることに従えば、ベルクソンがスペンサーの「恐怖」についての考察に触れたのは、「恐怖」が、「強い」すなわち「激しい」ものになると、その「恐怖」は「隠れたり逃げたりするための努力や、動悸や震えなど」の身体的なものとして現れるという点に着目したからであろうと思われる。また、ベルクソンはそこに、ただ「激しい」「恐怖」ということだけで情動の強度を語るだけで終わらないスペンサーの言明に表現の正しさを見出したのであると思われる。そして、スペンサーによる表現ではそれが「それらは外部へと投射され、表面で放射し、内的な要素が末梢感覚によって置換されると表現するに等しい」という印象を与えるかもしれないため、「こうした感情の強度はつねに、単純な諸状態——意識がそれを判明に取り出すことはない——の数の大小のうちに存している」ことを示すことができるように「わたしたちはさらに進んで、これら

の運動は恐怖自体の部分になすものであると主張しよう。それらの運動によって、恐怖は強さの様々な段階を通過しうる一つの情動になる」と述べていたのだと思われる。というのも、運動と感情が相互に作用することによって、「激しい情動」の「激しさ」は生み出されると考えられているからである。

ところで、「激しい情動」を扱う理由が述べられていた引用箇所、「怒りや恐れ」(DI, 20)とされていたことを思い出すと、ダーウィンやジェームズについては彼らが「怒り」について考察している箇所が参照され、スペンサーについては、彼が「恐怖」について考察している箇所が参照されているのではないか、という予測をわたしたちに立てさせるかもしれない。ところで、スペンサーが述べている「恐怖」が扱われるのはそれだけの理由なのであろうか。わたしたちはそれについても以下でスペンサーの著作を扱う際に考えることになるだろう。

### 3 スペンサーにおける「恐怖」(fear)について

わたしたちはこれから、ベルクソンが引用している、スペンサーが「恐怖」について触れている『心理学原理』(*The principles of psychology*, 1855)の該当箇所に考察を加える。

ベルクソンが参照した箇所は『心理学原理』の以下の箇所である。スペンサーはそこで、「恐怖」を次のように述べている。

「恐怖 (fear) は、それが激しい(強い)時、鳴き声、逃避の努力、動悸、震えにそれ自身を表現する。そしてこれらはまさに恐れられた害悪によって現実に苦しみが伴っているという表明である」(PP, 481)<sup>4</sup>。

「恐怖」(fear)は程度が激しくなると、「鳴き声」、「逃避の努力」、「動機」「震え」といった身体的表現としての表明 (manifestation) となると言われている。「優美」についての考察でも行なったように、この文章が置かれているのが、どのような文脈なのか、それを見ていくことにしよう。

スペンサーがこの「恐怖」について述べているのは、『心理学原理』の第八章であり、「感情」(feelings) というタイトルが付けられている章である。この「恐怖」についての考察は§213に含まれている。この§213の概要は以下の通りである。

スペンサーは捕食者(敵)と被捕食者(獲物)の関係を考えている(PP, 481)<sup>5</sup>。敵の方は、これまでの獲物を捕るという行為を経験することによって、複合的印象が生じ(PP, 482)<sup>6</sup>、そ

れが「欲望」(desire)になる(PP, 482)<sup>7</sup>、と言われる。獲物の方では、これまでの傷つけられた経験によって、複合的印象が生じ、それが「恐怖」(fear)である(PP, 482)<sup>8</sup>、と言われる。二つの動物の間に相互的に生じる心理の一方を「欲望」、他方を「恐怖」として、スペンサーは捉えている。そして、先ほど引用した「恐怖」について述べられる箇所が来る。そしてその後には、次の一文がある。

「恐怖(fear)は、それが激しい(strong)時、鳴き声、逃避の努力、動悸、震えにそれ自身を表現する。そしてこれらはまさに恐れられた害悪によって現実に生じている苦しみが伴っているという表明である。破壊的な情熱(destructive passion)は、筋肉系の一般的な緊張に、歯ぎしり及び蹄の突起部の軋みに、眼球及び鼻孔の拡大に、唸り声に現れる。そしてこれらは獲物の殺傷を伴う諸行為のより弱い諸形式である」(PP, 482-483)<sup>9</sup>。

次に引用する箇所で、上記の引用箇所では「恐怖」と対照的に述べられていた「破壊的な情熱(destructive passion)が、「怒り」(anger)であると述べられるようになることが気づかれる。

「恐怖(fear)と呼ばれる精神的状態は一定の痛みの結果の精神的諸表現から成り立つことを各人が証言することができる。そして人々が怒り(anger)と呼ぶものは、ある種の痛みを与える間に生じる諸行為と諸印象の精神的諸表現から成り立つ」(PP, 483)<sup>10</sup>。

獲物が抱く「恐怖」と、捕食者としてのその敵が抱く「欲望」とは、一方が「恐怖」であり続けるのに対して、「欲望」は、「破壊的な情熱」、そして「怒り」という言葉で言い換えられていく。この表現の変遷だけを見ても察することができるのは、スペンサーが「恐怖」と「怒り」という感情を現す言葉で表現する事態は、獲物が敵に対してどのような行動をとり、感情を抱き、敵は獲物に対してどのような行動をとり、感情を抱くに至るかということである。スペンサーは二匹の動物を想定することから始めていることは先に見た通りである。ここで述べられるのは、それらの二匹の動物の間に生じる一つの関係をかたちづくる行為と感情の相互の補足的な状況であると思われる。ここでは一つの闘争の可能性とそれを回避しようとする動きを含んだ両者の、特に弱者であるはずの獲物の心理が行為となってその心理を相手に伝えるために現れていることが表現されているものと思われる。

スペンサーが『心理学原理』で「恐怖」を「怒り」とともに述べている意図を探ったわたし



たちは、ベルクソンがスペンサーの「怒り」ではなくて「恐怖」をとりあげた理由を理解する。その理由とは、スペンサーの議論だと、「怒り」を引用しようと思っても、それには「獲物」に攻撃する場合に限定されてしまうからである。というのも、スペンサーはここで「獲物」と「敵」の間に生じる闘争あるいは牽制の表現としての「恐怖」と「怒り」を扱っているからである。スペンサーは、「恐怖」が「激しく」なる場合について述べていることは確かである。ベルクソンが、スペンサーは「恐怖」が「運動」になると述べていると言っていたのは間違いではない。ただ、スペンサーが「敵」と「獲物」との関係のうちで「恐怖」について述べていること、そして「怒り」が「怒り」として現れる諸段階を述べていることについては注意しておきたい。

#### 4 「一」と「多」から「全体」と「部分」の議論へ

ベルクソンが、スペンサーが思索したことをも引用して主張しようとしていたのは、感情の強度と筋肉の緊張や努力との間には、ある関係が存在することを示すためであることを、わたしたちは前節で確認することができたと思われる。ところで、この感情の強度と筋肉の緊張あるいは努力の関係について考察することは、わたしたちを、精神と物質との関係を、「一」と「多」の関係を用いて捉えることから、「部分」と「全体」の関係を用いて捉えることへと移行させる仕組みを持っている。このような考察のきっかけとなるのは、わたしたちが先に引用した、ベルクソンがスペンサーに言及する箇所である。繰り返せば、ベルクソンは次のように述べていた。

「ハーバート・スペンサーは言う、「強い恐怖は、叫び声や、隠れたり逃げたりするための努力や、動悸や震えなどによってあらわれる」と。私たちはさらに進んで、これらの運動は恐怖自体の部分となすものであると主張しよう (*ces mouvements font partie de la frayeur même*)。それらの運動によって、恐怖は強さの様々な段階を通過しうる一つの情動 (*une émotion*) になる」 (DI, 22)。

本研究では、先に、「恐怖」が単なる末梢感覚に還元されると主張していると誤解を与えないために、「これらの運動は恐怖自体の部分となすものであると主張しよう」とベルクソンは述べていると考察した。しかしこれだけだとこの文章は、単に誤解を避けるための文章であると言ったにすぎない。この一文は、「恐怖自体」 (*frayeur même*) と「これらの運動」 (*ces mouvements*) が、「全体」と「部分」 (*partie*) の関係をなすとベルクソンが考えていることを示していると思

われる<sup>11</sup>。続けて、それらの諸部分によって、それは「一つの」(une) 情動になると言われている。つまり、「全体」として捉えられる「恐怖それ自体」は「一つ」の情動として捉えられるものとされている。つまり、ここには、「部分」を介して「全体」が、部分を含む「一」となることが述べられていると考えられる。

以上の議論がうまくいっているかどうかを確かめるために、わたしたちはここで『直接与件』を離れ、この『直接与件』が執筆されていた期間と幾分か重なる時期に行なわれていたと思われる講義の記録に目を通すことにする。というのも、そこには、わたしたちがここで「全体」と「部分」について考察する助けになるような考えが述べられているからである。

## 5 心理学講義

本研究の第三章で既に少し触れたが、1887年から1888年にかけて、ベルクソンは「心理学講義」に分類できる一連の講義を行なったことが伝えられている。第三章でも引用した箇所ではあるが、そこでもスペンサーの思想について、ベルクソンが次のように述べていることを見ておきたい。

「何人かの心理学者たちは、物質的対象とまったく同様に、諸感覚 (sensations) も恐らくは一性 (unité) に還元可能だと主張した。わたしたちの感官を打つ対象や物体の無限の多様性 (variété) のもとに、化学と物理学が原子という究極の要素 (un élément ultime) を発見したことは、誰もが知っている。わたしたちの様々な感覚は基礎的感覚 (sensations élémentaires) の複合物であって、それゆえ、同じ感覚 (une même sensation) の反復が、外見上はこのうえもなく多様な感覚のすべて (toutes les sensations les plus diverses) を説明する、と主張することはできないだろうか。これは、ハーバート・スペンサーならびに進化学派の全体によって展開された仮説である」 (CI, 60)。

ここでは、諸感覚と一性が、多様性と究極の要素が、基礎的感覚の複合物と同じ感覚の反復が、多様な感覚の全てと同じ感覚の反復とがそれぞれ関係づけられ、各々が、言わば「多」と「一」として、それも、「多」によって「一」が構成されるという関係にあるとして考えられている。次に引用する箇所では、これがうまく行っていない事が述べられる。

「この種の理論にはこだわらないことにする。なぜなら、例えば色の感覚のようなある感覚が、

例えば衝撃の感覚のような、他の一群の基礎的な諸感覚 (sensations élémentaires) から構成されている (se composer) と主張することは理不尽であるからだ。(…)色の感覚は、どの点においても衝撃には類似することのない特殊で、独特な何かである」 (CI, 60-61)。

更に音の感覚について述べられた上で、

「けれども、これらの2つの例において、多様 (multiples) であるのは感覚の物理的原因であって、感覚それ自体ではない。感覚それ自体は分解不可能なもの (indécomposable) である」 (CI, 61)。

とベルクソンは述べたと伝えられている。

物理的領域において原子の発見によっておこなわれたように「多」と「一」とを関係づけることが、心理学が対象にする「感覚」ではできない。というのも、「感覚それ自体が分解不可能なもの」だからである。スペンサーの哲学がうまくいかない場合があることをベルクソンは「感覚」の不可分性について述べることで指摘しているものと思われる<sup>12</sup>。

講義録におけるこの議論は、『直接与件』においてベルクソンがスペンサーを批判する文脈で述べていた「優美」及び「恐怖」についての考察を理解するのにも寄与すると思われる。

「優美」が「努力の節約」に還元されるのは、スペンサーがそれを「運動の美」であると見做すからである (CII, 42)。「恐怖」は「努力」「震え」「動悸」に現れるという。このように述べて、スペンサーは「感覚」を、感官の「対象」と平衡的關係にあるものとして説明しようとする<sup>13</sup>。ここには各々がそれぞれ法則に従っているからこそ一致するという考えが前提としてあるのではないかと思われる<sup>14</sup>。しかしベルクソンは、物理的領域における「多」と心理的領域における「一」とを、対応する「多」と「一」として関係づけることはできないと批判している。

ベルクソンは、『直接与件』で、「わたしたちはさらに進んで、これらの運動は恐怖自体の部分となすものであると主張しよう」と述べ、物理的領域と心理的領域をある仕方で関係づけ直している。具体的に述べられているのは、内的で心理的な「恐怖」と外的で物理的な「運動」との関係を、「全体」と「諸部分」の関係として捉え直すということである。言い換えるならば、心理的領域に属するものと、物理的領域に属するものとを、「全体」と「諸部分」の関係にあるものとして捉え直すことで、「多」と「一」としては関係づけることができなかつた両者を、関

係づけ直していると考えられる<sup>15</sup>。

## 6 本章のまとめの考察

本章で、わたしたちは、『直接与件』でベルクソンがスペンサーを批判しつつ述べる「恐怖」という概念を考察した。ベルクソンとスペンサーが述べていることを比較すると、ベルクソンが「恐怖」とその表出である「震え」などの身体的運動の関係を「強度」に見ているとスペンサーを解釈していると思われたのだが、スペンサー自身はもちろん「強い」恐怖という言葉を使ってはいるとしても、そこで表出されている「震え」などの身体運動は、むしろその「震え」を「震え」として捉える相手（敵）が、そこに認められるからこそその運動であると考えられていると思われた。その証拠として、スペンサーは「恐怖」と対になる「怒り」を併せて考察していることをあげることができる。スペンサーの思索では、「恐怖」と「怒り」とが対比的に述べていることが認められたが、そこでは現れ出る行為とともに感情が形づくられる様子が述べられていた。そこには感情と行為とが同時に生じるさまが描かれていると言ってもよいと思われた。

ベルクソンは、「震え」という身体運動を、「恐怖」という感情の「部分」であるとする考えを示していた。この考えを、わたしたちは「心理学講義」における「感覚」についてのベルクソンの講義の記録を参照しつつ、「全体」と「部分」という関係で心理的領域と物理的領域に属するもの同士を関係づけようとするベルクソンの思索を示した。あるものを「全体」と「部分」として関係づけるということは、関係づけようとするそれぞれの項の間に、対応あるいは一致という関係が成立するか否かと問題にする態度からわたしたちを解放すると思われる。スペンサーが彼の「心理学」的考察のなかで、「一」と「多」の対応関係を、それらが心理的領域と物理的領域にまたがるものでありその関係を説明するのが難しいと思われるにも関わらず、スペンサー自身はその難しさに躓いていない。このことが、ベルクソンにスペンサーの心理学がうまく行っていないと判断させていたのではないかと思われる。心理的領域に属するものと物理的領域に属するものを何らかの仕方で関係づけることができるとすれば、それは、「一」と「多」という関係においてではなく、「全体」と「諸部分」という関係であるとベルクソンにおいては考えられていると思われる。しかも、「恐怖」という心理的な領域に属するものが「全体」として、「運動」という物理的な領域に属するものがその「諸部分」となるものとして考えられていると思われる。「全体」と「諸部分」の関係として関係づけをし直すやり方は、ここでは細かく論じることはできないが、『物質と記憶』を経て、次章からわたしたちが取り扱う『進化』にも

引き継がれるアイデアであると思われる。

最後に、これまでわたしたちが考察してきたベルクソン哲学に対するスペンサーの影響を整理しておこう。本研究の第四章では、わたしたちは「共感」概念を軸にして「優美」という概念を考察するという仕方に、ベルクソン哲学に対するスペンサーの影響の可能性があると判断するに至った。「優美」についての考察に示されていたのは、本研究の第三章で扱った講義録の美学講義にも見られたものであり、美学講義ではスケートをする人についての言及がスペンサーを引きながら行なわれたという記録が含まれており、スペンサー自身が彼の著作において考察していたことを思い起こさせる内容になっていた。本章では「恐怖」の概念を巡る両者の議論を考察した。影響という点について述べると、本章で考察した内容には、スペンサーからの影響を見て取ることは難しいと思われる。本章で考察した内容は、スペンサーからの影響ではなく、スペンサーの「恐怖」の考察を踏まえた上でそれを自分の思想に引きつけて用いているベルクソンの思索を示すものになったのではないかと思われる。それは「全体」と「部分」の関係として、「恐怖」ということに現れる諸現象を包摂してしまうやり方である。また、「恐怖」についてのベルクソンの思索は、「等質的なものから異質的なものへの移行」として一般にまとめられる、スペンサーの言う「進化の原理」は、結局は「複雑化」という概念でまとめることができる、とベルクソンは考えていたということ、そして、そこにはベルクソンが本当に問題にしたい「相互外在性なき異質性」としての「持続」と「等質的」なものがどのように関わり合うかということが問題にされているのではないことも示されたのではないかと思われる。つまり、スペンサーの「異質性」とは複雑化によってもたらされた「より複雑なもの」という意味であると解されるものであるということである。ベルクソンが「恐怖」と「運動」とのあいだにある関係を「全体」と「諸部分」として捉える必要があると考えたそのこと自体が、スペンサーの思想に対するこの見解を示唆するものになっていると思われる。

<sup>1</sup> S. Dresden は、わたしたちが問題として取り上げた『直接与件』における「優美」と「共感」について注釈するうえで、それをドイツの「感情移入」(Einfühlung) 論と関連づけて考えている。Dresden は、Lipps や Volkelt の名前をあげている。S. Dresden, Bergson et l'esthétique, in *Les études bergsoniennes*, Volume IV, Paris, 1956, pp. 71-72.

<sup>2</sup> 本稿の第三章の「2-2 美学講義」の項を参照のこと。

<sup>3</sup> « Une frayeur intense, dit Herbert Spencer, s'exprime par des cris, des efforts pour se cacher ou s'échapper, des palpitations et du tremblement. Nous allons plus loin, et nous soutenons que ces mouvements font partie de la frayeur même: par eux la frayeur devant une émotion, susceptible de passer par des degrés différents d'intensité. »

<sup>4</sup> スペンサーは『第一原理』で「恐怖」について次のように述べている。これは本文中の「恐怖」理解を助けるだろう。「幼い子供においては、その父の怒りは漠然たる恐れ——肉体的の痛みとか、快楽の剥奪とかの種々の形をとる、将に來らんとする害悪の感覚——以外のものは、何も発生しないであろう。」「In young child, a father's anger produces little else than vague fear—a sense of impending evil, taking various shapes of physical suffering or deprivation of pleasures.」(FP, 364)

<sup>5</sup> « Suppose the subject of the psychical phenomena we are considering, to have occasional experiences of two animals somewhat similar in colour, size, and general contour, one of which serves for prey and the other of which is a dangerous enemy. »

<sup>6</sup> « The complex impression produced by the enemy, has been followed in experience by injuries, by some defensive actions, by certain cries, and eventually by flight. The complex impression produced by the prey has been followed in experience by motions of pursuit, by successful grappling and biting, by processes of tearing to pieces and swallowing. »

<sup>7</sup> « and the next moment a change in the position of the perceived animal so alters the impression, as partially to excite the psychical states involved in pursuit, attack, destroying, and devouring. But what is either of these partial excitations? It is nothing else than an emotional impulse—a combination of representative feelings which forms the stimulus to action—a desire. »

<sup>8</sup> « To have in a slight degree such psychical states as accompany the reception of wounds, and are experienced during flight, is to be in a state of what we call fear. »

<sup>9</sup> « Fear, when strong, expresses itself in cries, in efforts to escape, in palpitations, in tremblings; and these are just the manifestations that go along with an actual suffering of the evil feared. The destructive passion is shown in a general tension of the muscular system, in gnashing of teeth and protrusion of the claws, in dilated eyes and nostrils, in growls; and these are weaker forms of the actions that accompany the killing of prey. »

<sup>10</sup> « Every one can testify that the psychical state called fear, consists of mental representations of certain painful results; and that the one called anger, consists of mental representations of the actions and impressions which would occur while inflicting some kind of pain. »

<sup>11</sup> 「恐怖自体」が「運動」と対比的に述べられ、更に、「運動」が「部分」と述べられていることから、本研究では、「部分」と対の関係にある「全体」を、「恐怖自体」を表現し得るものであると考え、扱っている。

<sup>12</sup> 「たしかに感覚は、科学的研究の手からこぼれ落ちるものであるかもしれない。まさに、多様な感覚は互いに何等共通点を持たないがゆえに。多様な感覚を互いに還元しあうことができないがゆえに」(CI, 61)。

<sup>13</sup> スペンサーは『第一原理』第二部第二十二章のなかで、次のように述べている。「精神的生活の主要面を構成している神経作用の平衡作用においても、私たちは身体的生活として区別するものを構成するものと同様に、これを分類することができる。私たちは同一秩序でそれらを扱うことができる。」「The equilibration of those nervous actions, which constitute the obverse face of mental life, may be classified in like manner with those which constitute what we distinguish as bodily life. We may deal with them in the same order.」(FP, 406)。「内部の関係は、外部の関係と完全な平衡状態にある」、« The inner relation is in perfect equilibrium with the outer relation. » (FP, 408)。

<sup>14</sup> スペンサーは諸事象を統べる究極の原理を立てている。

<sup>15</sup> 「心」「身」関係を問題にしない場合には、情動は、心身の全体において不可分なものとして

---

生じる現象としての情動であると言えることが出来ると思われる。ここでは、『進化』における「全体」と「部分」の関係についての考察を意識し、このようにまとめることにする。

## 第六章 『創造的進化』を読み直す スпенサー批判の観点から

### (1)

#### ——「単純さ」と「複雑さ」

##### 本章の検討課題

本章では、これまでわたしたちがおこなって来た考察を踏まえ、うえて『進化』を読み直すと、この著作全体が、『直接与件』のなかで示されていたベルクソンがスペンサーの思想をどのように理解しているかということに基づいて作られており、その理解に基づいたスペンサー哲学批判になっていることを明らかにする。そして、この著作にはスペンサーの思索に対する否定的な見解が見られると同時に、ベルクソン哲学に対するスペンサーの影響が見られることを主張したい。わたしたちは、これから、『進化』を構成する全四章を一章ずつ考察し、最後に『進化』の全体像を捉えることにする。本章では、『進化』第一章を扱い、次章で『進化』第二章を、そして『進化』第三章と第四章を最後に扱うことにする。

ベルクソンによるスペンサー批判は二通りの仕方、すなわち、一つはスペンサーを直接批判する仕方、もう一つはスペンサーの名前こそ出さないまでも『直接与件』でおこなわれていたスペンサー批判にみられた諸概念を使って批判する仕方である。従って、本研究では、その二つの仕方でおこなわれているスペンサー批判をそれぞれ区別して明示し、検討することにする。その上で、両者の関係に考察を加えることにする。

#### 1 ベルクソンのスペンサー批判——『進化』第一章

ベルクソンは『進化』の序説で、早くもスペンサーの進化論に対して次のように言及している。

「スペンサーの偽進化主義 (*faux évolutionnisme de Spencer*) ——それは、すでに進化を遂げた現勢的現実性を、これまたすでに進化を遂げた小片へと裁断し、しかるのちにこれらの断片によって現実性を再構成し、かくして、説明するべきものすべてを予め自分に与えることに存している——に代えて、これら二つの理論 (認識の理論と生命の理論) は、現実性がその発生と成長において迎えられるであろう真の進化主義 (*évolutionnisme vrai*) を立てるだろう」 (EC, x)。



本文が始まる前にすでにベルクソンはスペンサーの学説を「偽進化主義」と述べており、それに対して、「真の進化主義」があるということを述べている。この一文はこれからわたしたちが『進化』をスペンサー批判の観点から読み直して明らかにしようとしているベルクソンの主張をあらわしている。わたしたちはこの一文が言わんとしていることがどのようなことであり、スペンサーによってなされる「再構成」とはどのようなものであるとベルクソンが考えているか見ていくことになる。それでは、『進化』第一章におけるスペンサーへの言葉に考察を加えることから始めていこう。

### 1-1 スペンサーに直接言及している箇所を検討

ベルクソンはスペンサーの名前をあげながら、スペンサーの哲学とは、次のようなものであると述べている。この文章は「獲得形質の遺伝」について述べる文脈のなかにある。

「とりわけ規則的に遺伝する変異の原因に到達したいなら、そう〔：努力そのものを掘り上げて、より深い原因を探し求めること（を）〕しなければならないとわたしたちは思う。ここで、獲得形質の遺伝の可能性 (*transmissibilité des caractères acquis*) に関する諸々の論争の詳細に立ち入るつもりはない。また、わたしたちの手に余る問題について、あまりにも明確に態度を表明しようとも思わない。しかし、その問題に完全に無関心なままでいるわけにはいかない。哲学者は、今日漠然とした普遍性 (*vagues généralités*) に甘んじることはできないし、学者がおこなう実験の詳細を辿って、彼らとその結果について議論する義務がある。この問題ほどそのことを痛感させてくれるところはないのである。もしスペンサーが獲得形質の遺伝 (*hérédité des caractères acquis*) について問題を立てることから始めていたら、彼の進化論はまったく違った形態を帯びていただろう。個体が身につけた諸習慣が子孫に伝達する (*se transmettre*) のはきわめて例外的な場合でしかないなら (わたしたちにはそうであるように思える)、スペンサーの心理学は全部やり直さなければならないし、彼の哲学の大部分が (*une bonne partie de sa philosophie*) 崩れ落ちてしまうだろう。だから、この問題がどのように立てられているのか、どの方向で問題の解決が探られていると言えるのかを述べておこう」(角括弧内補足引用者) (EC, 79)。

ベルクソンによるスペンサーへのこの批判を受けて、「獲得形質の遺伝」についてのスペンサーの考察は間違っていて、その間違いはスペンサーの哲学にとって大きなダメージであると

ベルクソンは考えていることをわたしたちは見てとることができる。ただしここでベルクソンが述べていることで注目すべき事柄は、それによって「彼の哲学の大部分が崩れ落ちてしまう」ということである。ただし、全てが崩れると言っているのではない。この箇所を、わたしたちがこのように読むのは、ベルクソンが、「獲得形質の遺伝」についてのこの箇所の考察を経てなお、スペンサーについて述べ、その哲学への批判をやめないということには、大部分が崩れ落ちてもお残るものがあるとベルクソンはみなしていることが示されていると考えるからである。それを証拠立てるものと思われるからである。ただし、『直接与件』の考察を経て本章の考察を始めたわたしたちにとって、ベルクソン自身がスペンサーの思想のうちで、特に心理学に重要性を認めていたことを知ることは有益であると思われる。そしてそのなかでも「獲得形質の遺伝」についての考察は特別重要であるとベルクソンは考えていると読むことができる。しかも、この「獲得形質の遺伝」についての考察は、一人の哲学者が構築した哲学思想を大きく損なうほど、大きな問題である、とベルクソンは述べているように見える。

また、わたしたちは、この「獲得形質の遺伝」に関するベルクソンによるスペンサーへの批判は、先に引用した『進化』序説におけるベルクソンによるスペンサー批判とは異なっていることに気づく。序説では、スペンサーの、「再構成」という方法を用いた議論の進め方が批判の中心になっていたのに対して、第一章のこの箇所ではスペンサーが「獲得形質の遺伝」を主張していたことに対して、ベルクソンは批判している。そして、わたしたちが今見ているのは、この「獲得形質の遺伝」を主張したことが、スペンサーの哲学の大部分を損なっているとベルクソンが考えているということであった。ここでわたしたちは問いを二つ立てることができる。一つ目は、ベルクソンが序説でおこなったスペンサーへの批判と、第一章でおこなったスペンサーへの批判とはどのような関係にあるのか、という問いである。二つ目は、「獲得形質の遺伝」の問題をとりあげることがもつ重要性をベルクソンはどの点にあると考えていたのか、という問いである。これらの二つの問いを持ちつつ、わたしたちはベルクソンがこのトピックに見ていた哲学上の重要性が何かを確かめることから始め、ここで立てた二つの問いに答えることにしたい。

## 1-2 「獲得形質の遺伝」が特に重要である理由——遺伝＝移行・伝達という考え方

本項では、『進化』第一章で扱われている諸進化論をベルクソンが整理・区別していることにしたがって概略的に扱い、そのうえで、『進化』第一章においてベルクソンが述べている「獲得形質の遺伝」についての考察に触れる。そして、そこで示されていることを明らかにしていく。

ベルクソンは当時の進化論の三つの主要な形態は、①ネオ・ダーウィン主義者たちがたてた仮説、②アイマーがたてたような仮説、③ネオ・ラマルク主義者たちがたてた仮説、であると述べている。そして、ベルクソンには「進化の過程のより包括的な観念——確かにより包括的であるがためにいささか漠然なものになるのだが——を獲得するためには、これら三つの努力をどの点に収束させなければならないと考えているか」(EC, 85-86) 示している。以下では、それぞれの立場の者たちによってなされた努力を、ベルクソンがどのように整理し、提示しているか、そしてまた、それに対してベルクソンがどのような批判をおこなっているかを示し、ベルクソンがどこに三つの努力を収束させたのかを明らかにしたい。

#### A. ネオ・ダーウィン主義者たちの努力

ベルクソンは、①ネオ・ダーウィン主義者たちの仮説について、次のように (EC, 86-87) まとめている。彼らが「変異の本質的な原因」であると考えてるのは、「胚に内在している差異」である、という。この「胚」に「差異」が内在するとする考えには、ベルクソンは同意できると述べている。しかし、この「胚」に内在する「差異」が、「純粋に偶然的なもの」つまり「個体」に関わるものだとみなす点には、ベルクソンは同意できないと述べている。この「差異」は、「個体」から「個体」へと伝わる「推進力」(impulsion)が発達したものであるもので、その「差異」は「単なる偶然事」ではない、とベルクソンは述べている。このようなベルクソンの叙述から、彼が批判しているのは、ある「変異」となる「差異」が、諸々の「個体」にその原因をもつとする考えであることが分かる。つまり批判の対象となっているのは、「個体」にのみ原因をもつという意味での偶然性である。それらの「差異」の原因であるはずの個体間を伝わる「推進力」[：諸個体を方向付ける(しかし創造を排除するものではない)という意味で一種の規則性を持つと考えられる]を排除する点において、ネオ・ダーウィン主義者たちの仮説をベルクソンは批判しているものと思われる。ベルクソンは諸生物のうちの「変化」の「傾向」は「偶然的なもの」ではない、つまり、諸々の「個体」によって左右されるものではない、と考えているように思われる。すなわち、ベルクソンは変異伝達の理論において、「個体」に「変化」の原因を帰するという意味での偶然性を排除したいと考えていると思われる。諸々の「個体」において、何の方向性も持たないような「変化」が生じていると考えるのではなく、胚から胚に伝わって、諸「個体」に方向性を与えるような「推進力」が捉えられると考える限り、わたしたちは伝達という事象について規定することに成功しているのではないとベルクソンは考えていると思われる。

## B. アイマーの努力

次に、②アイマーがたてたような仮説についてベルクソンが述べていること (EC, 87) を取り上げよう。そこで主張されていることは、「変異」は、世代から世代へ、決まった「方向」をもって続けられるということである。アイマーは、「変異」が「方向」を持つということを認めている、とベルクソンは述べている。生物の連続的な創造のなかに現れる、「眼」といったものは、「方向」性をもった連続的な「変異」によって構成されたと、そして、こういった「方向」があるということは、諸々の「眼」が類似しているその理由を説明するものであると、ベルクソンは述べる。ただし、この「変異」の「方向」を認める点においては、ベルクソンはアイマーと一致するが、この「眼」という器官の構造の「類似」が、物理化学的な諸原因の組み合わせによって説明できると考えられるか否かという点において、ベルクソンはアイマーと異なるという。ベルクソンは、「眼」という器官について考察を加えると、そこには「心理学的な原因」が介入していることがわかると述べる。「この結果が、物理化学的な諸原因の組み合わせによって十分保証されると主張されるとき、わたしたちはアイマーと袂を分かち」、「わたしたちが眼という特定の例に基づいて証明しようとしたのは、「定向進化」があるとき、心理学的な原因が介入してくる、ということである」 (Ibid.)。以上のように、ベルクソンがアイマーの進化論について考察していることを整理したことでわたしたちが理解したのは、生物の形態変化は、「個体」に由来するのではない、ある「方向」をもっておこなわれており、その「方向」は、「心理学的な原因」として考えられるものだ、とベルクソンは考えている、ということである。

## C. ネオ・ラマルク主義者たちの努力

ベルクソンが、ネオ・ラマルク主義者らがたてた仮説について述べている (EC, 87-88) のは次のことである。ネオ・ラマルク主義者によって主張された進化における「心理学的な種類の原因」を、ベルクソンは高く評価している。また、ベルクソンは、この「心理学的な種類の原因」は、植物界にもはたらいているものであり、意志の影響下でない動物にもはたらいているものであると考えている。ベルクソンはこの「心理学的な種類の原因」は、「個体」における意識的な努力でしかないものではない、と考えている。「変化」は方向付けられて生じ、この「変化」は「努力」と結びついているとされる。この「努力」は、環境から独立した、同一種の成員に共通するような「努力」であり、「胚」に内属しているがゆえに個体間を「遺伝」する「努力」とであるとベルクソンは述べている。

### 1-3 まとめの考察

上記の A、B、そして C で、わたしたちは、①ネオ・ダーウィン主義者の仮説、②アイマーの仮説、そして③ネオ・ラマルク主義者の仮説に対してベルクソンが述べていることを整理したが、それによって、次のことがわたしたちに示されたと思われる。すなわち、生物における形態の変化は、方向づけられている心理学的なものであること、そしてそれは個体の意識的な努力ではないことを、ベルクソンが考えていたということである。また、これは植物界と動物界とに働いており、「複雑さの増大」という「深い変化」を引き起こす「努力」と結びついている、とベルクソンは考えていたということである。ベルクソンは、「心理的な原因」と「努力」とを関連づけて考えており、これは「諸環境から独立している」「個体の努力とは別な」ものであって、グループに共有され、方向付けられているような心理的な努力であると考えていると結論することができる。

つまり、ベルクソンがわたしたちに示した収束された点というのは、方向性を帯びた心理学的な「努力」に結びついたものが伝達されることによって、世代をこえた変化は引き起こされるという点ということになるだろう。「獲得形質の遺伝」について考えることが重要なのはなぜかという問いには、「獲得形質の遺伝」について考察すると、それを引き起こす原因に心理学的で方向性を帯びた「努力」が関連していることが見出されるからであると答えることができると思われる。また、「遺伝」を何らかの「伝達」であると考えれば問うことができる、何が伝わるのかという問いに対しては、ベルクソンは「努力」ということで答えようとしていると伺い知ることができる。では、なぜ「努力」について考察することが重要なのだろうか。ベルクソンが続けて述べていることにしたがって、この問いに答えることにする。

スペンサーの哲学に対する批判に引き続くこれまでの「獲得形質の遺伝」についての諸学説を整理しているベルクソンのやり方によって、わたしたちは次のようなまとめをおこなうことができる。

「獲得形質の遺伝」というトピックを扱うに際して、ベルクソンはそれを次のような問いのもとに扱っていると思われる。その問いというのは、その獲得は個によるものか否か、その獲得はどのようになされたものなのか、また獲得された形質 (caractères) とは何か、それは獲得されてからどのように「遺伝」すなわち「伝達」されるのか、という問いである。また、その「伝達」は必然か偶然か、そしてそこに方向性はあるのかという問いもある。ベルクソンはこのような問いをもって考察を進めているからこそ、「心理学」における「習慣」を進化につい

で考察する対象に含めているスペンサーが批判対象になっているのだと思われる。そして、これらの問いに対して、ベルクソンが述べているのは、「努力」を考察することが重要だということであり、それがこれから本研究で述べる「本源的な弾み」についての考察へと続いて行くのである。「獲得形質の遺伝」のトピックが重要なのは、それが「個体」によるという意味での「偶然的」な獲得でありそれが蓄積されていくと考えると決めてしまうと決定的に見失われてしまう、「本源的な弾み」という概念があるからだと差し当たりは答えることができるだろう。すなわち、「獲得形質の遺伝」の問題は、その問題をどう扱うかということがダイレクトに「生命」についての理論の根幹に結びつく問題であったということになる。また、第一章のなかでベルクソンが批判している「獲得形質の遺伝」を肯定するスペンサーが、序説でベルクソンが批判している「結果」によって「原因」を再構成するという誤謬に陥っているということには、「個体」による「偶然的な」後天的獲得という考えは進化した結果である現在のあり方のほうがよりゆたかであり、過去のほうがよりまずしいと捉えることになることが関係しているものと思われる。というのも、「結果」を構成しているものに含まれているが「原因」を構成しているものに含まれていない、というゆたかな「結果」とまずしい「原因」という関係には、「原因」によって「結果」を把握することはできなくても、「結果」によって「原因」を把握することができるという関係にあるからである。一部捨てることがあるとしても「結果」を分解し寄せ集めることによってしか「原因」を把握することができないという関係になるだろう。

わたしたちは「獲得形質の遺伝」について考えることの重要性を見出した。その重要性とは、このトピックが「努力」と「生命の弾み」にすぐさま繋がるようなトピックであるからということが理解された。それでは、「努力」及び「生命の弾み」について考察を加えていくことにしたい。

## 2 生の弾み——「類似」(analogue)の考察がもたらすもの

### 2-1 「努力」が開く扉——本源的な弾み

(何らかの意味での) 努力が (何らかの仕方で) 遺伝=伝達されうる、という考えを展開させることを通じて、ベルクソンは「生の弾み」という概念ないしイメージを提示する。ベルクソンは以下のように述べている。

「こうして、長い回り道を経て、わたしたちは出発点となった、生命の本源的な弾み (*élan originel de la vie*)、という考え方に戻ってくる。ある本源的な弾みが、成長した有機体を媒介にして、

ある世代の胚から次世代の胚へと移行し、有機体は、胚同士の連結線になる、とわたしたちは考えている。この弾みは、進化の諸線に分かれながらもそこで保存され、諸々の変異の、とは言わないまでも、少なくとも、規則的に遺伝し、累積され、新しい種を創造するような変異の深い原因となる」 (EC, 88)。

わたしたちがこの文章を読んで、生の本源的な弾みが先ほどわたしたちが整理したところの「心理学的な原因」であると考えられているということ、「努力」が関連付けられ得るものであると考えられていることに気づく。ただ、なぜ「生の本源的なはずみ」が「心理学的」なのか。また、それがどうやって「努力」と関係するのか。こう述べることによって、「進化」がどのように明快になるのか。

## 2-2 眼、または構造の「複雑さ」と機能の「単純さ」

ベルクソンは、「眼」を、脊椎動物と軟体動物とにみられるある構造の類似性 (EC, 65) として取り上げ、それに考察を加えている。そこでベルクソンは「互いに独立した系列における眼の構造の類似を説明する」 (EC, 69) ことを試みている。ベルクソンは、生物の「眼」の成り立ちに考察を加えることによって、進化を説明するのに「本源的な弾み」を用いることがいかに正しいかを示す<sup>1</sup>。わたしたちはベルクソンによる「眼」についての考察を辿ることによって、先ほど述べた問いに答えることができるようになるだろう。

ベルクソンは以下のように述べて、「眼」という器官を分析する際にわたしたちが抱いてしまう戸惑いを伝えている。

「眼 (œil) という器械は、それゆえ、それぞれがきわめて複雑な (complexité)、無限個の器械から構成されている。しかし、見るという行為は、単純な事実 (fait simple) である。眼が開くとすぐに、視覚が作動する (Dès que l'œil s'ouvre, la vision s'opère.)。まさにその機能が単純である (simple)、という理由で、この無限に複雑な (compliquée) 器械を組み立てるとき、自然がほんの少しでも気をそらすと、視覚は不可能になってしまうだろう。器官の複雑 (complexité) さと機能の一体性 (unité) があまりにも対照的なので、精神は戸惑ってしまう」 (EC, 89)。

わたしたちに戸惑いを覚えさせるこの器官の成り立ちをどう説明したらいいのであろうか。ベ

ベルクソンは次のように答えている。機械論的理論は、うまく説明することができていない、なぜならば「この説はどのような形式をとろうとも、 (...) 部分同士の相関関係については何も明らかにしない」 (*Ibid.*) からである。では、目的論はどうだろうか。「この説は、諸部分は、あらかじめ立てられた計画に基づいて、ある目的を目指して、寄せ集められたのだと言う」 (*Ibid.*)。そして、この作業は実は機械論もしていることである。「生命は、要素の結合や累積ではなく、分離や分裂によって、仕事を進めるのである」 (EC, 90)。だから、目的論もうまく説明できていない。ただし、ベルクソンがここで述べていることは、目的論における「要素の結合や累積」による進化という説明が間違っているということであって、ベルクソンは目的を設定するという点を間違っていると指摘していわけのではない。機械論と目的論が用いているこのいわゆる「要素の結合と累積」がなされることを進化であると説明するやり方ではない説明は、わたしたちが、器官が無限に複雑なこと、機能がきわめて単純なこととの間にある鮮やかな対照に対して目を開くことによって可能になる、とベルクソンは続けている。

#### A. 一般的議論——「単純さ」は対象そのものに属している

「眼」に着目したベルクソンは、「単純さ」と「複雑さ」が共存する場合について次のように述べている。

「一般的に言って、ある同じ対象が、一方では単純に (*simple*) 見え、他方では無際限に多くの要素から構成されている (*composé*) ように見えるとき、これら二つの見かけの重要性、いやむしろ実在性の程度は同じではない」 (EC, 90)。

対象が単純に見えるときの「単純さ」 (*simple*) と、無際限に多くの要素から構成されている (*composé*) ように見えるときのさまを、それぞれ「単純さ」 (*simplicité*) と、「複雑さ」 (*complication*) という概念に置き換え、ベルクソンは次のように続けて述べている。

「このとき、対象そのものに属しているのは、単純さ (*simplicité*) の方で、無限の複雑さ (*complication*) は、わたしたちがこの対象を周りから場所をかえながら眺めるときの見え方に属している」 (*Ibid.*)。

「実在性」はどのように異なるかと言えば、単純さは「対象そのものに属している」のに対し



て、複雑さは「対象を周りから眺めるときの見え方」に属しているというように異なる、とベルクソンは述べている。

「見るという行為は、単純な事実である」と述べるベルクソンは、続けて「単純さ」とは「眼が開くとすぐに、視覚が作動する」ということであると述べる。「まさにその機能が単純である」とベルクソンは続けている。

わたしたちに単純であると思わせるのは、「眼」をただ開くという物理的な変化によって、視覚は作動するからである、とベルクソンは述べている。見るという行為それ自体は、複雑な過程や手続きをしない、ということであろう。しかし、そうした単純なはたらきが成立する生理的な基盤は、極めて複雑であるように見える。「眼」という器官についての描写に従えば、自動的な物理的運動に単純さをベルクソンは見ているものと思われる。ただし、ベルクソンがこの見るという行為を物理的運動に還元してしまっていると見做すことは適当ではないと思われる。というのは、ベルクソンは単純さと複雑さを「対象そのもの」と「再構成する模倣」に変換しているからである。物理的運動として処理する仕方、先取りして言えば「知性」的な見方は、「再構成する模倣」に含まれているはずだからである。

#### B. 芸術のアナロジー——「単純さ」と「複雑さ」の順序

「眼」について考察されるなかで捉えられた「単純さ」と「複雑さ」の関係を、天才的な芸術家が描いた作品をモザイク画で再構成する、という設定を用いて、一つの対象に見出される「単純さ」と「複雑さ」との関係を、ベルクソンは次のように示している。「絵」というものにわたしたちがみてとるのが単純なものであり、モザイク画というものにわたしたちがみてとるのが複雑なものであるとされる。「絵」をタイルを使ってモザイク画として再構成しようとするとき、よりよく再現しようとするとき次のことが生じる。

「この小片が小さければ小さいほど、その数が多ければ多いほど、色調が多彩であればあるほど、手本にしている絵の曲線やニュアンスをより正しく再現することになる」（EC, 91）。

よりよく再現しようとするこのような手順をとれば、わたしたちはより正しく再現することができるようになるだろう。しかし、わたしたちはこの手順を踏んでも、その絵を完全に再現できるようにはならないだろう。なぜならば、わたしたちはそれを再現するのに「より」小さなかけらを用いれば「より」正確な再現になると知ってはいるが、それには限度があるからである。

ベルクソンは次のように述べている。

「しかし、その芸術家が単純なもの (simple) として考えていた像の正確な等価物を獲得するためには、無限なニュアンスを提示する無限に小さな要素が、無限個必要となるだろう」 (Ibid.)。

ベルクソンがこのように述べるように、わたしたちは無限個の要素を手に入れることはできないからであろうし、いつまでたっても完成することのないモザイク画が、いまこのままで完成している絵と同一なものであるとは、考えることはできないであろう。

「芸術家はこの像を、一まとまりのまま、キャンバスに移そうとしたのであって、この像がある不可分な直観 (intuition indivisible) の投影として現われるほど、その完成度は高まる」 (Ibid.)。

ベルクソンは「絵」を再構成する「モザイク画」という設定を用いて、「単純な」ものは再構成できないものであるということをこのように述べる。そして、この再構成不可能性を、「眼」と「知覚」の関係に移して、次のように述べている。

「絵 (tableau) ——わたしにとってそれはキャンバスに投影された単純な行為 (acte simple) のことだが——は、わたしたちの知覚に入るだけで、わたしたちの眼に対して、みずからを幾千ものの小片 (petits carreaux) に分解したのだ」 (Ibid.)。

それ以上分割されないという意味で単純な「絵」は、わたしたちの知覚に「入るだけで」分割される。対象が分割されるのはある意味ではわたしたちの意志とは関係なく行なわれる自動性であると言って良いだろうと思われる。わたしたちの知覚は、必然的に、単純なものを要素の集まりへと分割する、とベルクソンは述べているように思われる<sup>2</sup>。また、ベルクソンは次のようにも述べる。

「全体 (le tout) をある寄せ集め (un assemblage) と表象した後初めて、このモザイクの秩序が驚くべきものに見えるのである」 (Ibid.)。

この文章によれば、わたしたちはある全体である対象を寄せ集められるはずのものとして表象した後に、その対象が実は寄せ集めによっては実現できなかったことに気付くということになっている。寄せ集めたものによって、わたしたちは寄せ集めによっては成り立ち得ない全体に気付く。これが眼の機能と構造を用いた「進化」の議論にどのように関係してくるのだろうか。

「眼」というひとつの器官における、見るという行為の「単純さ」と器官の「複雑さ」との関係についてベルクソンは述べていた。「単純さ」は対象そのものに属しているとベルクソンが考えていたこともわたしたちは確認した。この芸術のアナロジーによってベルクソンは「単純さ」がやはり対象そのものに属する性質であるとして、わたしたちがそれを知性的に把握することから手放している、と考えることができる。

「こうして、驚くほど複雑な (complexité) 構造を持つ眼も、それがわたしたちに対して諸々の細胞のモザイクにみずからを分割する限り、見るという単純な (simple) 行為でしかありえないだろう」 (Ibid.)。

進化した結果として最も複雑なつくりをした眼を持つわたしたちのこの眼の複雑さは、わたしたちの知覚が捉えるに過ぎない複雑さであってそのように複雑さを認めることができるということこそ、わたしたちが、知覚にせよ知性にせよ高度なものをもっていることの証拠になっている。そして、わたしたちは知性を用いて理解しようとする限り「単純さ」を対象そのものに備わるものとして手放さざるをえないのであるから、それは見るという行為を可能にしている眼という器官すべてを貫く一本の線としてわたしたちに認められるようになる。

### C. 運動は二つの様相を呈する

——運動に帰された「単純さ」とそれを再構成する際に認められる「複雑さ」

先に「単純さ」と「複雑さ」の順序についてベルクソンが示していることをわたしたちは確認した。この順序は、言わば時間的な様相のもとで理解される関係であったが、ベルクソンは続く手の運動の説明のなかで、その時間的な関係以上の関係が、単純さと複雑さとの間にはあることを示している。

「わたしが点 A から手を上げて点 B へと動かす場合、この運動はわたしに対して同時に (à la fois) 二つの様相を呈する。内側から感じられるものとして、それは単純で、不可分な行為で

ある。外側から見られるものとして、それはある曲線 AB の経路である。この線に、わたしは好きなだけ多くの位置を見分けることができるだろうし、この線自体を位置同士が連携したものと定義することもできるだろう。しかし、無限個の位置も、点同士を結びつける秩序も、わたしの手が A から B へと向かった不可分な行為から自動的に生じたものである (Mais les positions en nombre infini, et l'ordre qui relie les positions les unes aux autres, sont sortis automatiquement de l'acte indivisible par lequel ma main est allée de A en B) (EC, 91-92)。

この文章では、ベルクソンは「同時に」、「単純さ」と、無限個の位置として表現される、いわば「複雑さ」とが生じていると述べる。不可分な行為から生じる (sortir) とは述べられてはいないにしても、ここでは時間的順序以外のものがある。ベルクソンは手の運動を説明するにあたって、運動は実在 (réalité) そのものである (EC, 92) ことを述べる。この運動は位置に対して次のような関係にあるとされる。

「運動は、諸々の位置やそれらの秩序よりも、多いもの (plus) である。なぜなら、運動をその不可分な単純さにおいて与えるだけで、継起する無限個の位置とそれらの秩序が同時に与えられ、その上、位置でも秩序でもない本質的な何か、つまり動性が与えられるからだ」 (Ibid.)。

「しかし、別の意味で、運動は、一連の位置とそれらを結びつける秩序よりも、少ないもの (moins) である。なぜなら、諸々の点のある秩序で配置するためには、まず秩序を表象し、次にその秩序を点によって実現しなければならず、また、寄せ集めの仕事と知性が必要だからだ。それに対して手の単純な運動はこのようなものを何も含んでいない。その運動は、人間的な意味では知性的なものではないし、要素からなるものではないのだから、寄せ集めではない」 (Ibid.)。

この「運動」と「無限個の位置」すなわち、「単純さ」と「複雑さ」と言い換えられる事態は、「単純さ」には「複雑さ」より以上のもの、というのはここでは「動性」のことなのだが、それがあるという関係にある。また、「単純さ」を把握する以上に「複雑さ」を把握することにはより以上の手段、ここでは「寄せ集めの仕事」と「知性」が必要とされる、という関係にあるとされている。この関係は、「眼」の「視覚」に対する関係にも言えることが次のように述べられている。

「眼の視覚に対する関係についても同じことが言える」 (*Ibid.*)。

「視覚には、眼を構成する諸細胞とそれらの相互の連携よりも、多くのものがある」 (*Ibid.*)。

「眼の単純な行為が自動的にみずからを分割して無限な要素になった後で、人はそれらの要素がある同じ観念に基づいて連携し合っていることに気付くだろう。ちょうどそれは、わたしの手の運動が無限の点を落としていった後で、それらの点と同じ方程式を満たしていることに気付くのと同じである」 (EC, 92-93)。

この「自動的にみずからを分割する」ということはわたしたち人間に備わる「知覚」「知性」そして「感覚」がおこなっていることである。わたしたちにこういった「知覚」や「知性」によって把握されることによって、単純な行為は無限の要素になる。その後から、わたしたちはそれらの諸要素が「ある同じ観念に基づいて」連携し合っていることに気付く、という。つまりわたしたちは「単純さ」を「ある同じ観念に基づいて」いるということとして認めているということが示されていると思われる。そして、それはわたしたちがそれにただ「気付く」だけでよいことであり、それはわたしたちが作り出すことではない。その「ある同じ観念に基づいている」ものとしての単純さは、諸点が満たしている「同じ方程式」を満たすものとしての運動のうちにある単純さと同一のものである、とベルクソンは述べている。ここでもまたわたしたちはその方程式を諸点が満たすということに気付くだけでよい、とされる。ここには、単純な対象と、そして知覚や知性や感覚があるが、複雑な諸要素はわたしたちを通してのみ存在するのであって実在はしないものであるとベルクソンは考えていることを読み取ることができる。

#### D. 製作と有機的組織化

——自動的分割を理解することの困難はわたしたちが何かを作り上げる

その過程にある

ベルクソンは、これまでに述べてきたことがらを理解することの難しさは、わたしたちが、単純な行為をする器官を生み出す有機的組織化の働きを、製作 (*fabrication*) という操作として表象してしまうことにある、と述べる (EC, 93)。「働き」を「操作」として表象してしまう、と

いう、わたしたちにおける「表象する」というのはたらしきの限界が示されると同時に、わたしたちが「操作」というかたちで「おこなう」ということも、わたしたちを通してしか実在しない諸要素を用いてなされることであると示されている。わたしたちが限界付けられていることを示す働きとしての「製作」と、「有機的組織化」の違いを、「周辺から中心へ」そして「中心から周辺へ」とベルクソンは表現する。それによって、ベルクソンは「製作」と「有機的組織化」の働き方には、「逆」向きの働き方があると指摘する (*Ibid.*)。「単純さ」「複雑さ」という様相の違いを、その様相において形づくられているはたらしきの違いに置き換えるならば、そこにわたしたちが認めるはたらしきは、互いに「逆」の方向をもつはたらしき方として認められるものである、ということになる。逆向きのはたらしきである、とされる根拠は、理念的中心のまわりに材料を「寄せ集める」はたらしきと、生命体においてなされる受精の「爆発的な」はたらしきが、対照的なはたらしきであると捉えられるからである、とされる (*Ibid.*)。

「単純さ」を認めることができる対象が、自動的に「複雑な」ものとして認められるようになるということを理解することが困難であるのは、わたしたちが何かを創り上げられていく過程を、そのまま何かを製作する過程と同じものであると理解していることにある。つくり上げられる過程にはいくつかのものが認められることをわきまえば、わたしたちが感じている難しさは解消することが示されているものと思われる。

以上に述べた「表面的な違い」と区別される違いとして、ベルクソンは「深い違い」があることを述べている。ベルクソンは、その「深い違い」についての考察を、「製作された作品」について考察することから始める。そして、ベルクソンのこの考察は科学批判に続いていく。

「製作された作品は、製作の働きの形式を描いている (*L'œuvre fabriquée dessine la forme du travail de fabrication*)。つまり (*J'entends par là*)、製作者は、まさに生産物の中に、彼がそこに置いたものを再び見つける (*le fabricant retrouve exactement dans son produit ce qu'il y a mis*)。彼がある機械 (*machine*) を作ろうとする場合、その部分を一つずつ切り分けていって、つぎにそれらを寄せ集めて組み立てるだろう。出来上がった機械に、その部分とそれらの寄せ集めを見て取れるだろう。ここでは結果の全体 (*l'ensemble*) が仕事の全体を表わしていて、仕事の各部分に、結果の部分が対応している」 (*EC, 93-94*)。

上記に引用した箇所は、「製作」というモチーフと「実証科学」および「科学」がおこなっているはたらしきというモチーフを媒介する箇所である。この箇所は本研究にとっての眼目である、

と思われる。というのも、後で述べることになるが、ベルクソンは、スペンサーが用いた方法に、諸々の要素を寄せ集めるという方法をみてとっており、その方法とともに堂々巡りのやり方、結果から原因を再構成しているにすぎないやり方を指摘し、それを批判的に考察しているからである。この箇所ですべて述べられていることの主要な点を明示しておきたい。

わたしたちは、ここで述べられていることが、かなり限定されたことであることに注意する必要があるだろう。「作品」(œuvre)という言葉も、「製作された」(fabriqué)ものであるという限定つきであるし、それを作り上げる者も「製作者」(le fabricant)である。具体的な例として出されているのは「機械」(machine)を作り上げるという例でしかない。そして、具体的に当のその機械を作ろうという目的をもってそれを作り上げているに過ぎない。ここには何も不足がないし何も行き過ぎるものがない。まさに目指された目的を達成する過不足のない完璧な仕事となされるさまが描かれている。しかし、この完璧さは、限定されたサークルのなかでしか果たされることのない完璧さである。その完璧さは製作者がはじめに置いたものを「再び見つける」(retrouver)に過ぎないものである、とも言える完璧さである。これまで完璧さと述べて来たのは目的を果たすという意味での完璧さであったが、わたしたちが持つその目的は限定されたものであり得るということを示してもいいことになるだろう。製作することによって得られる充足感には、わたしたちにおける限界づけのはたらきが隠されている、と思われる。そして、この限界というのは、対象がわたしたちの「知覚」に入ってくるだけで自動的に発動してしまう分割というはたらきにその原因をもつと整理することができるだろう。「形式」と「再発見」との係わりについて示すことのうちにも、ベルクソンが、わたしたちにおいてはたらいしている「知性」があることを示しているのは明らかだと思われる。

ここで描かれているわたしたちうちにある限界は、科学批判になり、次のように述べられることになる。

「実際、実証科学の目的は、諸事物の奥底を明らかにすることではなく、それらに働きかける最良の手段を与えることである。物理学と化学はすでに進んだ科学であって、有機的物体はわたしたちの物理学や化学のやり方でそれを扱える限りでしか、わたしたちの作用に委ねられない。したがって、有機的組織化が科学的に研究可能なのは、有機物が最初に機械と同一視されたときだけである」(EC, 94)。

つまり、ベルクソンの見方に従う限り、わたしたちは否応無く科学批判をせざるを得ない。と

いうのも科学的見方を批判すること自体が、わたしたちが、わたしたちが用いる「製作」という方法が持っている限界を認めることであり、「製作」という方法とは別の仕方でも、わたしたちは認識することができるということを示すことであるからである。上記引用したように、「科学」の限界を述べてから、ベルクソンは続けて「哲学」が持っている視点について、次のように述べている。

「以上が科学の視点である。わたしたちの考えでは哲学の視点はまったく別である」(Ibid.)。

「科学の視点」と「哲学の視点」とを分けて述べていることは、「製作」という仕方以外の仕方を認識する方法がわたしたちには備わっていることを示すものになっていると思われる。

### 2-3 まとめの考察

脊椎動物、軟体動物といった互いに独立した系列に属する生物がもつ「眼」が、構造において類似しているということに注目し、それについての考察することは、「単純さ」と「複雑さ」の関係について考察することに続いていた。そこでは、両者の成立する時間的順序が述べられており、時間的順序として関係づけられていた。続いて、両者の関係が「動性」と「製作」および「知性」において関係づけられていた。そこから「製作」についての考察がなされてきた。「製作」について考察する必要があったのは、対象を「知覚」するだけで「複雑さ」は自動的に生じるとしても、その「複雑さ」をそれとして把握するためには「知覚」とは別のはたらきである「知性」が働いているはずだと考えられたからだと思われる。この「製作」を考察していくにつれて、ベルクソンはわたしたちを「単純さ」と「複雑さ」に対する視点から、「不可分性」への目配せを経由して、「全体」と「部分」に対する視点へと移していく。これから述べるように、それは「製作」「知性」と関連付けられる「科学」への批判のなかでおこなわれてく。ベルクソンによるスペンサー批判が「再構成」という概念をめぐっておこなわれることは最初に確認した通りである。「再構成」と「製作」および「知性」は、生命の創造をダイレクトに明らかにしないものという意味で同じ役割をもって扱われ、批判される諸概念である。わたしたちがこれから考察する「科学」批判においてもまた、ベルクソンがスペンサーに対して考えていたことを見て取ることができるであろう。

## 3 全体と部分



### 3-1 全体と部分 (1) 科学批判

前節で述べた通り、ベルクソンは「科学の視点」と「哲学の視点」を区別している。ベルクソンは科学を批判的に考察するのだが、その過程で、科学が捉える仕事のなかの「全体」と「部分」の関係について、ベルクソンは次のように述べている。前節で考察を加えた箇所も含むが引用する。

「有機的組織化が科学的に研究可能なのは、有機物が最初に機械と同一視されたときだけである。諸細胞は機械の部品になり、有機体はその寄せ集めになるだろう。部分を有機的組織化した諸々の要素的な仕事は、全体を有機的組織化した仕事の現実の要素とみなされるだろう。以上が科学の視点である」 (EC, 94)。

製作された作品の部分が製作の仕事の部分と対応し、作品全体が仕事全体と対応する、という考えが、有機組織化のはたらきに対してずらして考えられ、部分的な有機組織化の仕事が、全体的な有機組織化の仕事をつくりあげる要素として見なされることになる、とベルクソンは述べている。要するに、部分的な仕事が全体的な仕事をつくりあげるように捉えられるようになる、とベルクソンは述べている。しかし、ベルクソンによればこれは間違った考えである。

ベルクソンの考えは「有機的組織化された機械」に及ぶ。これは、ベルクソンが「有機体」と「機械」というように分けて考えることをやめた場合についても考えていることだと思われる。ベルクソンは、「有機的組織化されたある機械の全体」が「有機的組織化の仕事全体」を表わしていることについては、近似的に真であるとして認めても良いと述べる。しかし、寄せ集めである機械では、機械の部分と仕事の部分に対応していたのに対して、ここでは、

「機械の部分は仕事の部分に対応していない」 (Ibid.)。

全体ではなく部分について述べるならば、機械と仕事の間には非対応がある。機械と仕事とが対応しないことの理由としてベルクソンが述べるのは次のことである。

「なぜならこの機械の物質性が表わしているのは、もはや用いられた手段の全体ではなく、回避された障害の全体であるからだ (*la matérialité de cette machine ne représente plus un ensemble de moyens employés, mais un ensemble d'obstacles tournés*)。それは肯定的実在というより、ある

否定である」 (Ibid.)。

機械全体と仕事全体は対応していることが近似的にせよ認められるとしても、機械の部分と仕事の部分は対応しているとはいえない、とされていた。なぜならば、機械の物質性は回避された障害の全体を表わしているからだ、という。機械においては諸「部分」としても捉えられる「物質性」は、部分であるにも関わらず「回避された障害の全体」を表わしてしまう、と考えられていると思われる。機械の物質性は障害の部分だけを表わすのではない。

「結果」とそれに至る過程、及び「全体」と「部分」の関係についての考察を経て、ベルクソンは眼の器官と機能との議論に立ち返る。「したがって」 (ainsi) とベルクソンは述べる。次に引用する箇所がわたしたちに伝えるのは以下のことである。「単純さ」としての視覚は、「力」とであると述べられるようになる。これは視覚そのものを考えた場合のことである。そのものというのは、「行動に延長されない」という意味である。このように役立たない視覚ではなく実際にわたしたちが使用している視覚については、「生体の視覚は、有効な視覚であり、その生体が作用を及ぼしうる対象に限定された視覚である。それは運河のように方向を定められた視覚で、視覚器官が象徴しているのは、単に運河による方向付けの仕事なのである」と言われる (EC, 95)。

「運河」という言葉によって象徴的に示されているように、わたしたちが実際に用いている視覚は、限定を受けてしまっている視覚である。そして、わたしたちが実際におこなっている行為そのものが限定されているという指摘に、ベルクソンの議論は移行しているということにわたしたちは気付くであろう。「単純さ」と「複雑さ」の関係を理解することの難しさは、「製作」と「有機的組織化」を混同してしまうことにあるのだが、その混同について腑分けしてみると、そこからわたしたちは生体として有用に行動するものであるがために被らざるをえない自動性によって限定されてしまう「視覚」をみてとることになる。

「視覚は、権利上わたしたちの視界には入り得ない無限の事物に到達するような、ある力なのである」 (EC, 94-95)。

「しかし、そのような視覚は行動へと引き継がれることはないだろう。したがってそれは、生体ではなく、亡霊にふさわしいような働きである」 (EC, 95)。

「生体の視覚は、有効な視覚であり、その生体が作用を及ぼしうる対象に限定された視覚で

ある。それは運河のように方向を定められた視覚で、視覚器官が象徴しているのは、単に運河による方向付けの仕事なのである」 (Ibid.) 。

「したがって、視覚器官の創造は、解剖学的な要素の寄せ集めによっては説明されない」 (Ibid.) 。

### 3-2 全体と部分 (2) 鉄くずの比喻

ベルクソンは続けて、鉄くずの比喻を用いて、あたかも単に手を上げるだけといったように、大した抵抗を受けずに自然が「眼」を創造するのに用いているやり方とは違って、何らかの「抵抗」がある場合に用いられるやり方を考察する。

「わたしの手が、空気中を動くのではなく、圧縮されていて、わたしが手を前に進めるに従って抵抗するような鉄くずを横切らねばならないと想定してみよう」 (Ibid.) 。

そして、

「さて、手と腕がずっと眼には見えなかったと仮定してみよう」 (Ibid.) 。

先ほどとは異なり、今度は眼に見えるのが手ではなく手以外のものになっている。ここでもわたしたちは眼に見えるものによって現象を説明しようと試みる、とされる。そしてここでは、「単純さ」から自動的に「複雑さ」に変換された諸要素を用いることでは、不可分な運動を再構成することができないことが示される。

機械論者と目的論者は様々な説明をするだろうが、

「真実は、単に、ある不可分な行為、鉄くずを横切る手の行為があっただけなのである。鉄くずの運動の汲み尽くすことのできない詳細や、それらの最終的な配置の秩序は、抵抗の全体の形であって、要素となっている積極的作用の総合ではない。いわば否定的にこの不可分な運動を表現しているのである」 (Ibid.) 。

「単純さ」から「複雑さ」に展開する際の自動性に比べて、「複雑さ」から「単純さ」へ展開する際の道のりはなんと険しいことか、という印象を持たざるを得ないだろう。険しいところで

はない。ベルクソンはここでは「単純さ」を推論するにとどまるわたしたちを描いているものと思われる。というのも実は手の単純な運動があっただけなのだ、とからくりを示すだけにとどめているからである。「単純さ」は「複雑さ」によって否定的に表現されるに留まるとされる。

「こういうわけで、鉄くずの配置に「結果」という名前を与え、手の運動に「原因」という名前を与えるとき、せいぜい言えるのは、結果の全体が原因の全体によって説明されるということだけで、原因の部分に結果の部分に対応することは決してないだろう」(EC, 94-95)。

前に見たことではあるが、ベルクソンが次のように述べていたことをここで再び扱うことはわたしたちの理解を助けるかもしれない。

「なぜならこの機械の物質性が表わしているのは、もはや用いられた手段の全体ではなく、回避された障害の全体であるからだ。それは肯定的実在というより、ある否定である」(EC, 94)。

「機械の部分は仕事の部分に対応していない」とベルクソンは述べていたのだった。「結果」と「原因」という語が「鉄くずの配置」と「手の運動」に置き換わったものとして描かれている。そして「結果」と「原因」は何の結果であり原因であるのかについて考察すると、それはそれぞれ「手の運動」の結果であり「鉄くずの配置」の原因であるが、ある一つのものの原因と結果ではないことに気付かされる。すなわち、ここで用いられている「結果」と「原因」は「全体」という概念に媒介された「対応」する A と B と同義であるということになるだろう。なぜならば、厳密に言って、鉄くずの配置と手の運動の間にはわたしたちの知覚が入るのであって、このいわば「対応」としての因果関係を結ぶのはわたしたちの知覚に過ぎないからである。

「別の言い方をすれば、機械論も目的論もここでは場違いであって、独特な説明方式に訴えねばならないだろう。さて、わたしたちが提案する仮説では、視覚と視覚器官との関係は、手と、その運動を描き、運河のようにそれを方向づけ、限定する鉄くずとの関係とほとんど同じものになるだろう」(EC, 95)。

整理しておくとして、ベルクソンは次のように述べて、機械論と目的論がおこなっていることを規

定している。機械論は、「鉄くず一つ一つの位置を、隣接する鉄くずがそれに対して行使する作用に結びつける」(EC, 94)。目的論は、「全体の計画が、要素的な諸作用の詳細を司っていると主張する」(Ibid.)。「こういった説明が場違いであるということである」とベルクソンは述べるのだが、それはすなわち、機械論も目的論も、この「知覚」を媒介にした「原因」と「結果」の対応関係を認める理論ではない、ということが考えられているということになるだろう。そして、このようにある全体対全体として知覚が受け入れる限りでそこには因果関係が成立するが、それを諸部分に分けて対応させようとする、ある全体 A—原因を構成する諸部分間における関係、言い換えるならば、原因と原因の間関係と、ある全体 B—結果を構成する諸部分間における関係、言い換えるならば、結果と結果の間関係へと思考は移り、原因の部分の結果の部分と対応させることが不可能になるというさまをベルクソンは述べているのではないかと思われる。

### 3-3 全体と部分 (3) 努力——抵抗を前提にした非物質的な力

ベルクソンの思索は次のように進んで行く。

「手の努力が大きいほど、手は鉄くずのより深いところまで進むことになる。しかし、手がどこで止まろうと、瞬間的、自動的に、それぞれの鉄くずは互いに均衡をとり、連携し合う。視覚とその器官についても同じことが言える。視覚を構成する不可分な行為がどこまで進むかによって、器官の物質性をなす、互いに連携し合う要素の数は増減する。しかし、秩序は必然的に完全無欠である。それは不完全ではありえないだろう。なぜなら、もう一度言うと、秩序を生み出す実在的な過程は部分を持たないからだ」(EC, 96)。

鉄くずにも器官についても同様に考えられることは、互いに連携し合う要素の数が増えることがより複雑であるということであると思われる。というのも、単純な「視覚」を構成する「不可分な行為」の進行の程度が、その「視覚」を実現させる「器官」を構成する要素の多寡を決めるからである。ただし、「器官」がより複雑であってもより単純であっても、そこに見られる秩序はいつも完全である。そして、秩序が完全であるのは、その秩序に対応する実在には部分がないからであるとベルクソンは述べている。

わたしたちは「完全な一致は一種の恩寵である」(Ibid.) と考える傾向がある、とベルクソンは述べる。この傾向を引き継ぐならば、この恩寵はいつも実現されているということになるだ

ろう。

この恩寵が実現される理由は、こうである。

「現実には、原因の強さに程度はあるものの、この原因は結果を、一まとまりのものとしてしか、完全な仕方では、生み出すことができない」 (*Ibid.*)。

この秩序の完全さが、わたしたちを次のような考察に導くことになる。

「この原因が視覚の方向へどれだけ進むかによって、ある場合には、低次の有機体の単なる色素の寄せ集めを、ある場合には、セルブラの原基的な眼を、ある場合にはアルオキバに見られるすでに分化した眼を、またある場合には鳥の驚くほど完成された眼を生み出すだろう」 (EC, 97)。

視覚器官の発達の様子は、それがどれだけ視覚に近づいているかの程度を表わしている、とベルクソンは述べることになる。だから、

「二つの動物種がいくら離れていても、双方で視覚への歩みが同じだけ進んでいるならば、どちらの種にも同じ視覚器官が現れるだろう。なぜなら、器官の形態はどれだけ機能が働くようになったかを示す尺度を表わしているだけだからだ」 (*Ibid.*)。

「視覚」という単純さを目指す「不可分な行為」は、結果としては複雑なものとしてわたしたちに受け取られるはたらきであるということになるだろう。単純さを自指している、とわたしたちが言うてしまうのは、「視覚への歩み (*une marche à la vision*) を語る時、わたしたちは目的性という古い考え方に舞い戻っているのではないか」 (*Ibid.*) とベルクソンが述べるように、その「不可分な行為」は志向的な性格を持っているからである。ベルクソンは次のように述べている。

「もしこの歩みが到達すべき目標の、意識的あるいは無意識的な表象を要求するならば、疑いの余地なくそうだろう。しかし、この歩み (*marche*) が生命の根源的な弾み (*l'élan originel de la vie*) によって行なわれ、この運動 (*mouvement*) そのものの中に含まれているからこそ、こ

の歩みはそれぞれ独立した進化の線に見出される、というのが真実である (Mais la vérité est qu'elle s'effectue en vertu de l'élan originel de la vie, qu'elle est impliquée dans ce mouvement même, et que c'est précisément pourquoi on la retrouve sur des lignes d'évolution indépendantes) 」 (Ibid.) 。

なぜ、どのようにしてその歩みが件の運動のなかに含まれているのか、と言えば、

「生命とは、何よりも先に、原物質へ作用する傾向である (la vie est, avant tout, une tendance à agir sur la matière brute) 、と答えるだろう」 (Ibid.) 。

「この作用の方向はおそらく前もって決められてはいない。そこから、生命が進化の途上で散種した諸形態の予見不可能な多様性が生じる。しかし、この作用は、程度の違いこそあれ、つねに偶然性を帯びている。少なくとも、選択のきざしを含んでいる。しかるに、選択は、可能な複数の行動を前もって表象することを前提する。視覚的知覚は、それ以外のものではない。諸物体の眼に見える輪郭とは、それらに対するわたしたちの可能的な行動の素描なのである」 (Ibid.) 。

わたしたちは、ベルクソンがこのように言うのをもうスムーズに理解することができるだろう。すなわち、わたしたちの「視覚的知覚」は限定されていて、その限定はどういった意味での限定であるかと言えば、わたしたちが「見る」のは「それらに対するわたしたちの可能的な行動の素描」でしかない、という意味での限定である、ということである。「可能的な行動の素描」ということが意味するのは、わたしたちがある対象を視覚の先に認めるとき、それは簡略に言えばその対象にはたらきかけることができるということの意味する。見えるものは操作することができるものであるという、視界に認める諸物体に対してわたしたちが抱くざるをえない自在感とも呼べるものは、諸物体に対する支配感を抱かせるとしても、わたしたちが自由であるということの意味するものではなく、むしろわたしたちが不自由であるということの意味するものとして描かれていると思われる。というのも、わたしたちに可能でないものはそもそも視覚に入ってくることはなく、わたしたちの意志とは別に取り除かれてから与えられるからである。予見不可能な多様性を実現させるこの作用は、多少なりとも選択の兆しをふくんでいる、という。選択の兆しが含まれていることが前提にしているのは、可能な複数の行動を前もって

表象すること、であるとされる。複数の選択肢によって限定された「視覚的知覚」は、選択をおこなうものである。わたしたちが諸対象を見るとき、そこにはわたしたちが行為的に如何に限定されたものであるかを認めているということになるだろう。

#### 4 本章のまとめの考察

なぜ「生の本源的なはずみ」が「心理学的」なのか。また、なぜそれが「努力」と関係するのか。こう述べることによって、「進化」がどのようにより明快になるのか。わたしたちはこれらを明らかにする必要があった。これらの問いに対して、わたしたちは次のように答えることができる。

「生の本源的なはずみ」が「心理学的」であるのは、次の理由による。「生の本源的なはずみ」は「視覚」への「歩み」を行なうものであるというある志向性をもつという点にあると思われる。この「歩み」という「運動」の内に含まれる「はずみ」はそれによって生じた運動とともにいつでも志向性をもち働いているという点をわたしたちは本研究において確認した。志向性が心理学的であることを表現する。

なぜ、それが「努力」と関係するのか。「努力」は物質的な抵抗を前提とした「力」の表現である。「生の本源的なはずみ」の「生命」は、「原物資へ作用する傾向である」。だから、「生命」は物質へ作用する際に受けるであろう「抵抗」に対峙せざるをえない。ここに、「努力」と関係する理由がある。このように述べることによって、生命進化における「類似」した現れがなぜ出現するのかが明快になった。「類似」した器官の複雑さをわたしたちの知覚は認めるのだが、その認識は、その器官を備えた有機体が「視覚」という単純さにどれだけ近づいているのかという点を指し示している。「伝達」されているのは「はずみ」であり、単純性の実現に向かう傾向である。抵抗する障害を多く乗り越えるにつれて器官は複雑化して現れるようになる。乗り越えられる障害の数と、実現されようとする単純性からの距離は比例する。

スペンサーへの批判は、個体が獲得した諸習慣が次の世代に遺伝することをめぐってなされているのは見たとおりである。「獲得形質の遺伝」があるとしてしまうと、進化した「結果」から「原因」としての「進化」のはたらきそのものを構成することになり、それが「結果」によって「原因」を再構成するという、ベルクソンが指摘するスペンサーの誤謬に通じるものとなっていると考えられた。つまり、これまでのベルクソンによる「単純さ」と「複雑さ」の議論を鑑みると、スペンサーの議論はベルクソンにとっては「結果」でしかない諸事物によって、「原因」であるはずの生命の「運動」が再構成されていっている、というように見えたと思われる。



また、スペンサーが述べた「等質性から異質性への移行」という進化の原理についてもまた、間接的に批判されることになっていると思われる。というのは、この進化の原理が諸事物の複雑化する過程を示しているのなら、それに対しては、進化という現象においては、「単純さ」は志向されるものではあって、それ自体が「複雑さ」をもつようになる、複雑化するという関係は、「単純さ」と「複雑さ」の間に結ぶことはできないからである。ベルクソンの言葉で述べるならば、スペンサーの原理は、諸事物の組み合わせ方の増加ということを示しているに過ぎないのだと批判することになるだろう。

「単純さ」と「複雑さ」の関係を使って、ベルクソンは「全体」と「諸部分」の関係にわたしたちの視点を行きかせ、「単純さ」と「複雑さ」の関係も、「全体」と「諸部分」の関係も、あるひとつのなにものかをかたちづくりつつも、他方から他方へと移行したり互いに一致したりする関係にはないことが論じられていたことをわたしたちは本章において確認した。「全体」と「部分」の関係を論じるにあたって、「全体」と「諸部分」が対応し一致するということを肯定することはできない。ただし、その「全体性」の性格によれば、この『進化』では、それは、それ自体「不可分な」生命の原理である「生の弾み」のことなのだが、「全体」と「部分」の関係をつかって、生命の進化についてわたしたちをより深い考察へと導いて行くのではないかとと思われる。わたしたちは次章で、この「全体」と「部分」についてのベルクソンの考察を、「知性」と「本能」との関係が「補足し合う」と述べるベルクソンの考察にしたがって、よりよく理解することになる。そして、そのなかで、本研究の目的であるスペンサーからの影響についての考察も行なっていく。

---

<sup>1</sup> ベルクソンは「複雑さ」と「単純さ」の構図と「本源的なはずみ」によって「眼」の成立を説明する。ところで進化について述べるのに「眼」に着目するのはベルクソンに限ったことではない。ダーウィンは『種の起原』のなかで、「眼」について考察しながら、どんなに複雑な器官であっても簡単なという意味で単純なものが漸次的に自然選択によって複雑なものとして成立してきたと述べている。「極度に完成化し複雑化した器官——さまざまな距離に焦点をあわせ、種々の量の光をはいるようにさせ、球面収差や色収差を補正する、あらゆる種類の無類の仕かけをもつ目が自然選択によってつくられたであろうと想像するのは、このうえなく不条理のことに思われる、ということを、私は率直に告白する。だが、理性が私に告げるところによれば、もしも完全に複雑な目からきわめて不完全で単純な目にいたる数多い漸次的な段階が存在し、しかも各段階はその所有者にとって有用であることが示されるなら、またもしも目がつねに軽微な変異をし、たしかに実際にそうであるようにその変異が遺伝するものであれば、そしてさらに、変化する生活条件のもとである動物に有用であるなんらかの変異あるいは変化が器官に生ずるものであるなら、完全に複雑な目が自然選択によって形成されたと信ずることの困難は、たとえわれわれの想像ではうちかちがたいものであっても、現実的なものとは考えられないのである。』『種の起原(上)』、八杉龍一訳、岩波書店、2009年、p. 242。「目ほどに完全な器官が自然選択で生じることができたという信念は、どんな人をもたじろがせるに十分であるが、しかし、どのような器官の場合でも、それぞれの段階がその所有者にとって利益である複雑さの漸次的変化のながい系列が知られるならば、変化する生活条件のもとでは、考えられるかぎりの完全さが自然選択によって達成されるということは論理的に不可能なことではないのである。中間的なあるいは移行的な状態が知られていないいろいろの場合では、そのような状態が一つでも存在したはずはないというような結論をくだすには、きわめて慎重でなければならない。なぜなら、多くの器官の相同やそれらの器官の中間的な状態は、おどろくべき機能の変化が少なくとも可能ではあることを、示すからである。」同書、p. 264。ここで付け加えても良いと思われるが、「自然選択」とは、ダーウィンによれば次のようなものである。「(…) 自然選択——生活のための闘争において有利な変異の保存によってのみ作用する力——(…)」同書、p. 265。

<sup>2</sup> 「曲線」そして「芸術家」ということでわたしたちは『直接与件』においてベルクソンが述べていたスペンサーの考えに対するベルクソンの批判を思い出すかもしれない。「優美」を「努力の節約」としてはいけなかったのはなぜか。すなわちベルクソンの言葉で言うならば、物理的共感としてだけ理解しそれで喜びについて語ることはどうして不足なのか。運動をその実現する喜びまで再構成できるとはなぜ言えなかったのか。この問いに、ベルクソン自身ここで答えることになっていると思われる。それは、その運動を、まず、「知覚」したからである、と。

## 第七章 『創造的進化』を読み直す スпенサー批判の観点から

### (2)

#### ——「知性」と「本能」そして「共感」 補足し合う生命

##### 本章の検討課題

わたしたちは前章で、ベルクソンが『進化』第一章で行なった「獲得形質の遺伝」に関するスペンサーの主張に対する批判と、ベルクソンが序章で述べていたスペンサーの「再構成」という方法を用いた議論に対する批判の関係と、その批判の意図を探った。「獲得形質の遺伝」の議論は、「単純さ」と「複雑さ」の議論へと引き継がれ、不可分な「生の弾み」についての考察を経て、「全体」と「部分」という概念を巡る議論に至った。「共感」についての考察が保留にされているため、『進化』では、これまでのところ、ベルクソン哲学に対するスペンサーの影響について言えるのは、従来諸研究が示しているように、スペンサーの思想に対する批判がなされていることが言えるということが指摘できるにとどまる。

本章では、わたしたちは特に「対立」及び「補足」という概念によってベルクソンが有機体を、「動物」と「植物」へと、そして「動物」を「脊椎動物」と「膜翅目」へと、更には、「知性」と「直観」を象徴するものへと区別し、補足し合う様を描くことを見るだろう。わたしたちはそこで更に「全体」と「部分」の議論がどのように引き継がれていくか、その議論は、「補足」という概念を用いたベルクソンの進化論にどのように寄与するかを見るだろう。これを確認して、わたしたちはやっと、ベルクソンがスペンサーに対して行なった批判を、ベルクソン自身の主張に対して位置づけることができるようになるのである。

#### 1 スペンサーへの言及

ベルクソンは『進化』第二章では次のようにスペンサーに言及している。

「これに対して哲学者たちはこう言うだろう。「行動は秩序ある世界で遂行されている。この秩序はすでに思考のものである。知性を行動によって説明するとき、論点先取を犯している、行動は知性を前提しているのだから」。もしこの章で身を置いている視点がわたしたちの決定的な視点でなければならないのなら、彼らの言い分は正しいだろう。そのとき、わたしたちはスペンサーと同じ錯覚におちいることになるだろう。物質の一般的諸特徴によってわたしたちのうちに残された刻印へと知性を還元するとき、知性は十分説明される、とスペンサーは信

じた。あたかも物質に内在する秩序が知性そのものではないかのようだ！しかし、どの点まで、どんな方法を使って、哲学が物質と同時に知性の真の生成を試みることができるのかという問題は、次章のために取っておく。さしあたり、わたしたちが取り組んでいる問題は、心理学的な種類の問題である。すなわち、物質的世界で、わたしたちの知性がとりわけ適応している部分はどのようなものだろうか。しかるに、この問いに答えるために、何らかの哲学体系を選ぶ必要はない。常識の視点に立てばよいのだ」(EC, 153-154)。

このなかで、わたしたちが注目する必要があるのは次の一文であろう。

「物質の一般的諸特徴によってわたしたちのうちに残された刻印へと知性を還元するとき、知性は十分説明される、とスペンサーは信じた。あたかも物質に内在する秩序が知性そのものではないかのようだ！」(Ibid.)。

すなわち、このようにスペンサーを批判して、ベルクソンは、「物質に内在する秩序が知性そのものである」ということを主張するのである。わたしたちは「物質」に内在する「秩序」が「知性」であるということを見ることになるが、ベルクソンはその前に「直観」と「知性」を対照的に述べ、それらが「補足し合う」という関係にあると言えるからこそ、両者をそれぞれ規定できるという仕方をとっている。それでは、わたしたちは「知性」が「物質」に内在するというベルクソンの主張がどのように構成されていくのか、そしてそれは、「全体」と「部分」の議論とどのように関係しているのか、という二点について考察していくことにする。

## 2 「類似」ではなく「補足」(complément)

『進化』第二章は、『進化』第一章の最後で述べられていたように、進化の多岐に及ぶ結果の互いに補足し合っているところを検討している。「類似」した器官である眼について考察した後で、それぞれ独立して眼を持つそれぞれの生物について考察するというやりかたは、『進化』第一章において生物と無生物を分けた後に、生物の中でも「眼」をもつ有機体に対して目を向けることを容易にする。この構造は、わたしたちのベルクソンが述べた「進化」ということを理解するのを助けるものになっていると思われる。「補足」は「類似」とどのように異なっているか。「眼」という類似したものを備えているということを観察することで、わたしたちはある不可分な「生の弾み」という根源的な弾みの存在証明へと導かれた。つまり、わたしたちはある

根源的に「同一」であるものをそれぞれが前提にしているという結論へと導かれた。「補足」に対するこの「類似」についての考察との違いは、具体的に「眼」について考えてみると分かりやすい。さまざまな生物に観察されるそれぞれの「眼」という器官は、お互いに「補足」し合っているわけではない。類似する「眼」という器官を集めても「眼」に実現される「視覚」は構成されない。「補足」という概念は、有機物における植物と動物は、相互に生体活動を支え合っているというような関係にあり、また、それらを集めるとある「生物界」を構成することができるという関係を表現している。「補足」によってわたしたちはある一つの「生物」という最も広い概念を手に入れることになる。すなわち、それぞれの個別の諸「生物」によって「生物界」は構成されると言える。

生命はただ一つの「火薬の込められていない砲弾」の「軌道」のようなものではない、とベルクソンは述べる。それは、「ある砲弾」(un canon)であり、それは火薬が込められている砲弾、「すぐに飛び散って破片になり、その破片自身もある種の砲弾で、今度はその破片が飛び散って、また飛び散る運命にある破片になる、ということをきわめて長い間続けて来たような砲弾」であると述べられる(EC, 99)。「わたしたちが知覚するのは、わたしたちの最も近くにあるもの、つまりばらばらになった破片の散り散りになった運動だけ」であり、わたしたちは「本源的な運動」(mouvement originel)に遡らなければならない、と言われる(EC, 99)。わたしたちは、『進化』第一章に引き続くこの箇所で行われていることで、ベルクソンが述べようとしている生命のイメージの概要を掴んでしまうだろう。すなわち、単数で語られる「ある砲弾」が生命のもともとのすがたであり、そこには単数で語られる「本源的な運動」がある、というものである。そして、『進化』を読み進んで行くにつれて、そこに向かってわたしたちは導かれていくことになる。

#### A. 社会

ベルクソンは、「動物」のなかでも社会をもつものを大きく二つに区分し、「知性的」な社会をもつ「脊椎動物」と、「本能的」な社会をもつ「昆虫」とに分けて考察している。

「社会的生への衝動 (une impulsion) を比喩としてではなく語る事ができるならば、その衝動の主要部分は、人間に到達する進化の線に沿って運ばれ、残りは膜翅目へと至る道に集められた、と言わねばならない」(EC, 102)。

「したがって、アリとミツバチの社会はわたしたちの社会を補う一面 (aspect complémentaire) を示しているだろう」 (Ibid.)。

「衝動」を分有している、二つの線に分けられる二種類の「社会」は、それぞれ相補い合っている、とされる。そして、分有しているから補い合うという表現は、次のように補い合う性格を持つ「社会」が現れ出ているから、分有されているもとの「弾み」があるはずだという表現に言い換えられる。

「社会がこれらの線のうち二つの線に現れなければならないとすれば、それらは、道が分岐していることと同時に、弾みが共有されていること (la communauté de l'élan) もあらわにしているはずであろう」 (Ibid.)。

「したがって社会は、二つの系列の性格を展開しているのだろうし、わたしたちはおぼろげながら、これらの性格が互いに補い合っていること (complémentaire) に気づくだろう」 (Ibid.)。

このように、同一の弾みが共有されているから、そこから分岐して来た二つの「社会」が「補い合う」という関係にあると言えるという構造が、「補い合う」「社会」の側面から、そして「弾み」の「共有」という側面からと、両方の側面から語られている。

## B. 「動物」と「植物」

上で述べたように、ベルクソンは「根源的な弾み」の分有と「補い合う」ということの間には相互に関係があると考えている。この「補足」と「分有」という概念は、生物を次のように「傾向」として考えさせるものになる。

「どんな生命現象も、他の大部分の生命現象にとって本質的な特徴を、原初状態、潜伏状態あるいは潜在的状態で含んでいる。違うのは割合である。この割合の相違が偶然ではないこと、他とは割合の違う集団が、進化するにつれ、その集団固有の特徴を強調する傾向があったことを証明できれば、この割合の相違で十分集団を定義できるだろう」 (EC, 107)。

「根源の弾み」の「分有」と「補足」が諸有機体の間で行なわれていると考えられるのならば、そこにみられる「傾向」でそれぞれの有機体のグループを定義する方が自然だと考える方向にわたしたちは導かれていく。この「傾向」によって、「植物」と「動物」とが改めて次のように定義されることになる。

「運動性と固定性は、植物界においても動物界においても共存している (coexister) が、その釣り合いは明らかに崩れていて、一方では固定性のほうへ傾いて、他方では運動性に傾いているのだ。この二つの対立する傾向が二つの進化を導いているのがあまりにも明らかなので、これらによってすでにそれら二つの界を定義することができるだろう」 (EC, 110-111)。

このように、ベルクソンは「傾向」という概念を用いて、「動物」と「植物」をそれぞれ定義していくが、そうしていくと、わたしたちが理解するのはそれらが如何に区別されているかということとともに、それがいかに「共存」しているかということである。そして、それらがうまく「共存」していればいるほど、わたしたちはそれらがそこから分化して来たもとの根源的な同一性を意識していくことになる。そして更に考察を進めていくと、それらは一つの意識の二つの側面として述べられていく。

「退化して不動の寄生物と化した動物において意識は眠り込んでしまうが、逆に運動の自由を取り戻した植物において意識はおそらく眼を覚ます。植物がこの自由を取り戻した範囲に正確に応じて、意識は眼を覚ますのである」 (EC, 113)。

ベルクソンが「より深く」考察を進めていくにしたがって、わたしたちには、区別される二つのものがより強固に互いに「補足し合う」さまが現し出される。そして、その二者は、区別されるとしても、一つのことを「分有」しているのであり、そのように「分有」しているがゆえにそれらは「補足し合う」のだということを、わたしたちは理解していくのである。

「それゆえ結局、二つの界の「調和」 ( « harmonie » )、それらが示す互いを補足し合う (complémentaires) 特徴は、それら二つの界が、最初の一つに溶け合っていた二つの傾向を展開させることから生じる。根源にある唯一の傾向は、それが増大するにつれて、原基状態では互いに含み合っていた二つの要素を、同じ生体の中で一つに結びつけておくことにより

大きな困難を覚える。そこから分裂が、二つの分岐する進化が生じる。またそこから二つの系列の特徴が生じる。これらの特徴は、ある点では対立し合い (s'opposer) 、別の点では補い合う (se compléter) 。しかしそれらは、対立し合おうと補い合おうと、常に類縁関係の感じ (un air de parenté) を維持している」 (EC, 117) 。

ベルクソンは、主要な線とそれ以外の線をそれが、根本的であるか否かという分け方で、動物進化を主要な線として、植物の進化をそれ以外のものとして区別している。「傾向」とそれが展開することによって生じた二つの「界」同士が、上に引用したように、「調和」していると語られる。「調和」は「補足し合う特徴」によって示されるものであると思われる。「調和」が見られるところではそれらは互いに補足し合うという関係が見られる。「調和」は根源的な唯一の傾向性を示す、つまり「唯一性」を表現しているとされる。

### C. 「脊椎動物」と「節足動物」

「脊椎動物」と「節足動物」を分けて論じていく際に、ベルクソンは「神経系の発達」の程度を論点とする。

「最も低次のモネラから、最も恵まれた昆虫、最も知的な脊椎動物に至るまで、実現された発達はとりわけ神経系の発達であって、その発達の要求に応じて、各段階で部品が創造され複雑になっていった」 (EC, 127) 。

「神経系の発達」は何をもたらしかといえば、「行動」の多岐性であり、「行動」を実現する際の「選択」の余地である。「行動」とそれにとまなう「選択」はわたしたちに「非決定性」をもたらし、それはわたしたちに分岐して来た「生命」の役割であることが以下のように述べられる。

「この本の最初から仄めかしておいたように、生命の役割は、物質に非決定性を挿入することである。生命がその進化に応じて創造する形態は、決定されていない。私が言いたいのは、それらが予見不可能であるということだ。この形態がその乗り物として役立っているに違いない行動性も、次第に決定されざるものになる。いや、それは次第に自由になるのだと私は言いたい。ニューロンはそれぞれ繋ぎ合わされていて、その結果それぞれの末端では多くの道が開か



れており、その道の数だけ問題が立てられる。このニューロンと神経系は、まさしく非決定性の貯蔵庫である」 (*Ibid.*)。

「自由」の実現が、「神経系の発達」と関係するからこそ、ベルクソンは「植物」ではなく「動物」にわたしたちの注意を向けさせ、そこにこそ「生命」の「進化」の極点を見ているものと思われる。この「自由」は次第に実現されていくものであり、それ自身完全に実現された姿でわたしたちに先天的に備わっているものではない。つまり、「生命の弾み」それ自体に「自由」がすでに実現されたかたちで含まれていたということは言えない。まさに「自由」はその実現が決定されていないという性格を持つものとして述べられている。また、ベルクソンのこの議論に従えば、有機体における高低は非決定性の実現されている差であると言えるだろう。「神経系の発達」によってこのような違いがある「動物」は、それぞれがつくりだす社会の性格に従って二つに分類されていたが、それは「本能」と「知性」として、次のように区別されていく。

「節足動物の進化は、昆虫、特に膜翅目とともに、頂点に達し、同じように脊椎動物の進化は人間と共に頂点に達する。もし、昆虫の世界と同じくらい本能 (*instinct*) が発達している所はないこと、膜翅目と同じくらい本能が優れている昆虫の集団はないことに気づくなら、動物界の進化は、植物的生への後退を除けば、二つの分岐する道で行なわれ、一方の道は本能に向かい、もう一方は知性 (*intelligence*) へと向かった、と言えるだろう」 (*EC*, 135)。

「本能」と「知性」に実現された違いは、「程度の差異」ではなく「本性 (*nature*) の差異」であると言われる。これまでの議論を踏まえると、この「本性の差異」を持つ両者は、両者の違いが「程度の差異」ではないが故に、それらは補足し合うということになるだろう。ベルクソンは続けて「知性と本能も、対立し合い (*s'opposer*) 補い合う (*se compléter*) ことを示す」 (*EC*, 136) と述べ、「知性」と「本能」それぞれの考察に入る。ベルクソンは「知性と本能は同じ秩序 (*ordre*) のものではない」という (*Ibid.*)。わたしたちは、スペンサーに対してベルクソンが批判する文章で、「秩序」という概念によって説明されていたことを思い出すことは有用だと思われる。ベルクソンはこう述べていた。スペンサーが信じたことによると、「あたかも物質に内在する秩序が知性そのものではないかのようだ！」 (*EC*, 153) わたしたちはこれからベルクソンが「知性」と「本能」について述べる所を整理したい。目配せしておきたいのは、ベルクソンが既に述べていることではあるが、この両者は、対立し合い補足し合う関係に置かれている、と

いうことである。次節では、まず「知性」にとって不可能なことを示すことによって、「知性」が如何に「本能」と対立し補足し合うことになるのか明らかにしていく、という構図が取られることもまた、目配せしておきたい。

### 3 「知性」の定義

ベルクソンの「知性」についての考察は、ある一つの命題に基づいてかたちづけられている。その命題に基づいて、ベルクソンは「知性」が、わたしたちのうちでどのようなものとしてはたらいっているかわたしたちに対して展開させていく。ここでは、ベルクソンがわたしたちに示す「知性」に基づいている命題を明示するのに、ベルクソンの議論を分かりやすくするために、「知性」をめぐるベルクソンの言明が何に基づいているのかその根拠を辿るという方法を用いることにする。

前節の終わりで目配せしたように、ベルクソンは「知性」というのはたらしには出来ないことがあると、次のように述べている。

「そうした過去の起源は、生命的なものを不活性なものとして扱い、あらゆる実在を、それがいくら流動的な (fluid) ものもであっても、停止して二度と動くことのない固体の形式のもとで考えようとするわたしたちの執拗さのうちに簡単に発見されるだろう。わたしたちが気楽にしていられるのは、非連続的なもの、不動のもの、つまり死んだものの中にいるときだけなのである。知性は、生命を生まれつき理解できないことによって特徴付けられる」 (EC, 166)。

この引用文の最後に述べられているように、ベルクソンは「知性」というのはたらしは、「生命」を理解することができない特徴をもつと述べる。その理由は、「知性」は「非連続的なもの」「不動のもの」「死んだもの」を対象にするからである、とされる。このようなものを認識できる知性は、しかし「実在」「流動性」を固化してしまう、という。この「流動性」を「固化する」はたらしが、ベルクソンの述べる「知性」には存しているということになる。このような傾向を持つものとして「知性」は定義されるが、では、なぜベルクソンはこのように「知性」を定義するようになるのか。ベルクソンは次のように述べて、「知性」が「生命」を理解することができないのは、「生命」には次のような本質が備わっているからであり、それが「知性」が「生命」を捉えられなくさせているのだと述べる。

「本来の意味での発明は、産業そのものの出発点であるとはいえ、知性は発明を、その湧出 (*jaillissement*) において、つまりそれが持つ不可分なもの (*indivisible*) において捉えることができないし、その天才性 (*génialité*) において、つまりそれが持つ創造的なもの (*créateur*) において捉えることもできない。発明を説明することとは常に、予見不可能で新しい発明を、異なる秩序で並べられた既知の要素、古い要素に分解することである。知性は、完全な新しさも徹底的な生成も認めない。つまり、ここでもまた知性は生命の本質的な側面を取り逃がす。あたかも、知性はそのような対象を考えるようには決して作られていないかのように」 (EC, 165)。

「知性」が「生命」を捉えることができないのは、「生命」には「新しさ」や「生成」が本質的に備わっているからであるとされる。この「新しさ」、「生成」及び「予見不可能性」や「創造性」、「天才性」、「不可分性」や「湧出」という諸概念は、「発明」を特徴付ける諸概念であるが、それらが「生命」の本質をも特徴づける諸概念として用いられている。「知性」はこれらの諸概念が取り扱う事象を捉えることができないとベルクソンは述べる。「知性」はこのような事象を捉えることができない。しかし、このようなことが出来ないのと引き換えに、「知性」には固有に出来ることがある。それは捉えられた事象を「再構成」するはたらきである。ベルクソンは次のように述べている。

「知性はすでに再構成しようとする、しかも所与のものを使って再構成しようとする。まさにこの理由で、知性は歴史の各瞬間における新しいものを取り逃がす。知性は予見不可能なものを認めない。あらゆる創造を拒否する」 (EC, 164)。

「生命」そのものを捉えることは出来ないからといって「知性」は無駄なはたらきであるのではない。「知性」は「再構成」することを、それ固有のはたらきとして備えている。この「再構成」というはたらきは、わたしたちの「考える」というはたらきそのものであるとも言えるはたらきである、とベルクソンは次のように述べる。

「ここではただ、知性は生成を、それぞれが自分自身と等質で、したがって変化することのない諸状態の系列として表象する」、「考えることは再構成することであって、当然のごとく、

わたしたちは所与の要素ひいては、安定した要素を使って再構成する。その結果、何をしても、わたしたちにできるのは、無際限に追加を進めて、生成の動性を模倣することくらいである。しかし、生成それ自体は、わたしたちがそれを捕まえたと思ったときに、手からすり抜けるだろう」 (*Ibid.*)。

もちろん「生命」そのものを捉える、ということ認識の目的として定めるならば、この「再構成する」という「知性」のはたらきは、それをただ取り逃がすだけのはたらきに過ぎないと表現できるだろう。それは先の引用文でベルクソンも述べるところである。ただ、わたしたちは対立し補足し合うさまを、「知性」と「本能」との間にみてとることになるという目配せをしたように、ここでは「知性」のはたらきによってできることとできないことを述べることで、ベルクソンはこのはたらきに対立・補足する仕方で「本能」について述べるはずであろう、と予測することができる。ところで、「知性」はなぜ諸対象を「再構成」することができるのであろうか。ベルクソンは次のように述べて、その理由が「知性」というはたらきにもなう「語」に備わった特徴に存するという。諸対象を「再構成」することができる、先ほどの引用した箇所によれば、しかも「所与のもの」を用いて再構成することができる理由を次のように述べる。

「語が動的なもので、ある事物から別の事物に進むので、知性は、事物ではない対象に語を適用するために、遅かれ早かれ、語が何もまだ対象としていないのに、途中で取り上げなければならなかった。この対象は、それまでは隠れていて、陰から光へと移行するために語の助けを待っていた」 (EC, 161)。

「語」が「動的なもの」であることによって、「知性」は「事物ではない対象」をも対象とすることができるようになる。なぜ、「知性」は「事物ではない対象」をも対象とすることが可能になったのだろうか。ベルクソンは、次のようにその理由を述べている。

「語の動性は、語をある事物から別の事物へと移動させるために生み出されたが、この動性によって、語は事物から観念へと拡張することが可能になった」 (EC, 159)。

つまり、その「動性」は、「語」に「事物」から「事物ではない対象」つまり「観念」へと至ることを可能にしたからである。「観念」を対象に含めることを可能にする「語」の「動性」につ

いて、ベルクソンは次のように述べて、それが人間的言語の記号の一つであると言う。

「人間的言語の記号を特徴付けているのは、その一般性ではなく、その動性である。  
本能の記号は密着した記号で、知性の記号は動的な記号である」 (*Ibid.*)。

このような言語を備えるため、知性はベルクソンによって次のような能力として特徴づけられるものであるとされる。

「知性は、いかなる法則に従っても分割でき、いかなるシステムとしても再構成できる無際限な能力によって特徴付けられる」 (EC, 158)。

ベルクソンが「知性」について述べていることを整理しよう。わたしたちが見てきたところによると、ベルクソンは「知性」ができないこととして「生命」のはたらきを捉えることができないということをあげていたことを確認した。というのも、「生命」に備わる「流動性」といった特徴を「知性」が対象にすることができないからであった。こういった出来ないこととは反対に、「知性」が出来ることとして、ベルクソンは、対象を「再構成する」というはたらきが「知性」にはあることを示していた。また、この「再構成する」というはたらきとともに、「分割する」というはたらきを備えていることもベルクソンは述べていた。すなわち、「法則」や「システム」といったものに従属するという条件つきではあるが、諸対象を「分割し」「再構成する」ことができる、ということが、「知性」に出来ることであり、それによって「生命」を捉えることが出来なくなっていると整理することができるだろう。

ところで、以上のように整理することができる「知性」の概念が、そのようなものとして特徴づけられるのも、「知性」の本質が「製作」という事象にあり、「製作」という事象を次のようなものとしてベルクソンが捉えていることにあると思われる。ベルクソンは人間の特徴の最たるものは、アリストテレスにおいても述べられていることではあるが、「製作」する能力にあるとしている。そして、この「製作」とは、ベルクソンが述べるところによれば、次のようなものである。

「製作することは、ある素材から対象の形を裁断することに存している (*fabriquer consiste à tailler dans une matière la forme d'un objet*)」 (EC, 156)。

「知性」の本質を知るためのこの一文を注意して読むことが必要である。というのも、製作することは、裁断することに存しているとベルクソンは述べていると思われるが、わたしたちには、製作する、すなわち、作りあげるはたらきと、裁断する、つまり、作りあげるという目的を持つとはいえ分断するはたらきの間には、違いが見出せるからである。この一文は製作という作り上げるはたらきと、裁断するという分割するはたらきを、分けることが作ることの本質であると述べることによって、作るはたらきの一部として内包させている文章になっている。この文章は、言い換えるとすれば、次のようになるだろう。

製作するためには、ある素材から対象の形を裁断することから始めなければならない。

つまり、裁断するということは製作するということの一部でしかない、ということになる。しかし、これまで見たように、ベルクソンは作りあげるはたらきを分けるはたらきとは別なものとして区別して考えている。ベルクソンはこの「製作」について述べた (EC, 156) その直後で、「獲得されるべき形」が重要であると続けて述べる (*Ibid.*)<sup>1</sup>。このように「形」 (*forme*) を重要だと見做すことは、これまで見て来たところによれば、わたしたちの知性のはたらきを対象そのものから切り離し、流動的なものを固体の形式 (EC, 166) の下で捉えさせるものとなっている。また、ある素材から裁断するということのうちにはすでに、その「素材」からすれば、すでにあったものからわざわざもう一度作り直すということを意味する (手触りのよい思い入れのある毛布は、手触りのよい思い入れのある袋にも、雑巾にもなる)。素材を中心に述べれば、それはかたちがいくら変わってももともとあったものを再構成しているにすぎない。これは「創造」と「製作」とが異なる点であると思われる。すなわち、「製作」というはたらきは、「新しさ」をそもそも伴わないものとして、ベルクソンによって定義されているということになるだろう。従って、ベルクソンが「知性」の本質を「製作」に関するこの命題で定義したことによって、ベルクソンの「知性」についての考察の方向は決められてしまっていたということになるだろう。また、この「製作」についてベルクソンが述べている「形」と「素材」との区別、即ち「形相」と「質料」とを区別することができるという点は、この命題を提示した後に引き続いてベルクソンが行なう「語」の「動性」についての考察、及び「再構成」についての考察、そして「生命」を把握することの不可能性の考察に寄与していくのである。

ベルクソンの「知性」についての考察はこの「製作」としての「知性」の定義、及び、ここ

においてみられる「質料—形相」論に根を持つ。次節では、このように定義される「知性」と対立し補足し合う「本能」とはどのように対立し・補足し合うのか見て行くことにする。次節でも、わたしたちは「本能」にできること、及びできないこととして、ベルクソンが述べることに注意したい。その上で、わたしたちは上記見たような、そこから始めなければならないという意味での「原初的」な命題を、「本能」についてもまた探し当てることにしたい。

#### 4 「本能」の定義、あるいは「共感」

『進化』第二章で、ベルクソンは「共感」について考察する。わたしたちは本論文の第四章で『直接与件』のなかでスペンサーとのものと比較されて論じられていた「共感」概念について、スペンサーとの比較を通じて考察を加えた。わたしたちにとって重要だったのは、スペンサーも「共感」について論じており、「優美」について論じるための議論の枠組みとしてベルクソンに影響を与えている可能性があると思われる、ということだった。両者とも「優美」を論じるのに、「共感」と「喜び」についてともに論じていたのだった。この『進化』第二章でベルクソンが述べる「共感」はわたしたちが『直接与件』でみたものとは異なり、「本能」と関連づけて論じられる概念である。ベルクソンは次のように述べている。

「しかし、困難はすべて、膜翅目の知を知性の言葉で翻訳しようとするところから生じる。そのとき、わたしたちはジガバチを昆虫学者と同一視せざるをえない。昆虫学者は、他のすべてのことがらを知る仕方で、つまり、外側からアオムシの知識を得るが、このことに生死に関わる特殊な利害が伴うわけではない。それゆえ、ジガバチは、昆虫学者と同じ方法で、アオムシの神経中枢の位置を一つずつ学習しなければならないだろう。少なくとも、針の効き目を試して、これらの位置について実践的な知識を獲得しなければならないだろう。しかし、ジガバチとそのいけにえの間にある共感（共に苦しむという語源的な意味での *sympathie*）を、アオムシの傷つきやすさについて、いわば内側から教えてくれるような共感を想定すれば、事情はもはや同じではないだろう。この傷つきやすさについての感情は、外的な知覚に何一つ負うところはなく、ただジガバチとアオムシが向かい合っただけで生まれるだろう。このときそれらは、二つの有機体ではなく、二つの行動性とみなされる。この感情は、両者の関係を具体的な形で表わしているだろう。たしかに、科学の理論はこの種の考察に訴えることはできない。科学の理論は、有機的組織化の前に行動を置いてはならないし、知覚と知識の前に共感を置いてはならないのだ。もう一度言うと、こうしたことと哲学は無関係であ

るか、あるいは、哲学の役割は科学の役割が終わったところから始まるのである」(EC, 174-175)。

ここで論じられていることで『直接与件』の主題と異なっているのは、『直接与件』では「共感」と「喜び」とが結びつけられて論じられていたのに対して、ここでは、「共感」を「苦しみ」と結び付けて考察しているということである。この箇所では「ジガバチ」と「アオムシ」との関係において共有される「苦しみ」としての「共感」が論じられている。そして、それらが「昆虫」であるということも『直接与件』でわたしたちがみた議論とは異なっている。また、わたしたちは、「恐怖」の概念が『直接与件』でスペンサーとの比較を通して考察されていることも見たが、ここでは、ベルクソンではなくスペンサーが用いていた設定、すなわち「獲物」と「敵」の構図を、ベルクソンが用いていることがわかる。スペンサーは、一つの出来事のうちにある二者に発生する感情が、「恐怖」と「怒り」であるとし、その両者の感情は「行動」の経験から生じるものであることを述べていた(本研究第五章参照)。したがって、ベルクソンに従えばそれらは「外的な知覚」とともに生じる感情であるため、ここでこの「共感」という理解に対して、スペンサーが考えていた「恐怖」と「怒り」の構図が影響を与えているとは考えにくい。しかし、「恐怖」と「怒り」では説明できない「共感」がここでは述べられているため、スペンサーにおける感情(feelings)の考察が、ベルクソンの思考に幾分かの示唆を与えた可能性はあるとは考えられる。

以上のようにベルクソンが述べる「共感」は、知性的な存在であるわたしたち人間にも備わっているものであることが以下のように述べられる。

「しかし、知性の領域に属していないからといって、本能が精神の限界の外に位置していることにはならない。感情的な諸現象において、反省されざる共感や嫌悪において、わたしたちは自分自身のうちで、本能によって行動する昆虫の意識に起こっているにちがいないものの何かを、より漠然としていて、知性があまりにも染み込んだ形態のもとにであるとはいえ体感している」(EC, 176)。

わたしたちが持つ「共感」は、わたしたちが『直接与件』で考察した「未来の予告」に関連づけられる「共感」である。



「アオムシの神経系の発生となって現れている力がどのようなものであれ、自分の眼と知性をもってする場合、わたしたちは、神経と神経中枢の並列としてしかその力に達することができない。たしかに、わたしたちはそのようにして、その力の外的帰結の全体に達する。ジガバチもそれについて、ほんのわずかなこと、まさに自分と利害関係のあるものしか、おそらく把握していないだろう。けれども、少なくとも、ジガバチは、それを内側から、認識過程とは全く違った仕方、ある直観(表象されるというよりもむしろ生きられる直観)によって把握する。この直観は、わたしたちにおいて予知的な共感とよばれるものにおそらく似ているだろう」(EC, 176-177)。

この「本能」及び「共感」は「生命」のはたらきをわたしたちに認識させることができるものであることが次のように述べられる。それは「知性」には出来ないということについては、わたしたちは前節で確認した通りである。

「本能とは共感である。もしこの共感が対象を拡張し、自分自身についても反省できるなら、生命の諸々の働きについての鍵をわたしたちに渡してくれるだろう——知性が発達し矯正されたなら、わたしたちを物質のうちへと招き入れるのと同様に」(EC, 177)。

「なぜなら、何度言っても繰り返し過ぎにはならないと思うが、知性と本能は相反する二つの方向に向けられているからだ。知性は不活性な物質へと、本能は生命へと向けられている」(Ibid.)。

「知性が、自分の作品である科学を介して、徐々に完全な形でわたしたちに引き渡すことになるのは、物理的な働きの秘密である。生命について知性がわたしたちにもたらすのは、不活性なものの言葉で翻訳したものだけだ。もっともそれしか与えるつもりはないのだが。知性は周りをくるくる回って、この対象について、外からの視点を出来る限り増やし、この対象を自分のうちに引き込むが、この対象のうちへ入ることはない。それに対して、直観はわたしたちを生命の内部そのものに導くだろう。直観、すなわち、利害を離れ、自分自身についての意識を持ち、対象について反省しそれを無際限に広げることができるようになった本能は」(EC, 177-178)。

本研究で扱った『直接与件』における「優美」の概念についての議論を想起させるが、わたしたちに「美的能力」が備わっていることが、「共感」や「直観」の存在を示していることを、ベルクソンは次のように述べている。

「この種の努力が不可能ではないことは、人間のうちに通常の知覚の他に美的能力が存在することですでに証明されている。わたしたちの眼は、生物を特徴付ける諸々の線が並んでいることには気づくが、それらが互いに有機的組織化していることには気づかない。生命の意図、つまり諸々の線を横切って走り、それらを結び付けそれらに意味を与える単純な運動は、わたしたちの眼から逃れ去るのである。芸術家が、ある種の共感によって、対象の内部に身を置き直し、直観の努力によって、空間が彼とモデルの間に置いた障害を下げながら、再び把握しようとしているのはこの意図なのである。確かに、この美的直観は、外的知覚と同様、個別的なものにしか辿り着かない。しかし、物理的科學が外的知覚によって記された方向を最後まで辿って、個別的な諸事実を一般的な諸法則に延長すると同様に、芸術と同じ方向に向けられ、生一般を対象にするような探究を考えることができる」 (EC, 178)。

『直接与件』における「優美」と関連する「共感」について想起させるとしても、ここで論じられていることは区別される二者の間で生じる「共感」である。つまり、『直接与件』では「主体の交替」が起きているかのようだと言っていたような「共感」ということで語られる二者の内一方に主体を置いた議論をしていない、ということである。ここでは二者が「芸術家」と「対象」として設定されており、もちろん「芸術家」「が」共感するのだとしても、ここでは「主体」が論じられることはない。ここには「ジガバチ」と「アオムシ」との関係で「共感」を考察するという問題設定が引き継がれていると思われる。そして、ここには、また、「知性」と補足し合う「本能」としての「共感」をこそ示したいというベルクソンの意図が見られるように思われる。

「共感」をこそ示したいという意図があるように思われるというのには次の理由がある。ベルクソンが「知性」を「製作」であるとして定義していたことは前節で確認した。この定義がベルクソンによる「知性」に対する原初的な定義であると思われた。「知性」についてのこの定義に対応した、「本能」の定義は以下の定義であると思われる。この以下の定義が、「本能」の考察に「直観」についての考察及び「共感」への連結を可能にしているとも思われる。

「本能は生命の形式そのものに合わせて象られている」 (EC, 166)<sup>2</sup>。

「本能」に関して言えば、わたしたちは「質料」と「形相」とを分けて生命を捉える必要がなく、あるいは、そういうことが出来ない生命を捉えるのに適しているものとして定義づけられている。このように「生命の形式そのもの」に合わせて「本能」が象られていると述べた上で、なお、なぜ上述した二者の関係における「共感」をも「本能」の定義に含めようとするのか。あるいは、なぜそれがそのまま象られているという「生命」と無媒介的に関連づけようとするのか。それは、ベルクソンが「補足性」という概念に基づいて行なおうとするところにその理由があると思われる。この「共感」について考察するこの節で引用した文章のなかで、「知性」に関連づけて述べられていると思われるのは、「知性」は諸々の「位置」を把握すること、「並列」について認識することである。つまり、「知性」は、「位置」や「併置」とそれに関連付けられる「共存」を認識させるものとして、ここでは扱われているということになるだろう（わたしたちの眼は、生物を特徴づける、諸々の線が並んでいることには気付く）。この「知性」に対して、ベルクソンは、「本能」及び「共感」の概念を定義するのにも、その「知性」の定義と「補足し合う」形でそれを行なわなければならないはずだからである。

すなわち、「知性」が二つを二つとして区別するとともにそれを二つのものとして「2」という一つの概念のもとに把握するはたらきのように、「本能」あるいは「共感」の概念にも、知性とは別の仕方、二つに区別されるものを二つのものとしてその複数性を捉えるとともに、その複数性とも認識できるとしても、単数的に一つのものとして把握する仕方があるはずだと考えられたのではないか。「知性」と「本能」・「直観」・「共感」には、それぞれ「多」でありつつも「一」であるところのものが、それぞれの仕方、捉えられていると考えられるはずなのではないだろうか。それが、わたしたちが前節と本節で見て来た「質料」と「形相」を用いた定義から引き延ばしてベルクソンが「共感」について述べる理由なのではないだろうか。直観と生命についてベルクソンは次のように述べている。

「このようにして直観は知性に、生命が完全には「多」のカテゴリーにも「一」のカテゴリーにも入りはしないこと、機械論的因果性も合目的性も生命の過程について十分な翻訳を与えないことを認めさせようだろう。次に直観は、それがわたしたちと他の生物の間に立てることになる共感的伝達によって、また、わたしたちの意識を膨張させることによって、わたしたちを相互浸透、無際限に続けられる創造という生命固有の領域に導き入れるだろう」 (EC, 179)。

「直観」が「知性」に何かしらを認めさせることができるためには、それによって認めさせることができるような何らかの方法が存在しているのではないか。「生命」が「一」や「多」という概念で説明できないものであるなら、知性ではそれを十分には把握することはできない。しかし、それと相補う仕方を持つ「共感」・「直観」でなら、それを把握することができるのだと、ベルクソンは「補足」という概念を十分に駆使して、わたしたちに「本能」「直観」そして「共感」のはたらきについて整合的に語っていると思われる。

## 5 本章のまとめの考察

「知性」と「本能」をそれぞれ分有しているわたしたちにおいて、「知性」と「本能」とは分断されて相容れないものなのだろうか。ベルクソンの議論に従えば、「知性」と「本能」を象徴的に表現している「脊椎動物」と「節足動物」が根源において同一なものであるならば、わたしたちに分有されているその不可分な全体性の不可分な部分とも言えるような「知性」と「本能」のつながりは、どのような身分のものとして存在し得るのか。本章のベルクソンの議論にしたがうと、それは「本能」を「共感」であるとするその議論のなかに、わたしたちがそのつながりを見出すヒントがあると思われる。というのは、「知性」と「本能」は相携えて発展していくものであると言われているのであるし、次の章で確認することになるが、わたしたちの「知性」は「製作」であり、「空間性」を目指している努力であるとされるからであり、これらの概念が前提にしており、その概念によって可能にもなるものが「共同性」あるいは「共存」という概念であるからである。「共感」との関係について言えば、わたしたちがもし「共感」することが出来る生き物であるとするならば、そこには複数性が認識されていなければならない、ということである。そして、複数性が認識されているからこそ、わたしたちがもつ能力としての「共感」には意味があると言えるだろう。わたしたちに「不可分な」「全体」の部分である「不可分な」「部分」を把持させるもの、それが、本能においては「共感」であり「知性」においては「共存」そして「空間性」の概念であると思われる。前章で、「類似性」と「補足性」の概念の違いを考察したときにも述べたが、「補足性」はある全体を構成する成員がその全体の性質を分有することで、全体の性質を相補い、その全成員によってその全体の性質を実現するということであった。「多」と「一」とをひとまとまりに関係づける仕方としての「知性」における「共存」と、「本能」における「共感」とは、「知性」と「本能」とが、「不可分な」「部分」という身分において「補足し合う」その仕方を表現しているものと思われる。ここに、わたしたちは

ベルクソンにおける「全体」と「部分」という関係に従った議論の帰結と意味を見出す。そして、スペンサーとの関係で言えば、スペンサーは「運動」を「共感」、「努力」の概念を使って論じていたことを本研究の第四章で先にみたが、その「共感」理解は、「知性」以外の能力によって捉えようとされている点においてはベルクソンに引き継がれていると思われる。ただし、『進化』第二章の議論から分かるのは、そこに「知性」と「直観」とを区別して論じる道を開けば、スペンサーが言おうとしていた「優美」の概念にしる「運動」の概念にしる、より豊かに語る事ができたということである。

---

<sup>1</sup> « Ce qui importe avant tout, c'est la forme à obtenir. »

<sup>2</sup> « C'est sur la forme même de la vie, au contraire, qu'est moulé l'instinct. »

## 第八章 『創造的進化』を読み直す スペンサー批判の観点から

### (3)

#### ——スペンサーを補足する

##### 本章の検討課題

『進化』第三章は、『進化』のこれまでの議論を踏まえて、人間がどのように生み出されて来たか明らかにする役割を担っている。わたしたちは前章で『進化』第二章の「製作」に関するベルクソンの考察を扱った。そこでは、わたしたち人間とは何よりも製作する存在であるとされており、製作するということで、わたしたちが知性的な存在であるということが示されている。人間がこのようなものとして定義されるのであれば、人間がどのように生まれて来たかは、知性がどのように発生したかを追求することによって明らかにすることができる、と言える。ベルクソンが『進化』第三章において、知性がどのように発生したのかを明らかにしようとするのには、このような理由があると思われる。『進化』第四章に関しては、その最終節でスペンサーについて述べられていることに対して考察を加えることがわたしたちにとって重要である。『進化』第四章については、『進化』第三章に対する考察に続いて扱う。

#### 1 知性の発生

ベルクソンは、『進化』第三章の冒頭で次のように述べている。

「物体の発生と同時に知性の発生 (*une genèse de l'intelligence*) を試みる時が来たことになるだろう。わたしたちの知性の主要な線が、物質に対する行動の一般的な形式 (*la forme générale*) を描いていて、物質の詳細は行動の要求に従っているというのが真実なら、これら二つの発生の試みは明白に相関的なもの (*corrélative*) である。知性性と物質性の詳細は、互いに適応することで構成されたのだろう。どちらも、より広くより高い一つの存在形式 (*une forme d'existence plus vaste et plus haute*) から派生するだろう。まさにそこに知性性と物質性を置き直して、両者がそこから出てくるのを見なければならぬだろう」 (EC, 187-188)。

このように述べて、ベルクソンはこの章で知性の発生がどのようになされるかについて論じていく。ベルクソンは、「より広くより高い一つの存在形式」から知性及び物質性が派生すると述

べる。ベルクソンは自分の知性発生論を述べる前に、この知性の発生という問題意識がスペンサーにも共有されていたことを述べる。この引用箇所には引き続きかたちで、ベルクソンはスペンサーに言及する。

#### 1-1 スペンサーへの言及

知性がどのようにして発生したかという問いがなされるとき、わたしたちは人間の知性を動物の知性が発達したものだと考え、そのうえで、それに答えようとすることがある。わたしたちがこのような考え方をとるとき、わたしたちがおこなっているのは「人間の知性を動物の知性によって説明することは、単に人間の萌芽を発達させて人間にする」ということであるとベルクソンは述べる (EC, 189)。ここでは、「ある一つの方向が、より知性的になっていく存在によって、いかにしてより遠くまで迎られたかが示されているのである。しかし、この方向が措定されている以上、知性は与えられている」 (Ibid.)。ここで「知性は与えられている」 (on se donne l'intelligence) というときの、「与えられている」 (se donner) は、「生み出している」 (engendrer) (EC, 188) の対義語として使われている。つまり、「与えられている」とベルクソンが述べる際には、それは発生を説明しないという意味で使われており、既にわたしたちが手にしているものによって説明することは、発生したものによって発生自体を説明することになるという論点先取に陥っているという点に注意を促しているものと思われる。この文脈で、ベルクソンはスペンサーの思想に言及する。

「スペンサーが展開するような宇宙発生論 (une cosmogonie) においても、知性は与えられている。それと同時に物質が与えられているように。物質は諸法則に従い、対象 (objet) 同士、事実 (fait) 同士は一定の関係によって結ばれていて、意識がこれらの関係と法則の刻印を受け取っていることが示されるのだが、かくして意識は自然の一般的な形状 (configuration) を採用して、みずからを知性として規定する。しかし、対象と事実を措定する (poser) や否や、知性を想定することになるのが、どうして分からないのだろうか」 (EC, 189)<sup>1</sup>。

ベルクソンが「対象と事実を措定するや否や、知性を想定することになる」と言う理由はどこにあるのか。ベルクソンが「対象」 (objet) について述べている文章を考察し、それについてみていくことにする。



「わたしたちの知覚 (perception) は、事物そのものの素描よりも、その事物に対するわたしたちの可能的な行動 (action) の素描を与える。わたしたちが対象 (objet) に見つける輪郭 (contour) が示しているのは単に、その対象のうちで到達できるもの、変化させることができるものでしかない。わたしたちは、物質を横切って諸々の線が引かれているのを見るが、これらの線上をわたしたちは移動するよう促されている。意識の物質に対する行動 (action) が準備されるに従って、つまり、知性が構成されるに従って、これらの輪郭 (contour) や通路は強調されていった」 (EC, 189-190)。

ベルクソンが述べるところによれば、わたしたちが「対象」を認めたときには、そこには「輪郭」に対する「知覚」がある。その「対象」の「輪郭」はわたしたちの可能的な「行動」を示している。「行動」がそれに向けて (sur) 準備されるに従って、その「輪郭」は強調されていくことになる。この一連のプロセスが、知性が構成されるプロセスであるとベルクソンは考えている。これが、「対象」を措定するや否や「知性」を想定することになるとベルクソンが述べる理由となっている。この箇所に従えばわたしたちの「知覚」がもっているはたらきが、わたしたちに「知性」のはたらきをもたせているということになるだろう。いったん、このように知性が構成されていくプロセスができてしまえば、「判明な概念」及び「互いに外的な対象」に至るまで、自動的に知性は発展していく。そのさまを、ベルクソンは次のように述べている。

「知性は、最も低次の形態 (forme) においても、すでに物質を物質に作用させようとする。物質 (matière) が何らかの側面で、作用を及ぼすものと及ぼされるものへと、もっと単純には、相異なるものとして共存する (coexistant) 断片へと分割されることに適しているなら、知性はこの側面から物体を眺めるだろう。そして知性は、分割に専念すればするほど、ある物質——おそらく空間性をめざしてはいるが、依然としてその諸部分は相互内含、相互浸透の状態にある——を、空間内で、ある延長と他の延長との併置という形式で展開することだろう。精神をしてみずからを知性において、つまり判明な概念のもとにあるものとして規定させるに至る運動によって、物質は互いに外的な対象へと分割される。意識が知性化するに依じて、物質は空間化する。つまり、進化論哲学が空間内で、わたしたちの行動がやがて迎えることになる線に従って切り分けられた物質を表象するとき、この哲学は、知性を生み出すと言っていたのに、前もって、できあがった知性を措定しているのである」 (EC, 190)。

わたしたちにとって重要な点を取り出そう。進化論哲学が「わたしたちの行動がやがて迎えることになる線に従って切り分けられた物質を表象する」とすれば、それは切り分けられる前の物質を考察することなく物質を表象することであり、ベルクソンの先の考察では知性が構成されていくにつれて強調されるものであるのだから、そして知性が低次から発達して到達していく「空間内で」表象するというのだから、それは「出来上がった知性を想定している」ということになる。

ベルクソンのスペンサーへの批判はこの『進化』第三章では、専らスペンサーの知性発生論は失敗だったというものである。それも、結果で原因を再構成するというような論点先取によって知性の発生を説明している点で失敗であると述べている。このように失敗する原因を、ベルクソンは次のように述べている。

「これらの思弁の底には二つの（相関的、補足的な）確信がある。自然は一つ (une) である、知性の機能はそれ全体 (entier) を把握することである、との確信が。認識能力は、経験全体 (totalité) と外延が同じであるとすでに想定されているので、それを生み出す (engendrer) ことはもはや問題になりえない」 (EC, 191-192)。

認識能力が経験全体と外延が同じであると想定することは、「知性の発生」を明らかにするのに論点先取に陥るだけでは済まされない。それは、哲学をどのようなものとして考えるかというその考え方にも現れるのだという (EC, 192)。つまり、ベルクソンが言うのは、「知性の発生」をどのように捉えるかということには、わたしたちの哲学の営みに対する考え方を左右するほどの重要性を見て取っているということが示されているだろう。

わたしたちは、「意識の物質に対する行動が準備される」ことと「知性が構成される」ことが同義であることを先に確認した。しかし、これでは「知性の発生」について十分な考察をしたということにはならないだろう。わたしたちは、スペンサーの知性発生論についてこのように述べるベルクソン自身の知性発生論とはどのようなものであるか明らかにしなければならぬ。

## 1-2 ベルクソンの知性発生論

先に、「知性の発生」についての考え方は、哲学に対する考え方も左右するものであると考

えられていることを示した。ベルクソンは、ベルクソン自身が持っている哲学の営みに対する見方を次のように言い表わしている。

「わたしたちが要求する哲学は、もっと控えめなもの (modeste) で、かつ、補足 (se compléter) 、改良 (se perfectionner) が可能な唯一のものでもある」 (EC, 192) 。

後にわたしたちは知ることになるであろうが、ベルクソンがここで述べる「控えめ」という言葉は、謙虚さを単に表現しているのではない。哲学を「補足」し「改良」することができるという意味でベルクソンが述べる「控えめさ」には、それによって少なくともスペンサーの哲学を新しくしようという意志が含まれていることをわたしたちは理解することになるだろう。しかし、ここではベルクソンが哲学について述べる箇所では「知性の発生」に関することがらに注意を向けよう。ベルクソンは次のように述べる。

「ある恵み多き流れ (fluide) がわたしたちを潤しており、そこでわたしたちは働く力、生きる力そのものを汲み上げる。わたしたちが浸っている、この生命の大洋から、わたしたちは絶えず何かを吸い上げている。わたしたちは、自分の存在が、少なくともそれを導く知性が、そこで、ある種の局所的な固形化 (une espèce de solidification) によって形成されたのを感じる。哲学とは、全体へともう一度みずからを溶かし込む努力以外のものではありえない。知性は、自分の原理に吸収されながら、自分自身の発生をもう一度逆の方向から生き直すことになるだろう」 (EC, 192-193) 。

ベルクソンはこのように述べて、わたしたちの知性がそのままわたしたちの存在であるという考えからわたしたちを引き離す。わたしたちは、そこから力を汲み上げる「流れ」に関連づけられつつ、「知性」が「ある種の局所的な固形化によって形成された」に過ぎないことを感じるという。「知性の発生」に関して言えば、「知性」はわたしたちが浸されている「流れ」の「ある種の局所的な固形化」によって生じたとベルクソンは述べている。しかもこのように知性が発生することは、知性と流れの断絶を生むものではない。

「わたしたちが示したように、知性はより広い実在から浮かび上がり離れていったが、それらの間にはっきりとした断絶が存在したことは一度もなかった。概念的思考の周りに、その

起源を思い起こさせる漠たる量がまだ残っている。さらに、わたしたちは知性を、濃縮によって形成されたであろう硬い核に譬えた。この核はそれを取り囲む流体と根本的に異なっているわけではない。この核がそこに再び吸収されるとしても、それは両者同じ実質からできているからでしかない」 (EC, 194)。

哲学は、「不活性なものと生体との間に境界線をひき」、生体に対して特別な態度をとり、実証科学とは違う眼でそれを検討しなければならないことを理解し、経験の領域に進入する、という (EC, 199)。それによって「科学、認識論、形而上学」は同じ領域に導かれることになる、という。

「行動」 (action) を中心に考えることは、ベルクソンに従えば「経験の領域に進入する」ということである。「絶対的なものの中で、わたしたちは存在し、動き回り、そして生きている」 (EC, 200) とベルクソンは述べる。「行動」を中心にした「経験」の領域について考察することが重要であるのは、ベルクソンがこの確信に基づいているからだと言えるだろう。

「物質は知性に合わせられており、また、物質と知性の間には明白な一致が存在する以上、一方を生み出すときには、必ず他方をも発生させることになる。同一の過程が、知性と物質を同時に、それら両方を含んでいたある生地から切り取らねばならなかったのである。わたしたちは、純粋な知性を超越する努力をおこなうのに応じて、この実在の中により完全に再び身を置くことになるだろう」 (EC, 200-201)。

ベルクソンが述べるのは、努力をしてみると、知性と物質が同時発生したことが分かるということである。続けてベルクソンは知性と物質性について述べるので、わたしたちもそこに注意を向けることにする。そして、わたしたちは「知性の発生」について考えるために、ベルクソンは時間に関する諸概念に依り頼んでいることを見ることになるのである。

### 1-3 「精神性」と「物質性」

ベルクソンは知性と物質性の関係を考えるにあたって、わたしたちの精神が最も緊張したときに見出す「純粋持続」と、それとは対照的に最も弛緩したときに見出す物質性に限りなく近づいた精神性をまず考えている。それは、わたしたちが先ほど確認したように、「流れ」の「固形化」が知性の発生に関与しているからであると考えられる。「純粋持続」についてベルクソン

は次のように述べている。

「そこで、わたしたちが有する、最も外部から切り離されていると同時に最も知性性が浸透していないものに集中してみよう。わたしたち自身の最も深い所で、わたしたちが最も自分自身の生の内側にいると感じる点を探してみよう。そのとき、わたしたちは、純粹持続 (la pure durée) に再び身を浸す。その持続では、常に前進する過去が、絶対的に新しい現在によって絶えず増大していく。しかし、同時に、わたしたちの意志のばねが極限まで緊張するのをわたしたちは感じる」 (EC, 201)。

ベルクソンは、わたしたちに自らを外部から切り離して考えさせるときに、時間様相を示す概念で語り始める。また、時間様相を示す概念によって考えるときに、わたしたちは意志の緊張を感じる、という。その考えはわたしたちの意志の有り様も変化させるものであることが述べられている。これが、ベルクソンが先ほど述べていた知性と実在のつながりを示すものであると思われる。ここで詳細に述べることはできないが、わたしたちがそれを考えるときに意志の緊張を要する思考であるならば、それはわたしたちの実在に即した思考であると考えられていることになるだろう。

差し当たり、わたしたちにとって重要だと思われる点は、「知性の発生」を辿るためにはベルクソンが知性から最も遠いところから論じようとした時に必要としたように、時間様相を示す概念を使って考察せざるをえなくなるという点だと思われる。緊張する場合とは反対の、弛緩する場合に生じることもまた時間様相を示す概念を使ってベルクソンは次のように述べる。

「今度は、みずからを弛緩させ、過去を可能な限り現在に押し込む努力を中断してみよう」 (EC, 201-202)。

このように「純粹持続」とそれともなう「緊張」、それに対する「弛緩」と物理的な存在が傾いている方向 (EC, 202) とは、次のような仕方で移行可能になるという。

「したがって、一方で『精神性』の底に、他方で理智性を伴った『物質性』の底に、反対の方向を持つ二つの過程 (processus) が存在することになるだろう。そして、これらの過程の方向を逆転させることで、あるいは、おそらくは単に過程を中断することでも、『精神性』の

底にある過程から『物質性』の底にある過程へ移行するだろう」(EC, 202)。

「精神性」と「物質性」の底にある「過程」は、先ほど緊張と弛緩とで表現されていた箇所に従えば過去と現在との関係によって表現されるものである。すなわち「精神性」においては過去が現在に進入する際に発生する「過程」であり、「物質性」においては過去が現在に進入するのが「中断」される際に、これは「逆転」と同じ意味であるとされる(EC, 202)のだが、その際に発生する「過程」である。すなわちこの「過程」という概念は、時間様相をあらゆる概念が用いられることによって可能になる概念である。すなわち、このように「精神性」と「物質性」の間にとりもたれるつながりがあることを述べるためには、ベルクソンは「時間」を表現する概念を必要としていたということである。そして、この時間様相を表現することは、いずれ「空間性」という概念を実現するに至る「知性」のその「発生」を説明することに繋がっている。「時間」様相を表わす概念によらなければ「知性の発生」は説明することは不可能であり、逆説的に思われるとしても「時間」は「知性の発生」の条件であるとされていると考えられる。

## 2 知性発生論と「共存」の概念

これまで本章でおこなってきた考察を整理すると次のようになる。

わたしたちは『進化』第三章でベルクソンがスペンサーを明示的に批判している箇所を確認した。そこでおこなわれていたのは、スペンサーは、既の実現されている知性によって知性の発生を説明しているという所謂論点先取に陥っている点に対する批判であった。ベルクソンが述べていたのは、わたしたちが辿ることになる線にしたがって分割された物質を表象するという作業は、その分割をおこなうことがそもそも知性のほたらきであるのだから、それによって物質を表象するというのは結果によって原因を説明していることになり、論点先取になる、ということである。わたしたちは「物質の発生」を知性によって理解するのではなく、「物質の発生」とともに「知性の発生」が生じるさまを捉えなければならない。それは知性とも物質とも異なる、緊張と弛緩という意志のありかたと連動している「時間」様相の諸概念によって、精神と物質を、その底にある「過程」で捉える、という仕方の説明されていた。この「過程」は、現在と過去が進行する時間として一定の「方向」を持つものであるが故に、対としての一方が「逆」になる、あるいは「中断」されるという仕方によっても、相対するものと区別され「対」になることができる、ということが述べられていると思われる。わたしたちは区別されるある二つのものが「対」であると捉えるとき、それは「方向」が単に「逆」である、あるいは「進

行」が単に「中断」される、ということによってもその「対」を「対」として捉えることができるのである。「対」は「補足し合う」からこそ「対」であると考えられていると思われる。

また、本研究にとっては、補足しあう知性と直観のその「補足」という概念が、二つの秩序の間を行き来するだけの無秩序の概念のような空虚な概念ではないというベルクソンの議論に考察を加えることも重要であろう。以下では「無秩序」という概念がどのような概念であり、それが「補足」という概念とどのように異なるか、また、「補足」し合っているという事態によって示されているのが「実在」であり、「空虚」ではないことを、ベルクソンがどのように述べているのかについて明らかにする。

「さて、ここで、二種類の秩序 (*ordre*) が存在しており、これらは類を同じくしながらも互いに対立する二つの秩序であると仮定してみよう。同じく、これら二種類の秩序のうち、一方を探して他方の秩序と出会うたびに無秩序の観念がわたしたちの精神に現れると仮定してみよう。すると、無秩序の観念 (*idée de désordre*) は、生活の日常的な実践の中で明確な意味をもつことになるだろう。精神は、必要としているのとは違う秩序、さしあたりどうでもよく、この意味で自分にとって存在していない秩序を前にして失望をおぼえる。言語の便宜を得て無秩序の観念はこの失望を客観的に存在するものに仕立て上げるだろう。しかし、無秩序の観念は、理論にとっては何の使い道もないだろう」 (EC, 223)。

「自分にとって存在していない秩序を前にして失望を覚える」さまは、ベルクソンによって二つのラケットを行き来するバドミントンの羽根としての観念であると描写されもするものである (*Ibid.*)。

「あたかもこの観念が、もはやこれらの秩序の一方の不在を無差別に表象しているのではなく、両方の秩序の不在を表象しているかのように、わたしたちはそれを扱うだろう——両方の秩序の不在などというのは、知覚されることも考えられることもないもの、単なる言葉の上での存在である——」 (*Ibid.*)。

ベルクソンは、二つの秩序を別の箇所では「生命的なものの秩序、あるいは意志されたものの秩序」と「不活生なものの秩序、あるいは自動的なものの秩序」という二つの秩序に区別している (EC, 225)。この区別される二つの秩序は『進化』第四章にも引き継がれていく主題である。

ここで確認したいのは、このように区別されているのが先にわたしたちが見たように、直観によって把握されるものであるか、知性によって把握されるものであるかという、その認識の仕方の違いによって区別されていたものだ、ということである。ここではそれを認識する認識の違いから、二つの秩序の違いへと変わっており、この秩序はわたしたちの認識に対応する「生命的なもの」あるいは「不活生なもの」のあり方といえるようなものである。そして、このように区別される二つのあり方とは別の「無秩序」というあり方は存在しないということが先に述べられていた。この二つは「補足し合う」秩序であるならば、「補足し合う」というはたらきが言わばわたしたちが持ちうる全ての秩序を示しており、その全体は唯一のものとしての実在であると考えられていることを、ここに読み取ることができるだろう。

「一般的に実在は、それがわたしたちの思考を満足させる丁度その範囲に応じて秩序付けられる。それゆえ、秩序とは主体と客体のある一致である。秩序とは、諸事物のうち自身を見出す精神なのである。しかし、精神は前に述べたように、二つの正反対の方向に進みうる。あるときは精神は自然な方向に沿って進む。そのとき、精神は、緊張という形式をまとった進展、連続的創造、自由な行動性である。またあるときは、精神はその自然な方向を反転させるが、この反転は、それが終わりまで押し進められると、伸張に、互いに外在化し合う諸要素の必然的相互規定に、つまり幾何学的なメカニズムに辿り着くだろう」(EC, 224)。

もはや実在として捉えられる諸秩序は、それらが実現している相互に補足し合うというはたらきを通して、実在それ自身がそれ自身によって変化しているというさまを表わしているであろう。実在としての二つの秩序の相互補足性は、実在内部における全体的運動として考えられるものである。

ベルクソン哲学に対するスペンサーの影響を探る本研究にとって重要であると思われるのは、ベルクソンの知性についての考察がわたしたちにもたらす「共」(co-)という概念と関連づけられる「併置」および「共存」という概念である。ベルクソンは、先ほども引用した箇所でも、次のように述べている。

「知性は、最も低次の形態においても、すでに物質を物質に作用させようとする」(EC, 190)。



この言わば相互作用性は、「相異なるものとして共存していることを示す」(Ibid.)。「知性」と「物質」との関係は密接で、「物質は知性に合わせられている」(EC, 200)と言われるほどである。

わたしたちは本研究において「共感」(sympathie)の概念に注目して考察しているわけだが、前章で論じた『進化』第二章では、「共感」の概念が「本能」と同じものであると論じられていることを確認した。その「本能」は知性的な存在であるわたしたち人間にも備わっているものであるとしても、わたしたちはまず知性的な存在なのであり、その知性は「共」(co-)という概念を通じて本能と相補うのではないかと思われる。この概念は、まさに知性の発生・物質の発生とともに自動的に措定されていくと考えられる。というのも、知性の働き及び生命の傾向は「分裂」という概念で理解されるものであり、その「分裂」は否応なく「併置」を認識させることになりそれと同時に「共存」の概念をもわたしたちに与えると考えられるからである。「共感」という概念の知性的あり方が「共存」という概念であると言えるのではないだろうか。というのもこれら諸概念はともに、区別し統一するはたらきとして理解されているからである。そして、こういったはたらきをまとった知性を備えたわたしたちが向かうのが、「社会」という、「共同性」をともなった概念で理解されるあり方である。「共同性」の概念は「知性」及び「物質」の概念把握にその基礎を持つ概念であると思われる。

### 3 スпенサー進化論批判からみた『進化』読解の帰結——『進化』第四章

ここで、これまで論じて来たことを整理する。本章は「知性の発生」と「無秩序の観念」に着目して考察してきた。本章で「知性の発生」について論じたのは、ベルクソンは「知性の発生」に関するスペンサーの考えを批判しているのだが、それでも「知性の発生」を論じること自体は重要であると考えている。ベルクソンの議論を辿って来てわたしたちに現れて来たのは知性によって知性の発生について述べるという論点先取に陥ることなく「知性の発生」を明らかにするためには、「時間」様相を示す諸概念に依り頼まなければならないということであった。「時間」を、「知性」が捉えることが不可能なものとして位置づける、つまり、時間は何か新しいものをもたらす、そして知性も一定の過程を経て創造されたものであるということを認め、「知性」と「時間」とを、互いが互いを捉えることができる関係ではない関係として位置づけなければ、「知性の発生」について述べることは不可能だったということが理解された。また、「知性の発生」を「時間」の様相を示す諸概念で説明することは、「精神性」と「物質性」との底に「過程」という「時間」様相の諸概念が区別されることによって可能になった、ある

関係性を認めることを可能にした。その「過程」によって「精神性」と「物質性」とを「時間」の諸様相によって考えることができるようになり、そこに「補足性」が認められることを示すことで、ベルクソンは、「実体」における「変化」それ自体をわたしたちに捉えさせようとしているものと思われる。「空間性」にベルクソンは「併置」を可能にする特徴をみてとっているが、その「空間性」と「物質」が担わされている「共存」可能性は対応すると思われる。もちろん「共存」の概念は歴史を持つ概念であるから、それがたとえ「空間」の概念の特徴としてスペンサーが述べていたとしても、そこにスペンサーからの影響を見て取るわけにはいかない。しかし、もし「知性の発生」を辿ることが「進化」の最たる課題であったとしたなら、そしてそれは実際に重要な課題なのだが、その「知性の発生」を「進化」とともに説明するには「共存」という概念が寄与しており、それが『思想と動くもの』で述べられていたような「時間」とは違って、ベルクソンによって批判されていない「空間」及び「物質」という概念であったのなら、わたしたちはここにも、ベルクソン哲学に対するスペンサーの影響があると言うことができるのではないかと考える。「進化」を「知性の発生」を中心に論じること、ここにはスペンサーからの影響がみられると思われる。

### 3-1 スペンサーへの言及

『進化』の最終章である第四章の最終節には「スペンサーの進化論」というタイトルがつけられている。ここでベルクソンは一つの節全部を割いて、スペンサーの進化論に改めて言及し、その進化論に見出されベルクソンにとって問題になった点をあらためて取り上げている。『進化』をその最初の章からスペンサーについての批判を鍵として辿ってきたわたしたちは『進化』の初めから頻繁にスペンサーについての言及が見られることを知っている。しかし、『進化』の第一章から第三章までのスペンサーの議論だけを見て来たのでは、おそらく『進化』第四章においてベルクソンが主張したいスペンサーへの批判の意図を汲み取ることはできないだろうと思われる。というのも、わたしたちは既に知っていることだが、ベルクソンが批判するスペンサーはベルクソンが批判するスペンサーであって、批判するために使われる諸概念にはベルクソンの議論を踏まえた上でしか理解することができないようなものが選ばれているからである。しかし、わたしたちは本章を含め本研究において、ベルクソン自身の思想についても考察してきた。したがって、本節において、わたしたちは、改めてスペンサーについての批判をベルクソンが主張したいこととあわせて理解し、ベルクソンがスペンサーの何を批判しているのかということ、そしてその批判が含意していることを明らかにすることができるだろう。

一つの節をスペンサーの進化論批判にあてているということもあり、ここで示すべきスペンサーへのベルクソンによる明示的言及は長くなる。区切りつつ示していくことにする。

### 3-2 スペンサーの魅力と問題点

ベルクソンは、スペンサーの思想のどこに十九世紀の人々が惹き付けられたのか、次のように述べている。

「十九世紀の思想が求めていたのが、恣意的なものから逃れ、個々の事実の詳細にまで降りていけるこの種の哲学であったことに疑いの余地はない。またこの哲学は、わたしたちが具体的持続と呼ぶものに身を置かなければならない、と十九世紀の思想が感じていたことにも反論の余地はない。精神科学の到来、心理学の発達、生物学の中でも発生学の重要性が増したこと、これらすべてが、内的に持続する実在、持続そのものである実在の観念を示唆していたはずである。したがって、ある思想家が現れ、ある進化の学説を発表したときには、すべての視線が彼に向けられた。その学説では、知覚可能なものへと向かう物質の進展が、合理性へと向かう精神の歩みと同時に描かれ、外部と内部の対応が徐々に複雑になっていくのが徐々に辿られた。つまり変化が諸事物の実体そのものとされるような学説であった。スペンサーの進化論主義が同時代の思想に対して発揮した強い魅力は、そこから生じている」(EC, 362-363)。

ここで「ある思想家が現れ、ある進化の学説を発表したときには、すべての視線が彼に向けられた。その学説では、知覚可能なものへと向かう物質の進展が、合理性へと向かう精神の歩みと同時に描かれ、外部と内部の対応が徐々に複雑になっていくのが徐々に辿られた。つまり変化が諸事物の実体そのものになるような学説であった」というこのことはそのままスペンサーの哲学をベルクソンがどのように読んだかを示している。本章の第一節と第二節でベルクソンによる「知性の発生」についての考察を踏まえたわたしたちは、ここでベルクソンが述べている、ベルクソンが捉えたスペンサーの学説は、もちろんベルクソンが論じて来た進化論とまったく同じであるとは言えないにしてもほとんどベルクソンが行なって来た「知性の発生」についての議論であると理解する。「変化が諸事物の実体そのもの」であるという主張は、先にもみたように、ベルクソンが「補足性」の概念を用いることによって二つの秩序を関連づけることによって、わたしたちに示したもののそのものである。だから、ベルクソンもまた、十九世紀の

人々のうちの一人として、スペンサーの学説のなかに「持続する実在の観念」をみてとり、期待をもってスペンサーを迎えたであろうことを推測することができる。ベルクソンも期待していたことは、次のようにベルクソンが述べることのうちにも現れている。

「しかし、彼はその道に入った途端、急に方向を変えてしまった。発生を辿ると約束していたのに、彼がしたのは全く別のことだった。彼の学説は確かに進化論主義という名前を持っていて、普遍的な生成の流れを遡り、そして再び降りてくると主張していた。現実には、生成も進化も問題になっていなかった」 (EC, 363)。

ベルクソンはやはり「発生を辿る」、しかも先ほどの引用文に続く文章であるので「物質」と「精神」が共に生じるその発生のことだと思われるが、それを辿るということが重要であると考えていたように思われる。そして、前節で確認したように、これは実際にそうだったことをわたしたちは知っている。ベルクソンは次のように述べて、スペンサーが「方向を変えてしまった」とベルクソンに言わせるのは、どのような意味においてかということをおわたしたちに示している。

「この哲学の掘り下げた検討に入る必要はない。単に次のように言おう。スペンサーの方法のいつものやり口は、進化し終わったものの破片を使って進化を再構成することにある。わたしがああるイメージをボール紙の上に貼ってから、ボール紙を切って紙切れにするとする。わたしはそのボール紙の破片を必要なだけ集めてイメージを再現できるだろう。子どもがジグソーパズルのピースでこの作業を行ない、ばらばらのイメージの破片を並べて、最後には色のついた美しい絵を手にするとする。その子供は、おそらく自分がその絵と色を生み出したと思うだろう。しかし絵を描き、色を塗る行為は、すでに描かれた着色されたイメージの破片を寄せ集める行為と何の関係もない。同じように、進化の最も単純な結果同士を組み合わせれば、その最も複雑な結果を何とか真似ることができるだろう。しかし、どちらの結果についても、その発生を描くことにはならないだろう。このように進化し終わったものを進化し終わったものに加えても、進化の運動そのものとはまったく似ていないだろう」 (Ibid.)。

「進化し終わったものの破片を使って進化を再構成する」ということは「生成も進化も問題になっていなかった」ということを表わしていることをベルクソンは述べている。

わたしたちはここで一つ問うことができる。「進化し終わったものの破片を使う」ということ  
によって「進化を再構成する」ことが「生成」や「進化」をとりあげ、それらを説明している  
ということができないとはどういうことなのだろうか。また、「進化し終わったものを進化し終  
わったものに加えても、進化の運動そのものとはまったく似ていない」と言い換えるようにベ  
ルクソンは述べるけれども、ここで「進化し終わったものを進化し終わったものに加えて」「進  
化の運動そのもの」と似せることが可能だと述べるということなのだろうか。というのも、ベ  
ルクソンではなくスペンサーはとにかく、それで「進化」の運動が説明  
できると考えていたからこそ進化論としてスペンサー独自の理論をつくったはずだからである。

この問いに答えるためには、わたしたちは、これまでに本研究で考察してきたベルクソンの  
「単純さ」と「複雑さ」についての議論と「知性の発生」についての考察を思い出すだけでよ  
いと思われる。わたしたちは思い出したいのだが、「単純さ」と「複雑さ」はある一つのはたら  
きの区別される二つの側面であると捉えられるもので、それは一方を他方で構成することがで  
きるような関係にはなかった。鉄くずの比喻を思い出すことができるだろうが、そこでは不可  
分で単純なはたらきの痕跡としてある一定の形に保たれた鉄くずが残されているということが  
述べられていたのだった。つまり、ベルクソンは「進化」を単純で不可分な運動として捉える  
ことができると考えていること、そして「進化し終わったもの」という「破片」になりうるも  
のは「複雑さ」のうちに捉えられるものであり、それらの「単純さ」と「複雑さ」の関係を捉  
えるために、「複雑さ」において見られる一つの「破片」同士を「再構成」しても、それは見当  
違いということになることが示された。わたしたちは「単純さ」と「複雑さ」を、「単純さ」を  
組み合わせれば「複雑さ」が構成されるという関係として対立しているに過ぎない概念である  
と捉えることもできるが、ベルクソンがこれらの概念に見出しているのはそういった意味での  
対立ではなくて、「補足し合うことが出来る」という意味での「対立」であり、一つのはたらき  
の二つの側面にあるという関係なのである。「進化」という概念に「単純さ」を結び付け、「進  
化し終わったもの」の「破片」を「複雑さ」の一部と見做しているということが、ベルクソン  
にここで「進化し終わったものの破片を使って進化を再構成している」ということを批判させ  
ており、ここには「再構成」するということがなぜ批判されるのかの理由があると思われる。  
つまり、論点先取が批判されているとともに、結果と原因との関係として捉えること自体につ  
いても、この「破片」と「進化」をそもそも結果と原因として「だけ」とらえることの不合理的  
さが指摘されているものと思われる。「進化」とその「破片」との間には、因果関係だけでは説  
明することが出来ない関係があることを、この一文は示している。

また、「進化し終わったものを進化し終わったものに加えて」「進化の運動そのもの」と似せることができないということは、先に述べた「結果」によって「原因」を再構成することが不可能であるということの言い換えでもあるだろう。ただ、「加える」という表現が見られるために、ここでは単なる言い換えであると言い切ってしまうこともできないと思われる。というのは、幾度かわたしたちは確認したが、ベルクソンにとって「進化」の「創造」のはたらきは「増大」という概念を伴いつつ「分裂」という概念によってその特徴が捉えられるものであったことを思い出すことができるからである。「進化」は「分裂」の概念によって捉えられるはたらきであるということを取り上げて、それではもともとあったものを「加える」という操作によって諸原因を組み合わせれば再び作り上げることができるかといえばそれも違うことになる。ベルクソンの議論を知っているわたしたちからすればそれは当然のことである。というのも、そこには「分裂」のはたらきをとまなう「増大」のはたらきが認められなければならないからである。要するに、ここでも「結果」によって「原因」を再構成することが不合理であることが述べられているとともに、因果関係によってだけでは進化のはたらきをとらえることができないことが示されているのである。

わたしたちは、ここに見られるベルクソンによるスペンサー批判には、「結果」によってその結果をもたらした「原因」を再構成しているという方法を指摘しているということとは別に、それらの関係を因果律で捉えられないとすれば、そこで関係づけられている「原因」と「結果」には、再構成するという事に陥らせてしまうような理解の仕方の曖昧さが見られるということ、そしてその曖昧さがスペンサーの議論の問題点であると考えられているということのみとすることができる<sup>2</sup>。

### 3-3 「変化が諸事物の実体そのものとされるような学説」

ベルクソンは続けて、スペンサーへの批判を次のように述べている。

「しかしスペンサーはそのように錯覚する。彼は実在をいまあるかたちで取り上げ、それを砕いてばらばらにし、そのようにしてできた破片を風に向かって放り投げる。次にこれらの破片を「統合」(« intègre »)し、それらの「運動を散逸」(« dissipe le mouvement »)させる<sup>3</sup>。タイルを寄せ集めて作るモザイクの作業によって「全体」を模倣した後、自分がその絵を描き、その生成を行なったと思っているのである」(EC, 364)。

これは、「実在」は「統合」されたものであり、「全体」であるということがスペンサーによってとらえられているとベルクソンが考えていることが示されている文章であると思われる。そして、描かれる「絵」には「形式」が含まれており、それを描くことが「生成」であるとスペンサーが見做していることをベルクソンは指摘していると思われる。

「ある思想家が現れ、ある進化の学説を発表したときには、すべての視線が彼に向けられた。その学説では、知覚可能なものへと向かう物質の進展が、合理性へと向かう精神の歩みと同時に描かれ、外部と内部の対応が徐々に複雑になっていくのが徐々に迎られた。つまり変化が諸事物の実体そのものとされるような学説であった。スペンサーの進化論主義が同時代の思想に対して発揮した強い魅力は、そこから生じている」 (EC, 363)。

スペンサーの「変化が諸事物の実体そのものになるような学説」だと思われた学説が、実際に「物質」と「精神」それぞれを、そして両者の関係を実際にはどのようなものとして考察していったのかを、ベルクソンは続けて述べていく。ベルクソンの議論はスペンサーの著作からの引用はないものの、具体的な主張に対して批判をするものなので、スペンサーの著作からベルクソンが批判している言明だと思われる箇所を引用し、考察を加えていくことにする。ただし、これまで見て来たことから分かる通り、ベルクソンの批判はベルクソンの考えに基づいて行なわれる批判である。したがって、スペンサーとは対照的に、ベルクソンは自分自身の立場をどのように述べているかについても併せて考察する必要がある。

ベルクソンは、スペンサーは「物質」について次のように考えていると述べている。

「物質の場合はどうだろう。彼は散らばった要素を統合して、可視的で触知可能な物体たらしめるが、これらの要素とは、彼が最初は空間中にまき散らされていると想定する、単純な物体の粒子そのものであるように思える。いずれにせよ、それらは「質点」(« points matériels »)であり、したがって不変の点、真の微小な固体である。固体性はわたしたちの最も近くにあり最も取扱いやすいものであるが、あたかもこの固体性が物質性の起源そのものにあることが可能であるかのようである」 (EC, 364)。

ここでベルクソンが述べているスペンサーの考えにあたるのは『第一原理』における次の箇所であると思われる。

「わたしたちの「物質」の概念は、これを最も簡単な形に還元するとき、抵抗を生じるところの、共存的位置 (co-existent positions) ということになる。そして、何らの抵抗を生じない共存的位置としての、わたしたちの「空間」の概念と、対照するのである」 (FP, 129)<sup>4</sup>。

「「物体」は、抵抗するところの表面によって、限定されるものであって、従って、全部抵抗するところの部分によって、出来上がっているものと、わたしたちは考える。共存の抵抗を、心の中で捨象してしまえば、「物体」の自覚は消失してしまっていて、あとに残るものは「空間」の自覚だけになってしまう」 (FP, 129-130)<sup>5</sup>。

「わたしたちは、物質の各部分は、一つの抵抗的位置以上のものを含むものと、——すなわち「空間」を占めるものと、——概念せざるを得ない」 (FP, 130)<sup>6</sup>。

「わたしたちは、その物理的、化学的、その他の探究において、「物質」を範囲あり抵抗ある原子によってなるものとして取り扱うことを避ける必要は無い」 (FP, 131)<sup>7</sup>。

ここに引用した箇所には、スペンサーが、「物質」の概念は、共存的な「位置」に還元できるものであると見なしていることが明示されている。また、「物質」は何よりも「位置」を占めるものであり、「原子」として取り扱うことができるものであることが明示されている。また、「位置」をもつ「物質」は、他との関係が前提されていると思われる「共存」的な位置をもつものであると述べられている。このように考える点を、ベルクソンは「質点」と表現したのではないかと思われる。以上に引用したスペンサーの箇所を自分の言葉で整理して、自分自身の立場をベルクソンは次のように述べて、スペンサーを批判している。

「哲学がよく知っているのは、諸事物において可視的で触知可能なものは、それらに対するわたしたちの可能的な行動を表象している、ということである。進化し終わったものを分割して、進化しているものの原理に到達することはない。進化し終わったもの同士を再び組み合わせ、進化——進化し終わったものとは進化の到達点である——を再び生み出すことはない」 (EC, 364)。

ベルクソンは「物質」及び「輪郭」のある「物体」を捉える際に、スペンサーが述べたように「固形」であることや「要素」であることに注目しそれを押し進めても、それは単に「分割」をしていくことにしか過ぎず、「分割」してもその「輪郭」は失われることはないため「物質」



が「物質」であることを、「輪郭」を持つものという仕方以外で現すことができないことを批判しているものと思われる。これまでに確認したことでもあるが、ここでも述べているようにその「輪郭」が持つ意味を「行動」という概念で現すことができるようになることで、わたしたちは「行動」という、「分割」とは表現しているものが別であるところの概念によって、「物質」あるいは「物体」を捉え直すことができるようになることが示されているものと思われる。「進化の到達点」である「進化し終わったもの」を組み合わせても「進化」を生み出すことができないということの内には、「進化」を表現するためには相応しい概念があることを示唆しているものと思われる。

ベルクソンは「物質」についてこのように述べた後に、スペンサーが「精神」について述べていることに次のように考察を加えている。

「精神の場合はどうだろう。反射を反射と組み合わせることによって、スペンサーはまず本能を、次に理性的な意志を生み出すと思込んでいる。特化された反射は、確固なものになった意志と同じく進化の終着点にあるから、出発点にあるとは想定できないということを彼は見ていないのである。この反射が意志より早く最終的な形態に到達することは大いにありえる。しかし、どちらも進化の運動が一時的に沈殿したもので、進化の運動そのものは反射との関係だけで表現できないし、意志との関係だけで表現できるものでもない。反射的なものと意志的なものの両方を混ぜ合わせることから始めなければならないだろう。次にこれら二重の形態に沈殿する流動的な実在を探しに行かなければならないだろう。この実在はおそらく両方の性質を帯びていて、いずれか一方であることはない」(EC, 364-365)。

「反射」は「意志」とともに「精神」についての考察に含むことが出来ると考えられていることを読み取ることが出来る。この「反射」を「精神」に含むことが出来ることに関しては、ベルクソンは否定的に考えてはいないことが分かる。ベルクソンがスペンサーの考えで受け入れることができないのは、「進化」は「反射」と「意志」の両方によって表現されなくてはならないということである。「本能」と「理性」という言葉もまた使われていることから、わたしたちがここで読み取ることができるのは、ベルクソンはスペンサーが使っていた「反射」と「意志」とを、「本能」と、一部の「知性」的なものとして読み替えたということ、そして、両方を混ぜ合わせたといっても良いと思われる、不可分な全体としての「生命の弾み」について述べていた、ということである。

ここでベルクソンが述べているスペンサーの考えに当たる箇所もまた引用しておきたい。それは『第一原理』における次の箇所であると思われる。

「ごく程度の低い知性の動物は、その傍らにある大きな客体が運動しているということを知覚すると、反対の運動をなして、跳躍とか逃避とかいったようなことを引き起こす。その含む所の知覚は相対的に簡単で等質的で不定限である。運動している客体は、有害であるとかないとか、或は前進しているとか後退しているとか、そんな種類についての弁別をなされるのである。 (...) より高度の段階に至ると、その逃避又は跳躍は危害から遠ざかることになる。神経の変化はずっと特定化されてその結果方向の区別が生じるのである。 (...) 更に高級なる動物においては、外敵と外敵でないものとの区別ができるようになって、例えば鳥は人間を見れば飛び去るが、牛を見ても飛び去らないというようなもので、 (...)。なぜなら、一定の分化的属性の知性が含まれるからである」 (FP, 318-319)<sup>8</sup>。

「精神」と「物質」の対応の問題についてスペンサーが述べていることを、ベルクソンは次のように整理している。

「最後に精神と物質の対応を考えてみよう。知性をこの対応によって定義する点では、スペンサーは正しい。知性にある進化の終点を見る点でも、スペンサーは正しい。しかし、この進化を描くに至るとき、彼はまた進化し終わったものを進化し終わったものと統合するが、無駄なことをしていることに気がつかない。現在では進化が終わったものの破片をわずかでも自分に与えると、現在進化し終わったものの全体を措定することになるのである。そのとき、進化し終わったものの全体を生み出していると言い張っても無駄だろう」 (EC, 365)。

わたしたちがここで思い出すことができるのは、ベルクソンが「知性の発生」を、「本能」と「知性」の補足関係について述べた第二章の後の第三章で論じていたということである。そこでも確かに「知性」を「精神」と「物質」との同時発生を説明するものとして考えられていた。そして、そこでは「知性」的である人間が進化の極点であると考えられていたのであり、ここで「知性」に「進化の終点」を見ているスペンサーが正しいとベルクソンが述べるのがベルクソン自身の議論からも裏付けることができることを思い出すことができる。ベルクソンの批判によると、やはり現在ある姿をとっているものによって、「進化」を構成しなごうという試み

がとられる限り、それは「進化」の再構成という無駄な努力になると考えられていることが読み取れる。ここでも「結果」同士を組み合わせても「結果」にしかならないこと、そして、この箇所では更にそれが例え「結果」の「全体」に及ぶものであっても、それは「結果」の全体にしか過ぎず、その全体性は「複雑」なものの全体性であって、その「原因」であるはずの「単純」なものの全体ではないということもまた言及されているものと思われる。

「実際スペンサーにとって、自然で継起する諸現象は、それらを表象するイメージを人間の精神に投影する。それゆえ現象間の関係に、対称的に表象間の関係が対応する。そして自然の最も一般的な諸法則には現象間の諸関係が濃縮しており、それらの法則はこうして思考を導く諸原理を生み出したことになる。これらの原理に表象間の諸関係が統合されたのである。それゆえ自然は精神のうちにみずからを映し出す。わたしたちの思考の内奥の構造は、一つずつ、諸事物の骨組みそのものに対応する。それは認めよう。しかし、人間の精神が現象間の関係を表象するのが可能であるためには、そもそも現象が、つまり生成の連続性の中で切り取られた判明な事実が存在していなければならない。そして、わたしたちが今日眼にしているこの特殊な分解方式が与えられるや否や、知性も現在の姿で与えられる。なぜなら知性に対して、いや知性に対してのみ、実在はこの方法で分解されるからである」(EC, 366)。

ここで述べられていることは重要であると思われる。というのも、ここでベルクソンが述べていることが、スペンサー哲学に対するベルクソンの「再構成」といった要点の理解とは別の、スペンサーの『第一原理』の全体的理解だからである。スペンサーは確かに知ることが出来ない「諸原理」を置いて、それが、わたしたちが知ることが出来る現象のうちに「関係」として生じそれがわたしたちに理解される「諸原理」の表現であるということを述べている。これがスペンサーの『第一原理』の基本的理解であり、この「諸原理」、特に「力」が原理としてわたしたちの現象界を支えていること、そして現象界で生じることはほとんど自動的に「等質的なものから異質的なものへ」、言い換えるならば「単純なものから複雑なものへ」と移行していく、それが進化であるという理解になる。このようなスペンサーの『第一原理』の基本構造に対する根本的な批判は、「人間の精神が現象間の関係を表象するのが可能であるためには、そもそも現象が、つまり生成の連続性の中で切り取られた判明な事実が存在していなければならない。そして、わたしたちが今日眼にしているこの特殊な分解方式が与えられるや否や、知性も現在の姿で与えられる。なぜなら知性に対して、いや知性に対してのみ、実在はこの方法で分解さ

れるからである」というものであろう。つまり、わたしたちは間接的にしか知ることができないものとして「諸原理」を、直接に知ることができるのは「関係」によるとスペンサーは考えたが、そもそもわたしたちはなぜ「関係」を把握することができるのかという問いを問うことが可能だと言うのが、ベルクソンが述べようとしていることだと思われる。「関係」の成立条件には、関係によって捉えるものとしてスペンサーが述べているところの「現象」、すなわち「生成の連続性の中で切り取られた判明な事実」が存在しているはずだとベルクソンは考えている。ここでわたしたちはベルクソンが「製作」の定義として考えていたことを思い出すことができる。

「さて、スペンサーの根本的な間違いは、すでに区分けされた経験を前提することである。だが、この区分けがどのようにおこなわれたかを知るのが真の問題なのである。思考の諸法則が事実間の関係を統合したものでしかないことは認めよう。しかし諸々の事実を、それらが現在わたしに対して持つ形状と共に措定するや否や、わたしは自分の知覚能力と知性的理解の能力を、それらのわたしのうちにおける現在のあり方そのままに想定することになる。なぜなら実在を区分けするのも、実在の全体の中で事実を切り取るのも、それらの能力だからである」 (EC, 367)。

「知覚能力」と「知性的理解の能力」は、「実在を区分けする」ことができ、「実在の全体の中で事実を切り取る」ことができる能力である。だから、「区分けされた経験」が前提されているとすれば、そこには既にこれらの「区分けする」能力が働いているということになってしまうということである。わたしたちは「物質」と「物体」とそれに伴う「輪郭」と「知覚」及び「行動」の関係についてベルクソンがおこなった議論を知っている。そこでもスペンサーがとった方法が批判されていたことを思い出すことができるだろう。だから、「スペンサーの根本的な間違いは、すでに区分けされた経験を前提することである」とベルクソンが述べるのが、わたしたちが既に見た議論の要約であることを理解することができるはずである。スペンサーの進化論を批判して、それとは異なるベルクソンが述べたい進化論は「真の進化論」とベルクソン自身が呼ぶものである。それは次のようなものである。

「なぜなら真の進化論主義とは、いかなる生存様式が次第に獲得されることによって、知性が構造の計画を採用し、物質が分割様式を採用したかを探究しようとするものだからである。

この構造と分割は、互いに歯車のように噛み合っていて、互いに補足し合っている (complémentaire)。それらは一緒に進展しなければならなかったのである。だから、もし人が精神の現在の構造を措定するならば、あるいは物質の現在の分割をみずからに与えるならば、どちらの場合も進化し終わったものの中にとどまっている。進化しているもの、進化については何も言っていないのである」 (Ibid.)。

ここでは、ベルクソン自身が、ベルクソンが「真」であるとする進化論を述べるにあたって最も重要だと見做しているのが、「知性」と「物質」との関係であり、それらが「構造」と「分割」の関係にあるものと言い換えることができ、そして両者が「互いに補足し合っている」ということを見出すことだと述べられている。「進化論」の究極的な主張がここにあると考えたからこそ、ベルクソンは「知性の発生」を重要な課題としていたということがここで改めて理解される。幾分繰り返しになるが整理すると、「知性の発生」を問うということは、必然的にそこでは「物質」と「精神」の対応が問題になってくること、そしてその発生と語るとすれば「時間」の諸様相を表現することができる諸概念によらなければならないことが、ベルクソンによってわたしたちに示されたことであった。

#### 4 本章のまとめの考察

ここまで、『進化』第三章と第四章で行なわれたベルクソンによるスペンサー批判をまとめた。そこでわたしたちに見えて来たものを整理しておくことにしよう。

わたしたちはまず、ベルクソンが十九世紀に生きた他の人々とともにスペンサーに魅力を感じていたことを確認した。ベルクソンたちが感じていた魅力とは、スペンサーが「物質」と「精神」の対応を辿り、「知性の発生」と「進化」について論じることができるという、「変化そのものとしての実在」を論じたいとしていたことにあった。ベルクソンは、スペンサーはそれを実現することができなかったこと、その原因には「物質」についての理解、「精神」についての理解、そして両者の対応についての理解の誤りがあったとベルクソンは考えていることが示されていた。その誤りを「結果」によって「原因」を再構成するというその仕方にベルクソンは見えてとっていたことも確認できた。

わたしたちは以上の点についてベルクソンのスペンサーへの直接的な言及から読み取ることができたのだが、わたしたちがこれらのことを読み取りその意図を理解するにあたって、『進化』第三章までのベルクソンの議論を参照しなければ理解することができないこともまた認めるこ

とができた。スペンサーを批判するその仕方は、ベルクソンが諸概念、例えば「単純さ／複雑さ」「全体／部分」といった概念をどのようなものとして理解しているか、また、これらの概念間の関係をどのようなものとして理解しているかということに基づいており、ベルクソンのその理解にしたがって、スペンサーの思想もまた批判されていることを読み取ることができた。

以上のことを確認した上で、わたしたちがこれまでの考察によってベルクソン哲学に対するスペンサーの影響として認めることができると思われるのは、先にも述べたことではあるが、「知性の発生」が進化論にとって重要であるという立場であり、それに基づいて思想を形成するという態度があるということである。そしてまた、この「知性の発生」について論じることが可能になるのは、「物質」をどのようなものとして捉えるかということに存していた。ベルクソンはこの点については言及してはいないものの、スペンサーにとって「物質」とは何よりも「共存」可能性を示していた。もちろんこの「物質」の概念理解はスペンサーにオリジナルなものではないとしても、「共存」可能性という概念を「物質」に読み取ることで「知性の発生」を論じるのに必要な一つ概念装置をベルクソンは導入している。それを「補足」するかたちで「生命」を捉えるはたらきの「直観」に「共感」という概念を連結させることになっているとすれば、ここには明示的に語られてはいないにしろ、スペンサーからの影響があると考えてもよいのではないだろうか。そして、「時間」をより細かく考察することにベルクソンがすることになったとしても、その前にスペンサーのこのような空間理解と「知性の発生」を中心にした「進化」についての学説があったとしたならば、この学説によってベルクソンの思考がある程度方向付けられ、そしてその方向は、スペンサーの思想それ自体を一つの対立項としてその対立項を「補足」するかたちで進められることになったのではないかと考えることは不自然ではないであろう。

---

<sup>1</sup> 次の箇所も参照。「フィヒテがおこなったような試みは、事物の真の秩序をよりいっそう尊重している点で、スペンサーの試みよりも哲学的であるけれども、スペンサーの試みより遠くまでわたしたちを導くことはほとんどない。フィヒテは凝縮した状態で思考を取り上げ、それを膨張させて実在にする。スペンサーは外的な実在から出発して、それを知性へと再び濃縮する。とはいえ、いずれの場合にも知性をたてることから始めねばならない」(EC, 191)。また、ベルクソンはスペンサーを扱うことに特別な理由は無いかのように次のように述べる。「スペンサーとフィヒテの教説のように——この二人の名前を先ほど挙げたのは偶偶であるが——、接触する点も共通の尺度もないように見える学説同士を比べれば、苦もなく以上のことに納得がいくだろう」(Ibid.)。

<sup>2</sup> ベルクソンは、スペンサーが「漠然とした普遍性」に基礎を置いているのを批判している (PM, 2)。

<sup>3</sup> この一文について、アルノーフランソワは『創造的進化』の編集者注において、スペンサーの『第一原理』の次の箇所を参照するように指示している (EC, 522)。« L'évolution est toujours une intégration de matière et une dissipation de mouvement »。これは『第一原理』の中における一文であるが、Émile Cazelles によってフランス語に訳された 1894 年に出版された仏訳版である。

<sup>4</sup> « Our conception of Matter, reduced to its simplest shape, is that of co-existent positions that offer resistance ; as comtrasted with our conception of Space, in which the co-existent positions offer no resistance. »

<sup>5</sup> « We think of Body as bounded by surfaces that resist, and as made up throughout of parts that resist. Mentally abstract the co-existent resistances, and the consciousness of Body disappears, leaving behind it the consciousness of Space. »

<sup>6</sup> « we are obliged to conceive every portion of matter as containing more than one resistant position ——that is, as occupying Space. »

<sup>7</sup> « We need not in our physical, chemical, or other researches, refrain from dealing with Matter as made up of extended and resistant-atoms »

<sup>8</sup> « A creature of very low intelligence, when aware of some large object in motion near it, makes a spasmodic movement, causing, it may be, a leap or a dart. The perceptions implied are relatively simple, homogeneous, and indefinite: the moving objects are not distinguished in their kinds as injurious or otherwise, as advancing or receding. (...) At a higher stage the dart or the leap is away from danger : the nervous changes are so far specialized that there results distinction of direction; (...) In still higher animals, able to discriminate between enemies and not-enemies, as a bird which flies from a man but not from a cow, (...) since cognition of certain differential attributes is implied; »

## 結論

本論文では確立すべきテーゼとして、次の中心的テーゼ A と副次的テーゼ B を提示した。

A. ベルクソンの哲学に対してスペンサーの思想は既存の研究で明らかにされてきた以上に影響している。

B. これまでなされてきた諸研究では、『思想と動くもの』の「緒論」におけるベルクソンの回顧的記述における「力学」や「究極の諸概念」及び「漠然とした普遍性」という概念がスペンサーとの思想的関係を明らかにする上で重要なものとして見做される傾向があった。しかし、スペンサーからの影響を明らかにしようとするならば、その「緒論」の記述において重要だと見なされるべきなのは「補足」という概念である。この概念を用いるという点にベルクソンの思想におけるスペンサーから受けた影響の帰結を見出すことができる。

『直接与件』の「共感」をめぐる議論を起点にして行なった『進化』の「知性」と「本能」及び「共感」についての議論・叙述によって A は確立されたと思われる。明らかにされた影響というのは次のようなものである。

本研究は、ベルクソンがスペンサーについて述べている箇所を中心に、『直接与件』について考察し、その後で『進化』全体を考察の対象にした。『直接与件』については、「優美」について考察するのに、ベルクソンもスペンサーも共に「共感」概念を用いた考察をしているという点が認められ、ここにはスペンサーからの影響がある可能性があることが明示された。ベルクソンの考察は、スペンサーが述べていた所謂身体・物理的共感を低次のものとして受け入れ、それを対立項としていわば高次の共感について考えるという仕方になされていた。『進化』を考察していく過程で明らかになったのは、進化論にとって、「知性の発生」を考察するという点は重要であるということ、スペンサーと同様、ベルクソンも考えていたということを確認した。また、「空間」及び「物質」に「共存」可能性を認めるということによって、「知性の発生」を明らかにするという試みが、スペンサーと同じ試みであることもまた明らかにした。これによって、「知性」の対概念である「共感」に「未来の予告」という「時間」に関連づけられる事象を認めていたことが、ベルクソンの独自性であったことを浮き彫りにすることにもなった。これらの考察を経て、『直接与件』における「共感」をめぐる議論では、そこにスペンサー



の影響がある可能性をわたしたちに認めさせるに過ぎないものであったが、「共感」についてより限定的に考察していった痕跡を辿ることによって、スペンサーからの影響をわたしたちに更に認めさせるものになっていたことが認められた。『進化』において、「真／偽」といった対概念を用いつつ、スペンサーの議論の枠組みを「偽」なるものとして引き受け考察することが、対としての相手を補足した上での高次、あるいは、真なる理論になると考えるベルクソンの独自性も明らかになった。このように考察を進めるベルクソンの思索には、補足関係に自らの思索をも位置づけたという意味でスペンサーの思想の枠組みを積極的に引き受けたという独自の哲学的態度が見られること、そこにはスペンサーからの影響を積極的に引き受けた痕跡が認められることが明らかになったと思われる。

本研究は、ベルクソンの回顧的著作である『思想と動くもの』を論証の起点にはしなかった。『進化』をも起点にしていない。本研究が起点に置くことになったのは『直接与件』におけるスペンサー批判であり、それを補足する諸講義録におけるベルクソンの言明であった。この選択は、公刊された順にベルクソンのスペンサー批判を扱うことを可能にし、それによってこそ、ベルクソンが初期にスペンサーと問題意識を共有していたと思われる「共感」を巡ってたどった道に着目することを可能にした。そこに現れたのは「共感」という概念の深まり、言い換えるならば、「共感」概念を成立させるわたしたちのうちで同時に理解されている「共存」（「共同性」と言っても良いだろう）についての考察が「知性」批判として発展し、それにもなってベルクソンのスペンサーへの批判の仕方が変化をみせるということであった。スペンサーが用いた方法に対する批判に特化していくということがその変化をあらわしている。その方法に対して批判をしつつ、ベルクソンは「補足性」を用いた「真の進化論」と自身で言うような進化論を構築した。ベルクソンは確かに、『思想と動くもの』でスペンサーの思想を補足・完成させる (compléter) つもりだったことを述べていた (PM, 2)。このように見てくると、『直接与件』を踏まえた上で『進化』を考察すると、スペンサーの議論の枠組みを借り受けたことがもつベルクソンの哲学に対する影響は決定的なものであったとすることができると思われる。こうした考察によってテーゼ B は確立されたと思われる。

このように結論づける本研究は、結果的にドゥルーズ批判になっている。ドゥルーズは、『ベルクソンの哲学』の最初の頁で「共感」に触れてはいるものの<sup>1</sup>、この概念に特別な位置づけをあたえることもなくその書物を閉じている。そして彼は差異の哲学を構築する<sup>2</sup>。わたしたちは、本研究で、差異ではなく「補足性」の概念がもつベルクソン哲学における重要性を明らかにした。この概念は、スペンサーとベルクソンの関係を「共感」概念を介した影響関係のうちにみ

てとることによってその重要性を現した概念であった。わたしたちはドゥルーズによってベルクソン哲学が汲み尽くされたと考えることはできない。特に「実在」の概念を巡ってわたしたちにはまだ問う余地が残されていると思われる。そして、この「生命」としての「実在」を変化そのものである「進化」として捉える仕方を、ベルクソンが「補足性」の概念を用いて明らかにしていたことは、本研究において見た通りである。本研究は、ドゥルーズ以降のベルクソン研究に対して、ドゥルーズとは別に考えるための方法を提供することに寄与するものであると考える。

本研究の成果は更に次のような意味を持つと考える。本研究で扱うことになった「共感」概念は、本研究では少なくとも一種の反知性主義を導き入れる契機になっていることが示されたと考える。というのも、ベルクソンは最終的には「共感」を「直観」や「本能」と関連づけることになったが、「知性」を「補足」という立場を与えていることから見て、それは「共感」に科学的な説明を与えることを断念したという痕跡でもあると思われるからである。しかし、ベルクソンはそれが科学的に説明できないからといって、それを無いものとして扱うことはしなかった。それどころか、その概念を軸にして最終的には自身の哲学を構築したということになるだろう。そして、この「共感」は社会学や宗教についての考察へと引き継がれ、「開かれたもの」への考察へと展開していったのである。

現代において、「共感」概念を考察する重要性は更に深まっていると考えられる。「絆」や「連帯」といった概念がわたしたちの生活を形づくるものとして台頭してきたというのが、その証拠であると思われる。「共感」とは何か、これをベルクソンの言葉によってではなく語ることがわたしたちには課題として残されていると考える。そして、この概念を巡る問いは、わたしたちが豊かに共に生きていきたいと考える限り、消えることがないであろう。

---

<sup>1</sup> 「直観は感情・靈感・混乱した共感ではなく、苦心して作られたひとつの方法であり、彼の哲学の方法のなかで、最も入念に作られたもののひとつである」、『ベルクソンの哲学』宇波彰訳、東京：法政大学出版局、1997年、p. 3。« L'intuition n'est pas un sentiment ni une inspiration, une sympathie confuse, mais une méthode élaborée, et même une des méthodes les plus élaborées de la philosophie. », Gilles Deleuze, *Le bergsonisme*, Paris: P.U.F., 1966, p. 1.

<sup>2</sup> ドゥルーズの『差異について』 (*La conception de la différence chez Bergson. L'île déserte et autres texts*, Les éditions de Minuit, p. 43-72)、および『ベルクソンの哲学』を引きつつ、檜垣氏は次のように述べている。「ドゥルーズはベルクソンから、「差異」という、ドゥルーズ自身の思考の骨組みであるような概念装置を引きだしている。「差異」とは、ベルクソン本人がさほど際だたせていた概念であるとはいえない、しかしドゥルーズは、その見事に一貫したベルクソン読解のなかで、二十世紀思想において重要なこの概念を、ベルクソンのテキストのなかから見出そうとしている」。檜垣立哉、「ベルクソンとドゥルーズ」、『ベルクソン読本』、東京：法政大学出版局、2006年、p. 242。

## 参考文献

### 1 ベルクソンに関して

- 石井敏夫、『ベルクソンの記憶力理論』、千葉：理想社、2001年。
- 石井敏夫、『ベルクソン化の極北 石井敏夫論文集』、千葉：理想社、2007年。
- 市川浩、『ベルクソン』、東京：講談社、1991年。
- 澤瀉久敬、『ベルクソンの科学論』、東京：中央公論社、1979年。
- 杉山直樹、「私たちをかたちづくる力」、『ベルクソン 道徳と宗教の二つの源泉 I』、森口美都男訳、東京：中央公論新社、2003年、pp. i-xxviii。
- 杉山直樹、『ベルクソン 聴診する経験論』、東京：創文社、2006年。
- 檜垣立哉、『ベルクソンの哲学 生成する実在の肯定』、東京：勁草書房、2000年。
- 前田英樹、『ベルクソン哲学の遺言』、東京：岩波書店、2013年。
- 三宅岳史、「神経学とベルクソン哲学」、『エピステモロジーの現在』、東京：慶應義塾大学出版会、2008年、pp. 151-184。
- 三宅岳史、『ベルクソン 哲学と科学との対話』、京都：京都大学学術出版会、2012年。
- 村山達也、「ベルクソン『直接与件』における問題と実在」、『哲学』、第60号、東京：知泉書館、2009年、pp. 279-293。
- 山口裕之、「生命の認識」、『エピステモロジーの現在』、東京：慶應義塾大学出版会、pp. 289-345。
- ディオゲネス・ラエルティオス、『ギリシア哲学者列伝(上)』、加来彰俊訳、東京：岩波書店、1984年。
- 『ソクラテス以前哲学者断片集 第一分冊』、内山勝利他訳、東京：岩波書店、1996年。
- 『西洋哲学史4 「現代の哲学」への回り道』、神崎繁他編、東京：講談社、2012年。
- 『ベルクソン読本』、久米博他編、東京：法政大学出版局、2006年。
- Marie Cariou, *Bergson et Bachelard*, Paris: P.U.F., 1995. (邦訳『ベルクソンとバシュラール』、永野拓也訳、東京：法政大学出版局、2005年)
- Yvette Conry, *L'évolution créatrice d'Henri Bergson*, Paris: L'harmattan, 2000.
- Jacques Chevalier, *Entretiens avec Bergson*, Paris: Plon, 1959. (邦訳『ベルクソンとの対話』、仲沢紀雄訳、東京：みすず書房、1969年)
- Gilles Deleuze, *Le bergsonisme*, Paris: P.U.F., 1966. (邦訳『ベルクソンの哲学』、宇波彰訳、東京：法政大学出版局、1974年)
- Gilles Deleuze, *L'image mouvement (Cinema I)*, Paris: Minuit, 1983. (邦訳『シネマ1 運動イメージ』、財津理・斎藤範訳、東京：法政大学出版局、2008年)
- Gilles Deleuze, *L'image-temps (Cinema II)*, Paris: Minuit, 1985. (邦訳『シネマ2 時間イメージ』、

- 宇野邦一他訳、東京：法政大学出版局、2006年)
- S. Dresden, « Bergson et l'esthétique », *Les études bergsoniennes*, Volume IV, Paris, 1956.
- Dominique Janicaud, *Une Généralogie du spiritualisme française*, Nij-hoff, 1969.
- Vladimir Jankélévitch, *Henri Bergson*, 2éd., Paris: P.U.F., 1959. (邦訳『アンリ・ベルクソン』阿部一智他訳、東京：新評論、1988年)
- Dominique Jous, « Le souffle de Dieu dans l'Évolution créatrice », *Les Études Bergsoniennes XI*, Paris: P.U.F., 1976.
- Madeleine Barthélemy-Madaule, *Bergson, adversaire de Kant*, Paris: P.U.F., 1966.
- Jacques Monod, *Le hasard et la nécessité. Essai sur la philosophie naturelle de la biologie moderne*, Paris, 1970. (邦訳『偶然と必然』、渡辺格、村上光彦訳、東京：みすず書房、1971年)
- Alexis Philonenko, *Bergson, ou, De la philosophie comme science rigoureuse*, Paris: Édition du clef, 1994.
- Frédéric Worms, *Introduction à Matière et mémoire de Bergson*, Paris: P.U.F., 1997.
- Frédéric Worms, « La conception bergsonienne du temps », *Philosophie*, n°54, juin 1997, pp. 73-91.
- Frédéric Worms, *Bergson ou les deux sens de la vie*, Paris: P.U.F., 2004.
- Frédéric Worms, « La vie dans la philosophie du XX<sup>e</sup> siècle en France », *PHILOSOPHIE*, N°109, Paris: Les éditions de minuit, 2011, pp. 74-91.
- Annales bergsoniennes I. Bergson dans la siècle.*, édité et présenté par Frédéric Worms, Paris: P.U.F., 2002.
- Annales bergsoniennes III. Bergson et la science. Avec des inédits de Bergson, Canguilhem, Cassirer.*, édité et présenté par Frédéric Worms, Paris: P.U.F., 2007.
- Annales bergsoniennes V. Bergson et la politique : de Jaurès à aujourd'hui.*, Paris: P.U.F., 2012.
- L'Évolution créatrice de Bergson*, édité par Arnaud François, Paris: J. Vrin, 2010.
- « Bergson et l'idéalisme allemande », *Les Études philosophiques*, No. 4, Octobre-Décembre, Paris: P.U.F., 2001.

## 2 スペンサーに関して

『第一原理』(上)(下)、澤田謙訳、東京：而立社、1923年。

『世界大思想全集 28 第一原理』、沢田謙訳、東京：春秋社、1927年。

『世界の名著 46 コント スペンサー』、清水幾太郎編、東京：中央公論新社、1980年。

赤塚徳郎、『スペンサー教育学の研究』、東京：東洋館出版社、1993年。

河野哲也、「フランス心理学の誕生——なぜフランスでは「実験心理学」が成立しなかったの

- か——』、『エピステモロジーの現在』、東京：慶應義塾大学出版会、2008年、pp. 237-288。
- 挟本佳代、『社会システム論と自然／スペンサー社会学の現代性』、東京：法政大学出版局、2000年。
- 山下重一、『スペンサーと日本近代』、東京：御茶の水書房、1983年。
- ダーウィン、『種の起原（上）』、八杉龍一訳、東京：岩波書店、2009年。
- J・ラムネー、『スペンサーの社会学』、山田隆夫訳、愛知：風媒社、1970年。
- 『ダーウィニズム論集』、八杉龍一編、東京：岩波書店、1994年。
- 『哲学の歴史』、第8巻、伊藤邦武編、東京：中央公論新社、2010(2007)年。
- W. H. Hudson, *An introduction to the philosophy of Herbert Spencer*, 2<sup>nd</sup> edn. London, 1897; reprinted edn, New York, 1974.
- J. D. Y. Peel, *Herbert Spencer: The evolution of a sociologist*, London, 1971.
- D. Wiltshire, *The Social and Political Thought of Herbert Spencer*, Oxford University Press, 1978.
- Herbert Spencer: Critical assessments*, edited by J. Offer, London, 2000.

### 3 スペンサーとベルクソンの関係に着目する先行研究

- 杉山直樹、「「知性の発生」と科学論——『創造的進化』読解のために」、『ベルクソン読本』、久米博他編、東京：法政大学出版局、2006年。
- 杉山直樹、『ベルクソン 聴診する経験論』、東京：創文社、2006年。
- 三宅岳史、『ベルクソン 哲学と科学との対話』、京都：京都大学学術出版会、2012年。
- Pierre d'Aurec, « De Bergson spencerien au Bergson de l'“Essai” », *Archives de philosophie*, volume XVII, cahier 1, *Bergson et Bergsonisme*, 1947, pp. 102-121.
- Hervé Barreau, « Bergson face à Spencer », *Archives de Philosophie*, Paris, 2008, pp. 219-243.
- Arnaud François, « Qu'est-ce que Bergson entend par “monisme” ? Bergson et Haeckel », dans *Journées d'études Lire Bergson*, organisées par Fr. Worms, C. Riquier, Ch. Berner & Ph. Sabot. Ciepf, « savoirs, textes, langage » avec la société des amis de Bergson., 2010.
- Sébastien Miravète, « Spencer, Renouvier. comment Bergson a-t-il inventé la durée? », 京都大学での口頭発表原稿。なお、2012年のこの口頭発表原稿は、ミラヴェット氏の博士論文 “La durée bergsonienne comme nombre et comme morale” (2011年にトゥルーズ大学に提出、未刊行、インターネット上で閲覧可) において構想されているものである。
- Sébastien Miravète, « La durée bergsonienne comme nombre spécial », *Annales bergsoniennes V*, Paris: P.U.F., 2012.
- C. U. M. Smith, « Herbert Spencer and Henri Bergson », *Chromatikon VI: Annales de la philosophie en ptocès / Yearbook of Philosophy in Process*, vol. 6., Louvain-la-Neuve: Les éditions chromatika,

2010, pp. 191-202.

Patricia Verdeau, « Sur la relation de Bergson à Spencer », *Annales bergsoniennes III. Bergson et la science.*, Paris: P.U.F., 2007, pp. 361-376.

ベルクソンとスペンサーとの関わりを社会論の関係において考察したものとして、他に伊東俊彦「社会を「閉じる」力・「開く」力——ベルクソンの『道徳と宗教の二源泉』における社会論——」（博士論文、東京大学）があり、部分的に参照した。

#### 4 19、20世紀イギリスとフランスにおける思想状況

川口茂雄、「一九世紀フランス哲学の潮流」、『哲学の歴史』第八巻、伊藤邦武編、東京：中央公論新社、2010年（2007年）、pp. 174-267。

Jean Lefranc, *La philosophie en France au XIX<sup>e</sup> siècle, Que sais-je?*, Paris: P.U.F., 1998. (邦訳『十九世紀フランス哲学』、川口茂雄他訳、東京：白水社、2014年)

George Herbert Mead, *Movements of thought in the nineteenth century*, edited by Merritt H. Moore, Chicago: University of Chicago Press, 1936. (邦訳『デューイ＝ミード著作集 15 十九世紀の思想運動』、河村望訳、東京：人間の科学新社、2002年)

#### 5 本論文を作成するための方法に関して

鈴木祐丞、『キェルケゴールの信仰と哲学——生と思想の全体像を問う——』、京都：ミネルヴァ書房、2014年。